

合ハ第五百五十四條第一項及第二項ニ其ノ特例ヲ明定セリ而シテ所問ノ賭博罪ニ依リ罰金刑ニ處セラレタル者判決確定後死亡シタル場合ハ此特例ニ該當セザルヲ以テ本則ニ隨ヒ相續財産ニ就キ罰金刑ノ執行ヲ爲スコトヲ得サルモノト解スヘシ。(法曹會大正十五年十二月十一日決議、法曹會雜誌五卷三號一三四頁)

三(舊)相續人ニ對スル罰金刑ノ執行(刑訴法三三二頁)

四 罰金又ハ追徴金ト相續人トノ關係(續刑法三二頁)

五 罰金分納者ノ死亡ト其ノ後ノ義務(續刑法三三頁)

◎被告人ノ死亡ト公訴費用ノ徵收

一(法曹會)被告人ヲシテ公訴ノ訴訟費用ヲ負擔セシムル裁判ハ被告人カ裁判ノ確定後死亡シタル場合ニ於テハ相續財産ニ就キ之ヲ執行シ得ルモノトス刑事訴訟法第五百五十四條第一項ノ罰金及追徴ニ關スル規定ハ刑罰及之ト同視スヘキ性質ヲ有スル制裁ノ一種ニ屬スルモノニ付特殊ノ場合ハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ死亡後モ相續財産ニ就キ執行ヲ爲スコトヲ得ルモノトシ所謂刑ハ一身上ニ止ルノ原則ニ對スル除外例ヲ明規シタルニ外ナラス公訴ノ訴訟費用ノ負擔ノ如キハ全然是等ノ

第五百五十五條
△財産刑ノ執行ト法人合併ノ場合

1 法人ニ對シ罰金、科料、沒收又ハ追徴ヲ言渡シタル場

モノト性質ヲ異ニシ只公法上ノ一債權關係タルニ過キサルヲ以テ之カ負擔ヲ被告人ニ命シタル裁判ノ確定後被告人ニシテ死亡スルニ於テハ其ノ裁判ハ相續財産ニ就キ執行スルヲ得ヘキハ勿論ナリ故ニ任意代納スヘキ者アラハ訴訟費用ニ付テハ代納者ヨリ受領スルヲ相當トス但財産刑ニ付テハ前掲刑事訴訟法第五百五十四條ノ制限ニ從フヘキモノナルコト復言ヲ俟タス。(法曹會昭和四年五月十七日決議、法曹會雜誌七卷七號一四四頁)

二(法曹會)訴訟費用ハ刑罰又ハ之ニ類似ノ制裁ニアラスシテ全ク損失ノ補償タルニ過キサルカ故ニ沒收等ノ執行ニ關スル刑事訴訟法第五百五十四條ノ如キ明文アルヲ俟タスシテ當然相續財産ニ付之カ執行ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス。(法曹會大正十五年七月十七日決議、法曹會雜誌四卷十號一〇一頁)

三(舊)相續人ニ對スル裁判費用ノ執行(刑訴法三三三頁)

合ニ於テ其ノ判決確定後合併ニ因リ法人消滅シタルトキハ合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リ設立シタル法人ニ對シテ執行ヲ爲スコトヲ得

第五百五十六條
△未決勾留ノ通算

1 上訴申立後ノ未決勾留ノ日數ハ左ノ例ニ依リ之ヲ本利ニ通算ス

一 檢事ノ上訴ナルトキハ勾留日數ノ全部

二 檢事ニ非サル者ノ上訴ニシテ其ノ理由アルトキハ勾留日數ノ全部

2 前項ノ規定ニ依ル通算ニ付テハ未決勾留一日ヲ刑期ノ一日又ハ金額ノ一圓ニ折算ス

3 上告裁判所原判決ヲ破毀シタル後ノ未決勾留ハ上告中ノ未決勾留日數ニ準シ之ヲ通算ス

◎未決勾留ノ通算ト適用法條

◎檢事ノ附帶控訴ト未決勾留ノ通算

一(行刑局長)檢事ノ附帶控訴理由アリ被告ノ控訴ハ理由ナキ場合ニ於ケル未決勾留日數通算方如何(回答)

一(大審院)未決勾留日數ノ通算ニ付テハ刑法第二十一條ノ規定アリテ未決勾留ノ日數ヲ本利ニ算入スヘキヤ否ヤ又如何ナル割合ヲ以テ之ヲ算入スヘキヤ否ヤニ付テハ之ヲ裁判所ノ職權ニ一任シタリト雖上訴申立後ノ未決勾留日數ノ通算ニ付テハ刑事訴訟法第五百五十六條ニ於テ特ニ之ヲ規定シ同規定ノ場合ニ該當スルトキハ必ス之ヲ本利ニ通算シ且其ノ通算ニ付テハ一定ノ割合ニ依ルヘキコトヲ明示シタルヲ以テ上訴申立後ノ未決勾留日數ノ通算ニ付テハ當然ニ刑事訴訟法第五百五十六條ノ規定ヲ適用スヘク刑法第二十一條ノ規定ハ之ヲ適用スヘキ限ニ在ラスト解スルヲ正當トス左レハ原判決カ被告人ノ控訴ヲ理由アリト認メタル本件ニ於テ上訴申立後ノ未決勾留日數ノ算入ニ付テハ刑法第二十一條ヲ適用シタルハ違法ナリ。(大審院昭和三年(レ)第一五二號同年三月二十二日第二刑事部判決破毀自判、大審院判例集七卷三號刑事一九六頁)

二 本條後出「法定通算ト裁定通算トノ競合」ノ二

檢事ニ非サル者ノ控訴ニ附帶シテ檢事カ控訴ヲ爲シタル事件ニ付實質ニ於テ原判決ト符合セサル判決ヲ言渡シタルトキハ檢事ニ非サル者ノ控訴モ結局其ノ理由アルニ歸スルヲ以テ刑事訴訟法第五五六條第一項第二號ニ則リ檢事ニ非サル者ノ上訴申立後ノ未決勾留日數全部ヲ本刑ニ通算スヘキモノトス。(行刑局長大正十三年七月二十六日行丙第一三四三號通牒、法律新聞二二二號一二頁)

◎檢事控訴被告人上告ト勾留ノ通算

一 (行刑局長) 第一審裁判所カ大正十二年十月二十四日被告人ヲ勾留シ審理ノ結果無罪ノ言渡ヲ爲シ其判決ニ對シ同年十一月二十日檢事カ上訴申立ヲ爲シ(檢事ノ上訴迄未決勾留廿七日) 第二審ニ於テハ同年十二月十五日有罪ノ判決ヲ爲スト同時ニ未決勾留日數三十日ヲ本刑ニ算入スル旨ノ言渡ヲ爲シ且即日保釋出所セシメタリ(檢事上訴後保釋迄ノ勾留日數二十六日) 然ルニ被告ハ右判決ニ對シ上告申立ヲ爲シ大正十三年三月二十日上告棄却ノ判決アリテ第二審判決通り裁判確定シタル場合ノ未決勾留ノ算入方ニ付テハ檢事上訴後ノ未決勾留日數全部ハ刑事訴訟法第五五六條適用ノ結果當

然本刑ニ算入セラレ判決ニ掲ケタル未決勾留通算ノ目的トナラス依ツテ檢事ノ上訴前ニ於ケル未決勾留ヲ通算スヘキ筋合ナルモ本件ノ場合ハ其日數二十七日ニシテ判示ノ三十日ニ滿タサルニ依リ現存スル未決勾留日數以上ノ日數ヲ通算スヘキ旨言渡シタル執行不能ノ判決ト同様ニ取扱ヒ通算シ得ヘキ二十七日丈ヲ算入シ其餘ヲ不問ニ付スヘキモノトス。(行刑局長大正十三年四月二十八日行甲五四三號通牒、法律新聞二二六九號一六頁)

◎二個ノ勾留狀ト本刑ノ通算

◎法定通算ト裁定通算トノ競合

一 (平井氏) 區裁判所事件ニ付勾留狀執行中ノ被告人ニ對シ豫審請求アリタル場合豫審判事ハ其請求事件ニ付更ニ勾留狀ヲ發シ得ルモノトス此場合數個ノ勾留狀競合シ公力ノ衝突アルカ如キモ理論上毫モ妨ケナシ蓋シ勾留ハ證據湮滅犯人ノ逃走ヲ防止スルニアリテ是等ノ防止ハ既ニ勾留狀ヲ執行セラレタル者ニ更ニ勾留狀ヲ執行シ其目的ヲ達シ得レハナリ未決勾留日數ノ本刑通算ハ勾留狀ハ數個アリトスルモ未決勾留ハ一個ナルカ故ニ本刑通算ハ何レカ最初ニ通算スヘキ其一ニ止ムヘ

ク一個ノ未決勾留日數ヲ各別ニ本刑ニ通算シ得ヘキモノニ非ス。(檢事平井彦三郎氏、法學新報三九卷二號一一四頁)

二 (大審院) 刑事訴訟法第五五十六條ニ依レハ上訴申立後ノ未決勾留日數ハ同條所定ノ例ニ依リ之ヲ本刑ニ通算スヘキコトヲ規定スト雖第一審ニ於ケル未決勾留及檢事ニ非サル者ノ上訴ヲ棄却セル場合ノ上訴申立後ノ未決勾留日數ノ通算ニ付テハ刑法第二十一條ニ依リ之ヲ通算スル場合ノ程度如何ヲ全然裁判所ノ自由裁量ニ委スルカ故ニ裁判所カ被告事件ノ審理經過ノ狀況ニ照ラシ第一審ニ於ケル未決勾留日數ノ通算ヲ爲スヘキモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ之ヲ本刑ニ算入スルヲ得ヘキコト勿論ナルヲ以テ同一人ニ對スル數個ノ被告事件ニ付夫々勾留狀ヲ發布シ之ヲ同時執行セル場合ニ於テハ勾留日數トシテハ事實拘禁セラレタル日數アルニ止マレトモ該勾留タルヤ本來事件ヲ異ニスル別個ノ勾留狀ニ基クモノナレハ其ノ一事件ノ第一審未決勾留タル點ニ於テ裁判所ハ上叙ノ裁定通算ヲ爲スヲ得ヘキモノニシテ勾留狀ヲ同時ニ執行シタル結果トシテ右裁定通算カ偶他事件ノ刑事訴訟法第五五十六條ニ依リ法定通算ト競合スレハトテ右裁定通算ヲ妨グルノ事由ト爲スニ足ラサルナリ然レトモ裁判ノ執行ニ際シテハ

同一勾留日數ヲ二重ニ通算シ得サルコト自明ノ理ナルカ故ニ斯ノ如ク未決勾留ノ裁定通算ト法定通算トカ競合スルニ於テハ事實拘禁セラレタル日數ヲ算入スルヲ以テ之カ執行ヲ完了スルモノト謂フヘク所謂ノ如ク裁定通算ト法定通算トチ二回ニ算入スヘキモノニ非ス

三 (同上) 而シテ本院カ被告人宗久ニ對シ昭和二年三月十六日言渡シタル判決主文ニ依レハ被告人宗久ヲ懲役一年ニ處シ右本刑ニ對シ第一犯罪ノ第一審未決勾留日數四十日第三犯罪ノ同上六十日ヲ通算スヘキコトヲ宣告シタルコト明白ニシテ其ノ解釋上寸毫ノ疑惑ヲ挾ムノ餘地ナキモノトス而シテ記録ヲ查スルニ判示第二犯罪ノ法定通算ヲ爲スヘキ上訴申立後ノ未決勾留ハ大正十一年二月四日ヨリ同年九月三十日ニ至ル二百廿九日ニシテ裁定算入セラルヘキ第一犯罪ノ第一審未決勾留ハ同年三月四日ヨリ同年九月五日迄ノ中四十日ナレハ右第一審未決勾留四十日ハ前記法定通算ノ勾留日數中ニ包含セラレルコト明ナルカ故ニ該判決ノ執行トシテ本刑ヨリ現實通算セラルヘキ未決勾留日數ハ右競合ノ四十日及第三犯罪ノ第一審未決勾留日數六十日並ニ第二犯罪ノ上訴申立後ノ未決勾留中右四十日ヲ控除セル殘餘百九十九日及第三犯罪ノ上訴申立後ノ未決勾留日數二十二日ナリトス然レハ之ト同一ニ出テタル檢事

ノ執行指揮ハ正當ニシテ本件申立ハ執レモ理由ナキヲ以テ刑事訴訟法第五百六十四條ヲ適用シ主文ノ如ク決定ス。(大審院昭和二年(九)第二號同年四月四日判決棄却、判例彙報三八卷刑事下六五頁)

◎無期刑ト未決勾留ノ通算

一(法曹會)無期刑ニ付テハ未決勾留日數ノ通算ハ其ノ性質上之ヲ施スノ餘地ナキモノトス何トナレハ未決勾留日數ノ通算ハ本刑ノ内容ヲ變更スルモノニ非スシテ止タ其ノ執行ニ付通算セラルヘキ日數ヲ以テ恰モ本刑ヲ執行シタルモノト同一ニ看做スニ過キサレハナリ。(法曹會昭和三年十二月十四日決議、法曹會雜誌七卷二號七三頁)

附、無期刑ニ付テハ一〇年ヲ經過シタル後ニ非サレハ絕對ニ假出獄ハ許サルヘキニ非ス其ノ通算セラルヘキ未決勾留日數ノ存否ノ如キハ問フ所ニ非サルナリ蓋シ未決勾留日數ノ通算ハ前述ノ如キ性質ヲ有スノミナラス刑法第二八條ニ「有期刑ニ付テハ其刑期三分ノ一云々」トアルニ徴シテモ明瞭ナルヘシ。(同上)

◎禁錮刑ノ受刑中ト未決勾留ノ通算

留日數中百二十日ヲ本刑ニ通算スル旨ヲ言渡シタルヲ以テ同院ハ禁錮刑ノ執行ヲ受ケタル者ニ對シ豫審判事カ發シタル勾留狀ノ執行ニ依リ生シタル未決勾留日數ヲ本刑ニ通算シタルハ失當ナルモ前記判決ニシテ確定シタル今日ニ於テ之レカ執行トシテハ其ノ宣言シタル未決勾留日數全部ヲ本刑ニ通算スルヲ相當トス。(大審院大正十五年(一)第一九號同年八月二日第五刑事部決定棄却、大審院判例集五卷十號刑事四〇一頁)

三(小野氏)決定ハ蓋シ正當ト謂フノ外ナカラウト思フ現ニ自由刑ノ執行ヲ受ケツツアル者ニ對シテ勾留狀ヲ發スルコトハ現行刑罰法ノ明カニ認ムルコトコロテアルノミナラス(第九〇條第三項第一〇〇條第二項)手續ノ實際其ノ必要ヲ存スルノテアル而シテ此ノ場合ニ於テ自由刑ノ執行力停止サレト考ヘルコト一理ナシトセヌカ(自由刑ノ執行ト未決勾留トハ其ノ本質ヲ異ニスルノミナラスマタ實際ノ形態ニ於テモ全然同一テハナイ)シカシ事實ニ於テ兩者ハ共ニ監獄ニ於ケル拘禁テアリ而シテ法律上未決勾留ノ本刑通算カ認メラレル位テアルカラ(刑法第二一條刑罰法第五五六條)自由刑ノ執行ヲ受ケツツアル者ニ對シテ勾留狀ノ執行アルモ之カタメニ自由刑ノ執行ハ停止サレズ即チ一面ニ於テ自由刑ノ執行アルト共ニ他面勾留狀ノ執行アルモノ

一(大審院)甲事件ニ付言渡サレタル禁錮刑ノ執行ヲ受ケル者ニ對シテ乙事件ニ付勾留狀ヲ發シ之ヲ執行スルトキハ之方爲其ノ刑ノ執行ヲ停止スヘキ法定ノ理由ヲ生セサルヲ以テ右ノ場合ニ於テハ一面甲事件ニ付テノ禁錮執行アルト同時ニ他面乙事件ニ付テノ未決勾留存スルモノトス而シテ未決勾留日數ヲ本刑ニ算入スル立法上ノ理由ニ鑑ミレハ叙上ノ場合乙事件ニ付判決ヲ爲スニ當リテハ未決勾留日數ヲ本刑ニ算入セサルヲ相當トナスト雖既ニ判決ニ於テ未決勾留ノ日數ヲ本刑ニ算入スル旨言渡シタル以上ハ現ニ乙事件ニ付未決勾留存スルコト前記示ノ如クニシテ其ノ判決ノ執行ハ決シテ不可能ニ非サルヲ以テ之ヲ本刑ニ算入シテ執行スルノ外ナキモノトス

二(同上)記録ヲ查スルニ被告清ハ曩ニ治安警察法違反被告事件ニ付大正十二年四月十四日東京控訴院ニ於テ禁錮八月ノ罰席判決ノ言渡ヲ受ケ同月三十日同判決ノ告知ヲ受ケ同年五月四日確定シ即日刑ノ執行ヲ受ケタル處其ノ執行中同年六月六日日本治安警察法違反被告事件ニ付豫審判事ノ發シタル勾留狀ノ執行ヲ受ケ同年十二月二十六日保釋許可決定ヲ受ケ同十三年一月四日前記ノ刑期満了シ放免トナリタルモノニシテ東京控訴院ハ本件ニ於テ被告清ニ對シ禁錮八月ニ處ス未決勾

ト解スルコトハ最モ公平ニ合スル解釋テアラウ此ノ前提ノ下ニ裁判所ハ其ノ未決被告事件ノ判決ヲ爲スニ當リ更ニ其ノ未決勾留日數ヲ本刑ニ算入スルコトヲ爲スヘキモノトナイコトハ明カテアル蓋シ未決勾留ノ本刑通算ナル制度ナルモノカ未決勾留ヲ以テ自由刑ノ執行ニ換價セシムル趣旨ニ出ツルモノテアルカラ若シ叙上ノ場合ニ通算ヲ認ムルニ於テハ恰モ單一ノ未決勾留ヲ二重ニ自由刑ノ一部トシテ換價スル結果ニ陥ルノテアルサリナカラ既ニ判決ヲ以テ之ヲ言渡シ其ノ判決力確定シタル以上ハ執行ノ手續ニ於テ之ヲ左右スルコトハ出來ヌ其ハ判決其ノモノノ確定力ヲ無視スルコトニナルカラテアル此ノ考慮ノ前ニ判決ソノモノニ於ケル上述ノ不都合ハ看過サレル外アルマイ此ノ意味ヲ事柄自體ニ對スル遺憾ハアルカ結局決定ノ正當ヲ信スルモノテアル。(法學士小野清一郎氏、法學協會雜誌四五卷八號六八頁)

◎未決勾留ノ通算ト勞役場留置日數

一(平井氏)被告人ノ未決勾留中勞役場留置ヲ執行スルトキハ其未決勾留日數ハ日々勞役場留置日數トシテ計算セラレ控訴理由アリタル判決確定當時ニ於テハ此執

行濟ノ勞役場留置日數ニ相當スル未決勾留日數ハ法律上存在セサル場合ナルヲ以テ此不存在ノ未決拘留日數ヲ本刑ニ通算スルコトハ不可能ナリ從テ算入スヘキモノニ非ス。(檢事平井彦三郎氏、法學新報三九卷一三頁)

◎二號「上訴理由アルトキ」ノ意義

一 (平井氏) 刑事訴訟法第五五六條第一項第二號ニ所謂上訴ニシテ其理由アルトキトハ控訴上告各審級毎ニ觀察シ其控訴又ハ上告ノ理由アルトキヲ謂フモノトス。(檢事平井彦三郎氏、法學新報三十八卷一號一一五頁法律評論十八卷刑訴四頁)

◎未決勾留ノ通算ニ關スル諸問

- 一 控訴ヲ理由アリトスル場合(第四〇一條)
- 二 (舊) 未決勾留ノ通算(刑訴法三三二頁)
- 三 (舊) 勾留日數ノ通算方(續刑法五一頁)
- 四 (舊) 未決勾留日數算入ノ當否(續刑法四九頁)

◎違法ナル判決ノ確定ト其ノ執行

- 一 (舊) 違法ナル判決書ノ確定ト其ノ執行(刑訴法三三二頁)
- 二 (舊) 軍人ニ對スル普通裁判ト其ノ執行(刑訴法三三二頁)

第五百五十七條

△沒收物ノ處分

1 沒收物ハ檢事之ヲ處分スヘシ

第五百五十八條

△沒收物交付ノ請求

1 沒收ノ執行後三月内ニ權利ヲ有スル者ヨリ沒收物ノ交付ヲ請求シタルトキハ檢事ハ破壞又ハ廢棄スヘキ物ヲ除クノ外之ヲ交付スヘシ

2 沒收物ヲ處分シタル後前項ノ請求アリタル場合ニ於テハ檢事ハ公賣ニ因リテ得タル代價ヲ交付スヘシ

第五百五十九條

△偽造又ハ變造物ノ處分

1 偽造又ハ變造物ニ係ル物ヲ返還スル場合又ハ偽造ニ於テハ變造ノ部分ヲ其ノ物ニ表示スヘシ

2 偽造又ハ變造物ニ係ル物押收セラレタルトキハ之ヲ提出セシメテ前項ニ規定スル手續ヲ爲スヘシ但シ其ノ物公務所ニ屬スルトキハ偽造又ハ變造ノ部分ヲ公務所ニ通知シテ相當ノ處分ヲ爲サシムヘシ

◎偽造又ハ變造物ノ處分

一 第五三三條「沒收ノ執行ニ關スル諸問」ノ一、二、三參看

第五百六十條

△還付不能ナル押收物ノ處置

1 押收物ノ還付ヲ受クヘキ者ノ所在不明ナル爲又ハ其ノ他ノ事由ニ因リ其ノ物ヲ還付スルコト能ハサル場合ニ於テハ檢事ハ其ノ旨ヲ公告スヘシ

2 公告ヲ爲シタル時ヨリ六月内ニ還付ノ請求ナキトキハ其ノ物ハ國庫ニ歸屬ス

3 前項ノ期間内ト雖價值ナキ物ハ之ヲ廢棄シ保管ニ不便ナル物ハ之ヲ公賣シテ其ノ代價ヲ保管スルコトヲ得

◎質屋取締法ノ徵收物ト本條ノ適用

一 (法曹會) 警察官力質屋取締法第十六條ノ規定ニヨリ遺失物又ハ盜品タル質物ヲ徵收シタル場合ニ於テモ之

◎登記簿ノ無形偽造ト本條ノ適用

一 (司法協會) 刑事訴訟法第五九條ニハ偽造變造ト云ヒ虛偽記載ノ文字ヲ使用セザリシト雖一般警戒ノ必要上訓示的ニ規定セラレタルモノト解スル限リ虛偽記載ヲ除外スヘキ格別ノ理由存セザルヲ以テ當然之ヲ包含スルモノト爲スチ相當トス

二 (同上) 縱令判決主文ニ表示セラレサルモ判決ノ理由ヨリ登記簿ニ對スル不實記載ノ事實カ十分窺知シ得ラルル場合ハ刑事訴訟法第五九條第二項後段ニ依リ虛偽記載部分ヲ登記所ニ通知シ相當ノ處分ヲ爲サシムヘキモノトス。(朝鮮司法協會大正十四年六月二十日決議、朝鮮司法協會雜誌四卷六號一五頁)

ヲ押收シタル以上刑事訴訟法第五百六十條ノ押收物ニ外ナラス。(法曹會昭和五年二月二十八日決議、法曹會雜誌八卷五號一九七頁)

第五百六十一條
△疑義ノ申立

1 刑ノ言渡ヲ受ケタル者裁判ノ解釋ニ付疑アルトキハ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ疑義ノ申立ヲ爲スコトヲ得

◎疑義申立ノ意義及實例

一 (大審院) 疑義申立人申立ノ要旨ハ申立人ハ猥褻被告事件ニ付上告申立ヲ爲シ其ノ審理中公判期日ノ延期申立ヲ爲シタル所上告裁判所ハ之ニ對スル何等ノ決定ヲ爲サスシテ一面昭和四年六月五日上告棄却ノ決定ヲ爲シタルハ裁判ニ疑義アルモノナルニヨリ刑事訴訟法第五百六十一條ニ則リ本申立ヲ爲ス次第ナリト云フニ在レトモ刑事訴訟法第五百六十一條ニ所謂疑義ノ申立ナルモノハ刑ノ言渡ヲ受ケタル者力其ノ判決主文ノ解釋ニ付疑アル場合ニ於テ始メテ許サルヘキモノニシテ所論ノ如ク公判期日ノ延期申立ヲ爲シタル場合ニ之カ許

◎判決確定前ノ疑義申立ノ可否

一 (大審院) 刑ヲ言渡シタル裁判ニ對スル疑義ノ申立ハ

否ニ關シ不服ヲ唱ヘテ上告棄却ノ裁判ニ對シ不當ヲ鳴ラスカ如キハ疑義ノ申立トシテ許サルヘキモノニ非サルカ故ニ本申立ハ不適法トシテ之ヲ棄却スヘキモノトス仍テ刑事訴訟法第五百六十四條ニ則リ主文ノ如ク決定ス。(大審院昭和四年(九)第五號同年六月二十二日第三刑事部決定棄却、法律新報一九三號一八頁)
二 (大審院) (舊) 竊盜強盜被告事件ニ付大正五年八月二十二日東京控訴院ニ於テ言渡シタル確定判決ニ對シ再審ノ申立ヲ爲シ同年五月二十一日當院ニ於テ之カ棄却ヲ言渡シタル判決ニ付刑事訴訟法第三二二條ニ依リ疑義ノ申立トシテ書面ヲ提出シタルモ右ハ刑ノ言渡ニ非サルヲ以テ同條ニ依リ疑義ノ申立ヲ爲スヲ得サルモノトス。(大審院大正九年(九)第四號同年六月十六日第三刑事部決定棄却、法律新報一七二八號一八頁)
三 (舊) 疑義申立ヲ爲シ得ヘキ場合(刑訴法三三四頁)
四 (舊) 訴訟費用ニ關スル疑義申立(刑訴法三三四頁)
五 (舊) 上告棄却ト異議又ハ疑義申立裁判所(刑訴法三五頁)

刑ヲ言渡シタル執行力アル裁判ノ主文ノ解釋ニ付疑義ノ存スル場合ニ裁判所ニ對シテ之カ說明ヲ求ムルノ手續ニ外ナラサレハ其ノ裁判ノ確定前ニ在テハ該申立ヲ爲スコトヲ許ササルモノト解セサルヘカラス蓋シ刑ヲ言渡シタル裁判ハ其ノ確定前ニ在テハ執行セラルルコトナキハ勿論上訴ニ依リテ變更セラルルコトアルヘキカ故ニ之ニ對シ疑義ノ申立ヲ許スノ必要利益共ニ存在セス且叙上ノ如ク解釋スルニ依リテ始メテ疑義申立ノ規定カ刑事訴訟法中裁判ノ執行ニ關スル第八編ニ置カレタル所以ヲ了解シ得ヘケレハナリ

◎異議ノ申立ヲ爲スヘキ裁判所

一 (大審院) 裁判ノ執行ヲ受ケル者ノ執行ニ關スル異議ノ申立ハ刑事訴訟法第五百六十二條ノ規定ニ依リ執行

二 (同上) 今本件記録及抗告人ニ對スル放火未遂脅迫被告事件ノ記録ヲ調査スルニ抗告人ハ右被告事件ニ付大正十五年三月二十九日大阪控訴院ニ於テ言渡サレタル有罪ノ判決ニ對シ同年四月二日日本件疑義ノ申立ヲ爲シ一面同月五日上告ノ申立ヲ爲シ該被告事件ハ現ニ本院ニ繫屬中ナルコト明ナレハ叙上ノ理由ニ依リ本件疑義ノ申立ハ不適法トシテ之ヲ却下スヘキモノトス。(大審院大正十五年(一)第九號同年五月十九日第三刑事部決定棄却、大審院判例集五卷五號刑事一八二頁)

第五百六十二條
△異議ノ申立

◎刑ノ執行ニ對スル異議ノ理由

日福岡地方裁判所ニ於テ懲役二年ノ言渡ヲ爲シ同年十月七日當院ニ於テ被告人ノ上告ヲ棄却シタルモノナルモ當院ニ於テハ刑ヲ言渡ササルモノナルヲ以テ執行ニ關スル本件異議申立ハ刑ヲ言渡シタル第二審裁判所即チ福岡地方裁判所ニ對シ之ヲ爲スヘキモノトス故ニ當院ニ爲シタル本件異議ノ申立ハ不適法ナレハ之ヲ却下スヘキモノトス。(大審院昭和二年(九)第六號同年九月一日第五刑事部決定却下、大審院判例集六卷九號刑事三四一頁)

- 一 (大審院) (舊) 刑事訴訟法第三百二十二條ニ所謂刑ノ執行異議ノ申立ハ確定裁判ニ因リ刑ノ執行ヲ受ケル者カ其執行ノ不法ナルコトヲ理由トシテ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ對シ爲スヘキモノニシテ審理手續ノ違法等ヲ理由トシテ爲スヘキモノニ非ス。(大審院大正七年(一)) 第八號同年六月七日第一刑事部決定棄却、法律新聞一四三九號二四頁)
- 二 通算刑ノ主文ヲ缺ク執行異議(刑訴法三三四頁)
- 三 刑ノ執行ニ對スル再度ノ異議(刑訴法三三四頁)

第五百六十三條

△疑義又ハ異議ノ申立及取下ト方式

- 1 疑義又ハ異議ノ申立ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ
- 2 疑義又ハ異議ノ申立ハ決定アル迄之ヲ取下クルコトヲ得
- 3 疑義又ハ異議ノ取下ハ書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ
- 4 第三百九十一條ノ規定ハ疑義又ハ異議ノ申立及其ノ取下ニ付之ヲ準用ス

第五百六十四條

- △疑義又ハ異議申立ト裁判
- 1 疑義又ハ異議ノ申立ヲ受ケタル裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キ決定ヲ爲スヘシ此ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五百六十五條

△勞役場ノ留置

- 1 罰金又ハ科料ヲ完納スルコト能ハサル爲シタル勞役場留置ノ執行ニ付テハ刑ノ執行ニ關スル規定ヲ準用ス

◎勞役場留置期間ノ起算點

- 一 (刑事局長) 從來罰金科料ヲ完納セサル者ニ對シ新法ニヨリ勞役場留置執行ノ爲メ逮捕狀ヲ發シタルトキハ其執行ノ日ヨリ留置期間ヲ起算スヘキモノトス。(刑事局長大正十二年刑事九五四六號回答、法曹會雜誌二卷二號一〇二頁)

◎勞役場留置ノ執行ト懲役刑ノ執行停止(第五三七

條)

第五百六十六條

△執行費用ノ負擔及其ノ取立

- 1 第五百五十三條第一項ノ裁判ノ執行ノ費用ハ執行ヲ受ケル者ノ負擔トシ民事訴訟法ニ準シ執行ト同時ニ之ヲ取立ツヘシ

◎(舊) 刑事執行費用徵收方ノ疑義(刑訴法三三四頁)

第九編 私 訴

第一章 通 則

第五百六十七條

△私訴ノ提起

續刑事訴訟法 私訴 通則

- 1 犯罪ニ因リ身體、自由、名譽又ハ財産ヲ害セラレタル者ハ其ノ損害原因トスル請求ニ付公訴ニ附帶シ公訴ノ被告人ニ對シテ私訴ヲ提起スルコトヲ得

◎附帶私訴ノ相手方

◎新法ニ適合セサル私訴ノ處置

- 一 (大審院) 本件ハ江口某石野某ニ對スル過失汽車破壞並業務上過失致死傷被告事件ニ附帶シテ被上告人(民事原告人)ヨリ公訴ノ被告人ノ鐵道従業員トシテ使用スル上告人(民事被告人)ニ對シ慰籍料ヲ請求スルモノニ係ル此ノ如ク公訴ノ被告人以外ノ者ヲ相手方トスル私訴ハ舊刑事訴訟法ノ下ニ於テハ敢テ妨ケサル所ナリト雖新刑事訴訟法ハ公訴ノ被告人ヲ相手方トスルモノニ限リ特ニ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ提起スルコトヲ得シム是レ全ク私訴ハ本來民事上ノ請求ナルモ犯罪ヲ原因トスルモノナルカ故ニ公訴ノ審判ニヨリ犯罪ノ存否ヲ確定セハ自ラ其ノ當否ヲ判別スルヲ得ヘク公訴ニ附帶スルヲ便宜トスルニ因リ從テ現行法ハ其ノ附帶性ヲ失ヒ若ハ之ヲ缺クニ至リタル場合ニ於テハ私訴事件ヲ原裁判所又ハ同等ナル他ノ裁判所ノ民事部ニ移送スヘ

シト規定セリ本件ノ如キ現行法上私訴トシテ附帶性ヲ缺クニヨリ許サレサルモノナレトモ既ニ舊法ノ下ニ於テ適法ニ提起セラレ且上訴ノ申立アリタルモノナレハ今直ニ之ヲ不適法トシテ却下シ得ヘキニ非ス唯現行法上附帶私訴トシテ之ヲ存續シ得ヘカラサルノミ

- 二 (同 上) 而シテ附帶私訴トシテ存續スヘカラサルモノニ付テハ叙上ノ如ク第六百七條第六百十條第六百十條等ノ規定ヲ存シ又第六百三十一條カ舊法ノ下ニ提起セラレタル要償ノ訴ニシテ未タ判決ヲ經サルモノニ付民事訴訟法ニ從ヒ事件ヲ管轄スヘキ裁判所ノ民事部ニ移送スヘシト定メタルヨリシテ之ヲ見レハ私訴トシテ附帶性ナキモノ及附隨性ヲ許ササル要償ノ訴ハ孰レモ其ノ本來ノ性質ニ從ヒ民事裁判所ノ審判ニ服セシムルヲ以テ現行法ノ精神主旨ナリト認メサルヘカラス依テ本件私訴事件モ此ノ精神主旨ニ則リ之ヲ本院民事部ニ移送スルヲ適法ナリトス。(大審院大正十三年(レ)第三三九號同年四月十九日第四刑事部判決民事部移送、大審院判例集三卷五號刑事三三五頁)
- 三 新法ニ適合セサル私訴ノ處置(第六一六條)

◎生命ノ侵害ト附帶私訴ノ許否

一 (大審院) 刑事訴訟法第五六七條ニハ犯罪ニ因リ身體自由名譽又ハ財産ヲ害セラレタル者ハ其ノ損害ヲ原因トスル請求ニ付公訴ニ附帶シ公訴ノ被告人ニ對シ私訴ヲ提起スルコトヲ得ト規定シアリテ一見生命ヲ害セラレタル場合ニ於ケル被害者ノ父母配偶者等ノ慰藉料ノ請求ニ付テハ附帶私訴ノ提起ヲ許サルカ如キ嫌疑アリト雖身體自由又ハ名譽ヲ害セラレタル場合ニ於テ其ノ損害ヲ原因トスル請求ニ付テハ汎ク財産以外ノ損害ニ對スル賠償ノ請求ヲモ許容シナカラ是等ノ法益ニ比シ寧ロ貴重ナル生命ヲ害セラレタル場合ニ於ケル損害賠償ノ請求ヲ除外スルハ何等ノ理由ナキノミナラス元來被害者ノ死亡ニ因ル慰藉料ノ請求ハ之ト密接ノ關係ヲ有スル父母配偶者等ノ受ク精神上ノ苦痛ニ對スル損害ヲ賠償セシムルニアリテ犯罪ニ因ル損害ヲ原因トスル請求ニ付テハ權利ノ行使ヲ簡易ナラシムルカ爲ニ設ケラレタル附帶私訴ノ制度ニ於ケル立法ノ趣旨ニ鑑ミルトキハ同條ニ於ケル身體ナル語義ヲ廣ク解シ斯クノ如キ精神上ノ苦痛ヲ蒙リタル場合モ亦所謂身體ヲ害セラレタルモノノ中ニ包含セシムルヲ相當ト認メ得レハ本件私訴ノ如キ被害者ノ父トシテ子ノ殺害ニ因ル精神上ノ苦痛ニ對スル損害ヲ原因トスル慰藉料ノ請求ニ付テハ同條ノ規定ニヨリ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ提起シ得ル

モノト解スルチ正當トス。(大審院大正十四年(レ)第一三二七號同年十月二十九日第二刑事部判決破毀民事部差戻、大審院判例集四卷十號刑事六三二頁)

◎本條ニ關スル諸問

- 一 (舊) 未成年者ノ私訴能力(刑訴法三頁)
- 二 (舊) 裁判所ノ被害ト民事原告人(刑訴法三頁)
- 三 (舊) 保管物ノ被害者(刑訴法三頁)
- 四 (舊) 代理人ニ對スル詐欺ト被害者(刑訴法三頁)
- ◎ (舊) 第三者ノ占有スル贓物ノ返還ヲ求ムル私訴(刑訴法三頁)

◎私訴ト直接又ハ間接ノ損害

一 (大審院) (舊) 甲カ乙銀行ノ爲替係トシテ勤務中乙銀行名義ノ小切手ヲ偽造行使シテ乙銀行ノ取引銀行其他ヨリ合計金二五、五七五圓ヲ騙取シ其結果乙銀行ハ豫テ右取引銀行トノ間ニ締結シアリタル爲替取引約定ニ基キ乙銀行ノ行金ヲ以テ右各取引銀行ニ對シ決済ヲ爲シ因テ乙銀行ハ右金額ニ相當スル損害ヲ被リタル場合ニ於テハ甲ノ小切手偽造行使詐欺ノ犯罪ニ因リ直接

◎扶養義務者ノ死亡ト損害ノ生否

一 (大審院) (舊) 被上告人まさのハ七壽一郎ノ實子又損害ヲ被リタル者ハ各爲替取引銀行ナルヘキモ其損害ニ付乙銀行ハ豫テ締結シ置キタル爲替取引約定ノ責任上右取引銀行ニ對シ決済處分ヲ爲スノ止ムヲ得サルニ至リタルモノニシテ事後ニ於テ特ニ之カ賠償ヲ爲シタルニ非サルヲ以テ乙銀行ハ右ノ犯罪ニ因リ各取引銀行ト等シク損害ヲ被リタルモノト謂フヘク甲ニ對シ公訴ト等シク私訴トシテ其損害ノ賠償ヲ請求シ得ルモノトス

● (大審院大正十二年、法律評論十二卷刑訴五頁)

二 (東京控) (舊) 凡ソ犯罪ニ因リ生シタル損害ハ其直接タルト間接タルトヲ問ハス其犯罪ヲ目的トスル公訴ニ附帶シテ私訴トシテ之カ賠償ヲ請求スルヲ得ヘキコトハ刑事訴訟法第二條ニ於テ私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償云々ヲ目的トナシ云々ト規定シ犯罪ニ因リ間接ニ生シタル損害賠償ヲ除外スル趣旨ノ觀ルヘキモノナキニ徴シ明カナリトス。(東京控訴院(事件番號不詳)大正七年十月二十一日第二刑事部判決、法律評論七卷刑訴一二六頁)

三 (舊) 殺害ニ基ク葬式費用ノ賠償(刑訴法四頁)

一 (大審院) (舊) 被上告人まさのハ七壽一郎ノ實子又

ハ家族トシテ扶養ヲ受ケツツアリシ身ナレハ壽一耶ノ死亡ニ因リテ親子關係ニ於ケル扶養ヲ受ケルコト能ハサルニ至リタルモ尙壽一耶ノ地位ヲ承繼スヘキ戸主ニ對シ扶養權利ヲ有スルモノナルヲ以テ該戸主ヨリ從來ト同一程度ノ扶養料ヲ受ケルコトヲ得ルニ於テハ之ニ關スル損害アリト謂フヲ得然ルニ原審ニ於テハ斯ノ事實如何ヲ審究セスまさカ壽一耶ノ死亡ニ因リ同人ヨリ扶養料ヲ受ケルコト能ハサルニ至リタル事實ヲ以テ直ニ損害アリタルモノト爲シ民事被告人ニ敗訴ヲ言渡シタルハ不法ニシテ論旨ハ理由アリ原判決中「民事被告人ハ民事原告人まさカノ對シ金八百圓ヲ支拂フヘシ」トアル部分ハ破毀ヲ免レス。(大審院大正十一年(れ)第一一二一號同年十一月十五日第三刑事部判決一部破毀移送一部棄却、法律新聞二〇六四號一九頁)

◎贓物還付ノ場合ト私訴損害額

- 一 諸法令上卷「刑法施行法」三四二頁「贓物還付ノ言渡ヲ爲ス場合ト損害賠償額」參看
- 二 横領金全部ノ賠償ト押收金ノ處分(諸法令上卷「刑法施行法」三四二頁)
- 三 贓物ノ還付ト私訴トノ關係(諸法令上卷「刑法施行

法」三四二頁)

第五百六十八條

△私訴提起ノ時期

1 私訴ハ公訴ニ付第一審ノ辯論終結スルニ至ル迄之ヲ提起スルコトヲ得但シ豫審中ハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

第五百六十九條

△私訴ノ管轄

- 1 公訴ニ付第三條、第四條、第六條、第七條、第九條第二項、第十條第二項、第二十三條又ハ第三百五十六條但書ノ決定アリタルトキハ私訴ニ付亦同一ノ決定アリタルモノト看做ス
- 2 公訴ニ付管轄違ノ言渡ヲ爲シタルトキハ私訴ニ付亦同一ノ言渡ヲ爲スヘシ
- 【引用條文ノ要點】
- 第三條 事物管轄異ナル牽連事件ノ分離
- 第四條 事物管轄異ナル牽連事件ノ併合

第五百七十二條

△私訴ニ準用スヘキ民事訴訟ノ規定

- 一 民事訴訟法中左ニ掲ケル事項ニ關スル規定ハ私訴ニ付之ヲ準用ス但シ即時抗告ノ提起期間ハ決定ノ告知アリタル日ヨリ三日トス
- 一 訴訟能力
- 二 共同訴訟人
- 三 第三者ノ訴訟參加
- 四 訴訟代理及輔佐
- 五 訴訟費用
- 六 擔保
- 七 訴訟上ノ救助
- 八 訴訟手續ノ中斷及中止
- 九 當事者本人ノ出頭
- 十 訴訟上ノ和解
- 十一 請求ノ拋棄ニ基キテ爲ス判決
- 十二 訴又ハ上訴ノ取下
- 十三 強制執行

- 第六條 土地管轄異ナル牽連事件ノ分離
- 第七條 同等裁判所間ノ牽連事件ノ併合
- 第九條 上級審下級審ノ審判競合ノ調和
- 第十條 同等裁判所間ノ審判競合ノ調和
- 第二十三條 管轄ノ指定又ハ移轉ノ決定
- 第三百五十六條 事物ノ管轄ニ付テノ例外

第五百七十條

△私訴ノ判決

1 私訴ノ判決ハ公訴ノ判決ニ於テ認メタル事實ニ基キ之ヲ爲スヘシ但シ請求ノ拋棄ニ基キテ爲ス判決ハ此ノ限ニ在ラス

第五百七十一條

△私訴ト訴訟印紙

1 私訴ニ關スル書類ニハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セス但シ民事部ニ差戻シ又ハ移送シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

◎本條列記以外ノ民訴規定ノ適用

◎私訴原告ノ公訴ニ於ケル證言ノ效力

一〔大審院〕原判決力證據トシテ採用シタル證人中村某ノ供述記載ハ第一審第三回公判ニテ證人トシテ訊問シタルモノニ係ルモ其ノ實私訴原告ノ主張事實ヲ記載シタルモノニ外ナラス而シテ私訴ノ審判ニ於テ相手方カ其ノ内容ヲ爭フニ拘ラス其ノ供述記載ヲ採用シテ原告主張ノ損害額ヲ算出スルノ資料ト爲シタルハ探證法上許容スルコトヲ得サル所ナリ去レハ原裁判所カ之ヲ採用シテ損害額ヲ算出シタルハ違法ニシテ原私訴判決ハ破毀ヲ免レズ。(大審院大正十五年(レ)第八六三號同年七月六日第一刑事部判決公訴棄却、私訴破毀差展大審院判例集五卷九號刑事三四六頁)

二〔小野氏〕刑事手續ニ於ケル私訴ハ公訴ニ附帶スルモノテアツテ私訴ノ判決ハ公訴ノ判決ニ於テ認メタル事實ニ基キ之ヲ爲スヘキ(第五七〇條)モノテアリ其ノ公訴ニ付取調ヘタル證據ハ私訴ニ付取調ヘタルモノト看做ス(第五八六條)ノテアルカラ原則トシテ公訴事件ノ證據ハ同時ニ私訴事件ノ證據トナリ得ルコトヲ認メナケレハナラス私訴原告ト雖モ公訴事件ノ證人トシ

テ訊問サレ得ル限リ其ノ供述カ同時ニ私訴判決ニ於テ證據トシテ採用サレルコトヲ絕對ニ拒ムコトハ出來メ上告理由及ヒ判決理由ニ於テ私訴原告ノ證人トシテノ供述ハ私訴ニ於テハ證據トナラズト考ヘテキルコトハ原則トシテハ正シクナイ併シ乍ラ公訴事件ノ證據カ同時ニ私訴事件ノ證據トナルト云フ原則モ私訴ノ民事訴訟的性質上必然的ニ認メナケレハナラズ原則的要請ニ對シテハ其ノ適用ヲ讓ラナケレハナラズ

三〔同上〕蓋シ刑訴法ハ私訴ニ付テハ審級ニ從ヒ公訴ニ關スル規定ヲ準用ス(第五七七條)ヘキモノトシ民事訴訟ノ規定ニシテ私訴ニ付キ準用アルヘキモノハ特ニ其ノ項目ヲ列舉シテキルカ(第五七二條)此ノ列舉以外ニ於テモ苟クモ民事訴訟法ノ原則的要請カ刑事手續ニ於ケル附帶性ヲ超越シテ其ノ妥當ヲ有スヘキ限リハ其ノ適用ヲ認メサルヲ得ヌノテアル(刑訴法講義五一頁以下)如何ナル範圍ニ於テ民事訴訟法ノ原則カ適用サレルカハ頗ル困難ナ問題テアルカ證據法ニ於テハ公訴ノ客體タル犯罪事實其ノモノニ關セズシテ專ラ私訴ノ請求原因トシテノミ意味アル事實ニ付テハ民事訴訟法ノ原則ニ從フヘキモノト考フヘキテハアルマイカ即チ本件ノ事案ニ於ケル損害額ノ認定ノ如キハ專ラ私訴請求原因トシテ其ノ意味ヲ有スルモノカアルカラ其

ノ點ニ於テ民事訴訟法ノ原則ノ適用カアリ從ツテ被告ノ爭フ事實ヲ證明スルニ原告ノ供述ヲ以テスルコトハ(タトヘ公訴事件ノ證人トシテ訊問サレタルモノノテアルニセヨ)許サルヘキテナイ判決力實質的ニ正當ナルハ此ノ故テアル。(法學士小野清一郎氏、法學協會雜誌四五卷七號八一頁)

◎私訴判決ノ更正ト民訴法ノ準用

一〔大審院〕私訴事件ニ在リテハ民事訴訟法第二百四十一條ノ規定ニ準シ裁判所ハ判決中ノ違算書損及此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正スルコトヲ得ルモノニシテ其ノ結果公判調書ノ記載ト判決ノ表示トカ互ニ齟齬スルコトアルモ之カ爲ニ更正ヲ違法ナリト謂フヘカラス。(大審院大正十三年(ク)第四九〇號同十四年二月十六日第一民事部決定棄却、大審院判例集四卷二號民事六〇頁)

◎私訴判決ト正本下附ノ能否

一〔刑事局長〕私訴判決ノ執行ニ關シ刑事訴訟法第五七二條一三號ニ依リ民事訴訟法ヲ準用スルノ結果私訴判

決ノ正本ヲ下附シ得ルモノトス。(刑事局長大正十三年四月二十一日刑事第三七七五號通牒、法曹會雜誌二卷八號五八頁)

第五百七十三條 △私訴ト代理資格

一當事者ハ裁判所ノ許可ヲ受ケ辯護士ニ非サル者ナシテ訴訟ノ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第五百七十四條 △辯護人ト私訴代理權

一辯護人ハ私訴ニ付被告人ノ代理人トシテ訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得

第五百七十五條 △訴訟書類及證據物ノ閱覽謄寫

一當事者及其ノ訴訟代理人ハ裁判長ノ許可ヲ受ケ訴訟ニ關スル書類及證據物ヲ閱覽シ且之ヲ謄寫スルコトヲ得

◎書類及證據物ノ閲覧謄寫ノ權(第四四條)

第五百七十六條

△私訴ノ再審

1 私訴ノ判決ニ對スル再審ノ訴ハ民事訴訟法ニ依リ原判決ヲ爲シタル裁判所ノ民事部ニ之ヲ爲スヘシ

第五百七十七條

△私訴ノ準用規定

1 私訴ニ付テハ審級ニ從ヒ公訴ニ關スル規定ヲ準用ス但シ民事部ニ差戻シ又ハ移送シタルトキハ民事訴訟法ニ依リ

◎私訴ニ適用スヘキ規定ノ事例

- 一 作成年月日ノ記載ナキ判決書ノ效力(第七一條)
二 (舊) 檢事ノ記載ナキ私訴判決(刑訴法二一三頁)

三 (舊) 私訴被告ト最終ノ供述(刑訴法二三七頁)
四 本條列記以外ノ民訴規定ノ適用(第五七二條)

五 (舊) 私訴假處分ノ抗告ト準據法(刑訴法三二三頁)

六 (舊) 私訴訴訟手續ノ中斷(刑訴法三二二頁)

◎ (舊) 上告期間ノ起算點(刑訴法三一七頁)

◎ (舊) 公訴附帶ノ私訴ト假執行(刑訴法三三五頁)

◎私訴ノ控訴ト審判方

一 (法曹會) 刑事訴訟法第五七七條ノ規定ニ依ルトキハ私訴ニ付テハ審級ニ從ヒ公訴ニ關スル規定ヲ準用スルモノナルヲ以テ原告ノ請求ヲ棄却シタル私訴判決ニ對スル控訴ノ審判ニ於テ一審原告ノ請求ヲ正當トスルトキニ於テモ私訴ニ關スル原判決ヲ廢棄スヘキニ非サルモノトス。(法曹會大正十四年十一月二十一日決議、法曹會雜誌四卷一號一二二頁)

◎私訴ノ上告期間

一 (大審院) 刑事訴訟法第五七七條ニ依レハ私訴ニ付テハ審級ニ從ヒ公訴ニ關スル規定ヲ準用スヘキモノナルハ私訴ノ上告提起期間ハ公訴ト同シク同法第四百

十八條第八十一條第八十二條第二項ニ依リ裁判宣告ノ翌日ヨリ五日トスヘキモノニシテ既ニ公訴ニ付適法ノ上告アリタルト否トハ其ノ上告提起ノ期間ニ何等ノ消長ヲ及ボスヘキモノニ非ス蓋シ私訴ノ上告ハ必スシモ公訴ノ上告ニ追隨シ兩者其ノ運命ヲ共ニスルコトヲ要セサルコトハ法令ノ違反ヲ理由トスル場合ニ於ケル私訴ノ上告ニ關スル同法第五百九十七條第五百九十八條ノ各第二號ノ規定ニ徵シ明白ナルヲ以テナリ

二 (同上) 而シテ抗告人ハ大正十三年二月十三日宮城控訴院ニ於テ言渡シタル私訴判決ニ對シ同年三月二十四日付上告申立書ヲ以テ上告ヲ爲シ同年三月二十七日同院カ其ノ受附ヲ爲シタルコト記録ニ徵シ明ニシテ上告權消滅後ニ爲シタル上告ニ係リ固ヨリ被告人鈴木某カ公訴ノ第二審判決ニ對シ爲シタル上告事件ニ隨伴スルコトヲ得サルモノナルヲ以テ原院方同法第五百七十七條第四百二十條ニ依リ本件私訴ノ上告ヲ棄却シタルハ適法ニシテ本件抗告ハ理由ナシ。(大審院大正十三年(つ)第三號同年四月二十六日第三刑事部決定棄却、大審院判例集三卷四號刑事三六八頁)

◎私訴ノ證人ト身分關係ノ調査

一 (大審院) (舊) 刑事訴訟法第二百二十三條ハ裁判所ニ於ケル證人訊問ニ關スル通則ヲ定メタルモノニアラス

シテ單ニ豫審ニ於ケル證人訊問ニ關スル規定タルニ止マルヲ以テ同法第九十條ニ依リ右法條ヲ公判ニ於ケル附帶私訴ノ證人ニ準用スルニ際リテハ之ニ準據シ證人ニ對シ民事原告人ノミナラス民事被告人トノ間ノ身分關係ヲモ調査スルヲ要スルト同時ニ私訴ノ當事者ニアラサル公訴ノ被告人トノ間ノ身分關係ヲ調査スルノ要ナキモノトス故ニ原審ニ於ケル所論證人ノ訊問ノ際私訴ノ當事者ニアラサル公訴被告人トノ關係ヲ取調ヘサリシハ不法ニアラス。(大審院大正七年(れ)第一三七八號同年六月十三日第二刑事部判決棄却、大審院判決錄二十四輯十五卷刑事六八五頁)

◎私訴ノ消滅時效

一 (舊) 寄託金費消ニ因ル債權ノ消滅時效(刑訴法一八頁)
二 (大審院) (舊) 刑事訴訟法第九條第一項ニ依レハ私訴ハ公訴ニ附帶セスシテ起シタルトキト雖モ公訴ト時効期間ヲ同フシ同法第十條及ヒ第十一條ニ依レハ其時効期間起算ノ日及ヒ時効中斷ノ事由モ亦公訴ト同一ナレハ其當然ノ結果トシテ私訴ハ公訴ノ時効完成スル

ト共ニ時効ニ因リテ消滅スヘキモノトス(大正六年九月二十六日ノ當院判決參照)是故ニ私訴カ公訴ノ時効完成前ニ民事裁判所ニ提起セラレタル場合ニ在リテモ訴訟ノ進行中ニ公訴ノ時効完成シタルトキハ之ト同時ニ私訴ハ時効ニ因リテ消滅スヘキ其提起カ公訴ノ時効完成前ナルカ爲メニ論決ヲ異ニスヘキ理ナシ何トナレハ私訴ノ提起ハ私訴ノ時効中斷スルモノニ非サレハナリ同法第二百五條ノ法文ヨリ考フルトキハ私訴カ既ニ提起セラレタルトキハ其判決迄ニ公訴ノ時効完成シタルニ拘ハラズ私訴ハ依然存續スト論決シ得ヘキカ如クナルモ同條ハ其前條ノ場合ニ付テ言ヘハ公訴ノ事實中ニ犯罪ヲ原因トセスシテ損害ノ賠償又ハ物ノ返還ヲ請求シ得ヘキ原因ノ存スル場合ヲ豫想シ此場合ニ付キ規定シタルモノナレハ同條ハ如上ノ論決ヲ生スヘキモノニ非ス本訴カ詐欺取財ナル犯罪ニ因リテ生シタル損害ノ賠償ヲ請求スルモノ即チ私訴ナルハ既ニ述ハタルカ如クニシテ判決當時迄ニ公訴ノ時効完成シタルコトハ原判決ノ確定シタル所ナレハ原裁判所カ本訴ノ請求權ヲ時効ニ因リ消滅シタルモノト爲シ以テ請求ヲ却下シタルハ正當ナリ(大審院大正十年(オ)第一一八號同年四月十九日第一民事部判決棄却、大審院判決錄二十七輯十三卷民事七四五頁)

三(大審院)(舊)刑事訴訟法第九條第一項ニ私訴ノ時効ハ公訴ニ附帶セスシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖公訴ノ時効ト其期間ヲ同フスト規定シタルハ犯罪ヲ原因トシテ損害ノ賠償又ハ贓物ノ返還ヲ請求スル場合ニ於テハ公訴ニ附帶シテ民事裁判所ニ其訴ヲ提起スルト公訴ニ附帶セスシテ民事裁判所ニ其訴ヲ提起スルト中間ハ公訴ノ時効ト同一ノ期間ニ於テ其請求權カ時効ニ罹ル旨ヲ定メタルモノニシテ其理由ハ公訴權カ時効ニ因リテ消滅シタル後ハ社會既ニ犯罪ヲ遺忘シタルヲ以テ仍ホ犯罪ヲ鳴ラシ之ヲ原因トシテ私訴ヲ提起セシムルハ公益ニ害アリト爲シタルニ依ル又刑事訴訟法第十條第十一條ニ依レハ私訴ノ時効ノ起算點及ヒ其中斷ニ付テハ公訴ニ於ケルト同一ノ規定ニ依ルヘキモノトス故ニ不法行爲ニ基ク損害賠償ノ請求ナリト雖犯罪ヲ原因トセス又ハ犯罪ニ關係ナキ純然タル民法上ノ不法行爲ニ基キ請求ヲ爲ス場合ニ於テハ其時効ニ付テハ民法第七百二十四條其他凡テ民法ノ規定ニ從フヘキモ犯罪ヲ原因トスル損害賠償ノ請求ニ在リテハ其時効ノ期間起算點及ヒ中斷ニ付テハ公訴ノ時効ニ於ケルト同一ノ規定ニ從フヘキモノニシテ民法第七百二十四條其他民法ノ規定ニ從フヘキモノニアラス(大審院大正六年(オ)第六一五號同年九月二十六日第三民事部判決棄

却、大審院判決錄二十三輯二十八卷民事一六三一頁)
四 刑事關係ノ賠償ト時効ノ起算點(第二續民法七二四條九五頁)

第二章 第一審

第五百七十八條 △私訴提起ノ方式

1 私訴ヲ提起スルニハ民事訴訟法ニ準シ訴狀ヲ裁判所ニ差出スヘシ

◎(舊)告訴狀ニ附記セル私訴提起ノ表意(刑訴法一一頁)

第五百七十九條 △訴狀其他ノ書類ノ通數

1 訴狀其他ノ相手人ニ交付スヘキ書類ハ裁判所ニ差出ス

第五百八十條 △訴狀ノ送達

1 裁判所訴狀ヲ受取りタルトキハ速ニ之ヲ被告ニ送達スヘシ
2 公判期日ニ出頭シタル被告ニ對シ公判延ニ於テ訴狀ヲ交付シタルトキハ送達アリタルモノト看做ス

第五百八十一條 △私訴關係人ノ召喚

1 公訴ノ公判期日ニハ私訴關係人ヲ召喚スヘシ

◎數名ノ私訴代理人ト一名ノ呼出

一(大審院)(舊)公訴附帶ノ私訴事件ニ付民事原告人若クハ民事被告ノ訴訟代理人數名アル場合ニ於テ其一名ニ對シテ爲シタル呼出狀ノ送達ハ當然本人ニ對シ其效力アルモノナレハ數名ノ訴訟代理人中其一名ニ對

シ適式ニ呼出狀ヲ送達シタル以上本人並其餘ノ訴訟代理人ニ對シ逐一呼出狀ヲ送達セサルモ刑事訴訟法第二百五十七條ニ所謂訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シ云トノ訴訟手續規定ニ違背シタルモノト云フヘカラス故ニ原審カ所論呼出狀ヲ被告代理人ノ一人ナル堀ノ内松十郎ノミニ送達シ同代理人ノ一人ナル中村守ノ出廷ナキニ拘ハラズ其裁判ニ取掛リタルハ適法ニシテ訴訟手續上何等違法ノ廉アルコトナシ。(大審院大正八年(れ)第四三二號同年四月十日第二刑事部判決棄却、大審院判決錄二十五輯十卷刑事五四三頁)

第五百八十二條

△口頭私訴ノ提起

1 原告公判期日ニ出頭シ訴狀ヲ差出スコト能ハサル事由ヲ説明シタルトキハ口頭私訴ヲ提起スルコトヲ得但シ被告出頭セサル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第五百八十三條

△私訴審理ノ時期

△私訴ノ證據調

1 公訴ニ付取調ヘタル證據ハ私訴ニ付取調ヘタルモノト看做ス

◎附帶私訴ニ關スル證據

◎私訴ニ於ケル證據資料ノ採否

一 (大審院) (舊) 刑事訴訟ニ於テハ公訴ノ證據取調ニ付刑事訴訟法第二一九條第二項ニ從ヒ調査其ノ他證據書類ヲ詢問カスノ要アリト雖私訴ノ證據取調ニハ之ヲ詢問カスノ要ナク當事者ニ於テ訴訟記録又ハ押收ノ證據物件ヲ證據トシテ採用スル場合ハ其ノ採用ニ任カスレハ足り又裁判所ハ職權ヲ以テ當事者ノ採用セサル公訴ノ證據ヲモ事實裁判ノ資料ニ供スルニ妨ナシ一原審ニ於テ辯護人ノ提出シタル書類ニ付裁判長カ所論ノ如ク證據ノ取調手續ヲ履踐シタル以上ハ公訴ノ取調トシテ間然スルモノナキヲ以テ公訴附帶ノ私訴ニ付裁判所ハ職權ヲ以テ之ヲ判斷ノ資料ニ供スルヲ得ヘク從テ原審公判ニ於テ之ヲ民事原告人ニ示ササリシハ訴訟手續上違法ニ非ス。(大審院大正十二年(れ)第一〇九

1 私訴ノ取調ハ公訴ノ審理ヲ終ヘタル後之ヲ爲スヘシ但シ裁判長ハ公訴ノ審理中ト雖職權ヲ以テ私訴ニ付取調ヲ爲スコトヲ得

第五百八十四條

△私訴ノ口頭辯論

1 原告ハ請求ノ原因タル事實ヲ陳述シ判決ヲ受クヘキ事項ヲ申立ツヘシ
2 被告ハ答辯ヲ爲スヘシ

第五百八十五條

△裁判所ノ訴訟指揮權

1 裁判所ハ相當ノ陳述ヲ爲スコト能ハサル當事者、訴訟代理人又ハ輔佐人ニ對シ決定ヲ以テ其ノ後ノ陳述ヲ禁スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ訴訟代理ヲ爲サシムヘキコトヲ命スヘシ

第五百八十六條

九號同年十月二十九日第二刑事部判決棄却、大審院判例集二卷十一號刑事七五九頁)

二 (朝鮮高) (舊) 私訴ニ於テハ裁判所ハ民事訴訟法ニ

依ル訴訟ニ在リテハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外當事者ノ提出スル證據ニ據リテノ事實ノ判斷ヲナササルヘカラサルト異リ職權ヲ以テ諸般ノ證據ヲ蒐集シテ事實ノ真相ヲ探究セサルヘカラサルモノナレハ證據ノ取捨ハ一ニ裁判所ノ職權ニ屬シ當事者ニ舉證ノ責任ヲ歸セサルモノトス故ニ裁判所カ既ニ蒐集シタル證據ニ依リテ事實ノ真相ヲ判斷スルニ足ルトキハ假令當事者ノ唯一ノ舉證ト雖之ヲ採用セサルモ違法ニアラサレハ原審カ所論ノ證人訊問申立ヲ採用セサリシトテ之ヲ非議スルハ結局原審ノ證據取捨ニ關スル職權行使ヲ難スルモノニシテ論旨ハ理由ナシ。(朝鮮高等法院大正十一年(利上)第一二〇號同年八月三日判決、法律評論十一卷刑訴一〇四頁)

三 (舊) 附帶私訴ニ關スル證據 (刑訴七四頁)
四 私訴原告ノ公訴ニ於ケル證言 (第五七二條)
五 (舊) 公訴ニ於テ證明セラレタル附帶私訴ノ證據 (刑訴法一三頁)
六 (舊) 附帶私訴ト職權審理 (刑訴法一七五頁)
七 (舊) 私訴ノ審判ト採證方法 (刑訴法一七五頁)

第五百八十七條

△私訴ノ審判ノ範圍

1 裁判所ハ私訴判決ヲ受クヘキ事項ノ申立ノ範圍内ニ於テハ請求ノ原因タル事實ニ關スル原告ノ陳述ニ拘束セラレコトナシ

◎私訴ニ於ケル審判ノ範圍

一 (大審院) (舊) 刑事裁判所カ私訴ノ審判ヲ爲スニ付テハ民事原告人ノ主張セル事實ノミニ局限セス審理上顯ハレタル事實ニシテ係争權利關係若クハ訴ノ目的物タル特定ノ物ニ關聯スル以上之ニ憑據シ以テ請求ニ係ル權利ノ存在ヲ判定スルコトヲ得ルモノトス。(大審院大正八年(れ)第二八一七號同九年三月十八日第二刑事部判決棄却、法律評論九卷刑訴八七頁)

◎私訴原因ノ變更

一 (大審院) (舊) 公訴ニ附帶シテ私訴ヲ起スコトヲ許容セル刑事訴訟法ノ趣旨ハ公訴判決ト私訴判決トノ抵觸ヲ避ケ裁判ノ威信ヲ保維スルカ爲メニ外ナラサルヲ以テ私訴ニシテ公訴ニ附帶スル場合ニ於テハ私訴ノ原因ハ公訴ノ審判ニ因リ自ラ變更ヲ生シ得ヘキコトハ當然ノ結果トシテ之ヲ認ムヘキカ故ニ私訴當事者ニ於テ特ニ變更ノ申立ヲ爲サストスルモ裁判所ハ其變更ノ申立アリタル場合ト同様之ニ依リテ民事上請求ノ當否ヲ判斷スヘキモノトス。(大審院大正十年(れ)第二一一七號同十一年三月六日第二刑事部判決棄却、大審院判例集一卷二號刑事二一六頁、法律評論十一卷刑訴二七頁)

觸テ避ケ裁判ノ威信ヲ保維スルカ爲メニ外ナラサルヲ以テ私訴ニシテ公訴ニ附帶スル場合ニ於テハ私訴ノ原因ハ公訴ノ審判ニ因リ自ラ變更ヲ生シ得ヘキコトハ當然ノ結果トシテ之ヲ認ムヘキカ故ニ私訴當事者ニ於テ特ニ變更ノ申立ヲ爲サストスルモ裁判所ハ其變更ノ申立アリタル場合ト同様之ニ依リテ民事上請求ノ當否ヲ判斷スヘキモノトス。(大審院大正十年(れ)第二一一七號同十一年三月六日第二刑事部判決棄却、大審院判例集一卷二號刑事二一六頁、法律評論十一卷刑訴二七頁)

第五百八十八條

△私訴ノ審判ト檢事ノ立會

1 檢事ハ私訴ノ審判ニ立會フコトヲ要セス
2 檢事私訴ノ審判ニ立會ヒタル場合ニ於テハ當事者ノ論終リタル後意見ヲ陳述スルコトヲ得

第五百八十九條

△審理時間ニ基ク私訴ノ却下

キハ決定ヲ以テ私訴ヲ却下スヘシ此ノ決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第五百九十二條

△私訴判決ノ時期

1 裁判所ハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲スヘシ

第五百九十三條

△當事者ノ陳述ヲ聽カサル判決

1 當事者召喚ヲ受ケテ期日ニ出頭セス又ハ出頭スルモ辯論ヲ爲サス若ハ秩序維持ノ爲退廷ヲ命セラレタルトキハ其ノ陳述ヲ聽カスシテ判決ヲ爲スコトヲ得

第三章 上 訴

第五百九十四條

△私訴判決ニ對スル控訴

第五百九十條

△無罪免訴又ハ公訴棄却ト私訴ノ却下

1 公訴ニ付無罪、免訴又ハ公訴棄却ノ判決アリタルトキハ判決ヲ以テ私訴ヲ却下スヘシ
2 公訴ニ付公訴棄却ノ決定アリタルトキハ決定ヲ以テ私訴ヲ却下スヘシ
3 前二項ノ規定ニ依リ私訴ヲ却下シタル判決又ハ決定ニ對シテハ公訴ニ付上訴アリタルトキニ非サレハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第五百九十一條

△略式命令ノ確定ト私訴ノ却下

1 略式命令確定判決ト同一ノ效力ヲ有スルニ至リタルト

1 私訴ニ付區裁判所又ハ地方裁判所ニ於テ爲シタル第一審ノ判決ニ對シテハ控訴ヲ爲スコトヲ得

第五百九十五條

△公訴上告ト私訴控訴トノ關係(一)

- 1 公訴ノ第一審判決ニ對シテ上告ノ申立アリタルトキハ私訴ノ判決ニ對シテハ控訴ヲ爲スコトヲ得ス
- 2 公訴ノ第一審判決ニ對シテ上告ノ申立アリタルトキハ私訴ノ判決ニ對シテ爲シタル控訴ハ其ノ效力ヲ失フ
- 3 前二項ノ規定ハ上告ノ取下アリタルトキ、第四百十七條ノ規定ニ依リ上告其ノ效力ヲ失ヒタルトキ又ハ第四百二十條、第四百二十七條若ハ第四百四十五條ノ規定ニ依リ上告ヲ棄却スル裁判アリタルトキハ之ヲ適用セス

【引用條文ノ要點】

- 第四百十七條 一審判決ノ上告ト控訴トノ關係
- 第四百二十條 不適法ナル上告ト原裁判所ノ棄却
- 第四百二十七條 上告趣意書ノ懈怠ト上告棄却

第四百四十五條 上告不適法ノ判決

第五百九十六條

△公訴上告ト私訴控訴トノ關係(二)

- 1 公訴ノ第一審判決ニ對シテ上告ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ私訴ニ付控訴ヲ爲シタル當事者ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ
- 2 控訴ヲ爲シタル當事者ハ前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日內ニ上告ヲ爲スコトヲ得此ノ上告ハ控訴ニ付前條第三項ノ規定ノ適用アル場合ニ於テハ其ノ效力ヲ失フ

第五百九十七條

△私訴判決ニ對スル上告

- 1 左ノ場合ニ於テハ私訴ニ付爲シタル第二審ノ判決ニ對シテ上告ヲ爲スコトヲ得
 - 一 公訴ノ判決ニ對シテ上告アリタルトキ
 - 二 法令ノ違反ヲ理由トスルトキ

◎本條ニ關スル諸問

- 一 (舊) 私訴判決ニ對スル上告裁判所 (刑訴法三四四頁)
- 二 (舊) 必要的共同訴訟人ト一部上告 (刑訴法三二二頁)
- 三 私訴ノ上告期間 (第五七七條)

◎事實誤認ヲ理由トスル私訴上告

一 (大審院) 私訴ニ付爲シタル第二審ノ判決ニ對スル上告ハ公訴ノ判決ニ對シテ上告アリタルトキ及法令ノ違反ヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得ルモノニシテ事實ノ誤認アルコトヲ以テ其ノ理由ト爲スコトヲ得サルハ刑事訴訟法第五百九十七條ノ規定ニ照シテ明白ナリ而シテ論旨ハ單々原判決ニ事實ノ誤認アルコトヲ主張スルニ止リ法令ノ違反ヲ理由ト爲スモノニ非サルヲ以テ本件公訴ハ之ヲ棄却スヘキモノトス。(大審院大正十三年(れ)第二三五七號同十四年三月三十一日第六刑事部判決棄却、法律評論十四卷刑訴七四頁)

第五百九十八條

△一審判決ニ對スル私訴上告

- 1 左ノ場合ニ於テハ私訴ニ付爲シタル第一審ノ判決ニ對シテ控訴ヲ爲サシテ上告ヲ爲スコトヲ得
 - 一 公訴ノ判決ニ對シテ上告アリタルトキ
 - 二 判決ニ依リ定リタル事實ニ付法令ヲ適用セス又ハ不當ニ法令ヲ適用シタルコトヲ理由トスルトキ

◎私訴ノ上告期間 (第五七七條)

第五百九十九條

△公訴ノ控訴ト私訴上告トノ關係(一)

- 1 公訴ノ第一審判決ニ對シテ控訴ノ申立アリタルトキハ私訴ノ判決ニ對シテ上告ヲ爲スコトヲ得ス
- 2 公訴ノ第一審判決ニ對シテ控訴ノ申立アリタルトキハ私訴ノ判決ニ對シテ爲シタル上告ハ其ノ效力ヲ失フ
- 3 前二項ノ規定ハ控訴ノ取下アリタルトキ又ハ控訴ヲ棄却スル裁判アリタルトキハ之ヲ適用セス

第六百條

△公訴ノ控訴ト私訴上告トノ關係(二)

- 1 公訴ノ第一審判決ニ對シテ控訴ノ申立アリタルトキハ裁判所ハ私訴ニ付上告ヲ爲シタル當事者ニ其ノ旨ヲ通知スヘシ
- 2 上告ヲ爲シタル當事者ハ前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ七日内ニ控訴ヲ爲スコトヲ得此ノ控訴ハ上告ニ付前條第三項ノ規定ノ適用アル場合ニ於テハ其ノ效力ヲ失フ

第六百一條

△上告趣意書ノ省略

- 1 公訴ノ判決ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ私訴ニ付上告ヲ爲シタルトキハ上告趣意書ヲ差出ササルコトヲ得

第六百二條

△上告辯論ノ資格

- 1 上告裁判所ニ於ケル辯論ハ辯護士ヨリ選任シタル訴訟

代理人ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第六百三條

△辯論ヲ聽カサル上告判決

- 1 當事者訴訟代理人ヲ選任セザルトキハ又ハ訴訟代理人出頭セザルトキハ辯論ヲ聽カスシテ判決ヲ爲スコトヲ得

第六百四條

△私訴上告ト事實審理

- 1 第四百四十條又ハ第四百四十三條ノ規定ニ依リ公訴ニ付事實ノ審理ヲ爲スヘキ旨ノ言渡アリタルトキハ私訴ニ付同一ノ言渡アリタルモノト看做ス

【引用條文ノ要點】

第四百四十條 事實審理ノ決定(一)

第四百四十三條 事實審理ノ決定(二)

第六百五條

△公訴上告ノ棄却ト私訴判決(一)

- 1 第四百四十六條ノ規定ニ依リ公訴ニ付上告棄却ノ判決ヲ爲ス場合ニ於テ私訴ニ付上告ノ理由ト爲ルヘキ法令ノ違反ナキトキハ判決ヲ以テ上告ヲ棄却スヘシ

第六百六條

△公訴上告ノ棄却ト私訴判決(二)

- 1 第四百四十六條ノ規定ニ依リ公訴ニ付上告棄却ノ判決ヲ爲ス場合ニ於テ私訴ニ付上告ノ理由ト爲ルヘキ法令ノ違反アルトキハ第六百七條ノ場合ヲ除クノ外判決ヲ以テ原判決ヲ破毀シ事件ニ付更ニ判決ヲ爲スヘシ

第六百七條

△公訴上告ノ棄却ト私訴判決(三)

- 1 前條ノ場合ニ於テ事件ニ付更ニ判決ヲ爲ス爲事實ノ審理ヲ必要トスルトキハ事件ヲ原裁判所ノ民事部ニ差戻シ又ハ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ノ民事部ニ移送スヘシ

◎(舊)破毀移送ノ私訴事件ノ審判(刑訴法三二二頁)

第六百八條

△公訴判決ノ破毀ト私訴判決

- 1 公訴ニ付原判決ヲ破毀シ被告事件ニ付更ニ判決ヲ爲シタル場合ニ於テハ左ノ區別ニ從ヒ私訴ニ付判決ヲ爲スヘシ
 - 一 公訴ノ判決私訴ニ影響ヲ及ボスヘキ變更ヲ爲シタルトキ又ハ私訴ニ付上告ノ理由ト爲ルヘキ法令ノ違反アルトキハ原判決ヲ破毀ス
 - 二 公訴ノ判決私訴ニ影響ヲ及ボスヘキ變更ヲ爲サス且私訴ニ付上告ノ理由ト爲ルヘキ法令ノ違反ナキトキハ上告ヲ棄却ス

◎(舊)公訴擬律點ノ破毀ト私訴判決(刑訴法三二二頁)

第六百九條

△私訴判決ノ破毀自判

1 前條ノ規定ニ依リ私訴ニ付原判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第六百十條ノ場合ヲ除ク外事件ニ付更ニ判決ヲ爲スヘシ

◎(舊)控訴理由ナキ私訴ト上告審ノ審判(刑訴法三二一頁)

第六百十條

△私訴判決ノ破毀ト差戻又ハ移送

1 第六百八條ノ規定ニ依リ私訴ニ付原判決ヲ破毀スル場合ニ於テ事件ニ付更ニ判決ヲ爲ス爲私訴ノミニ付事實ノ審理ヲ必要トスルトキハ事件ヲ原裁判所ノ民事部ニ差戻シ又ハ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ノ民事部ニ移送スヘシ

第六百十一條

△公訴判決ニ伴フ私訴判決

1 公訴ニ付原判決ヲ破毀シ差戻又ハ移送ノ判決ヲ爲ス場

合ニ於テハ私訴ニ付同一ノ判決ヲ爲スヘシ

第六百十二條

△私訴ノミノ審判手續

1 上訴裁判所私訴ノミニ付審判ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ決定ヲ以テ事件ヲ其ノ裁判所ノ民事部ニ移送スヘシ此ノ決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

◎民事部移送後ト記録送付ノ請求方

一 (法曹會) 控訴裁判所刑事訴訟法第六一二條ニ基キ附帶私訴事件ヲ其裁判所民事部ニ移送スル旨ノ決定ヲ爲シタル場合ニ於テ同民事部ハ當事者ノ期日指定ノ申立ニ基キ當該記録ヲ保管スル檢事局ニ對シ記録送付ノ請求ヲ爲スヘキ當該檢事局ハ直接其民事部ニ送付スヘキモノトス。(法曹會大正十四年三月二十八日決議、法曹會雜誌三卷六號八一頁)

第六百十三條

△私訴上訴ノ審判ト準用規定

1 本編第二章ノ規定ハ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外上訴ノ審判ニ付之ヲ準用ス

附則

第六百十四條

△本法施行ノ期日

1 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正十二年五月勅令第二百十五號ヲ以テ同十三年一月一日ヨリ施行)

第六百十五條

△本法施行ニ依ル廢法

1 明治二十三年法律第九十六號刑事訴訟法及刑事略式手續法ハ之ヲ廢止ス

第六百十六條
△舊法ニ依ル訴訟手續ノ效力

1 本法ハ本法施行前ニ生シタル事件ニ亦之ヲ適用ス
2 前項ノ規定ハ本法施行前舊法ニ依リ爲シタル訴訟手續ノ效力ヲ妨ケス
3 本法施行前舊法ニ依リ爲シタル訴訟手續ニシテ本法ニ之ニ相當スル規定アルモノハ之ヲ本法ニ依リ爲シタルモノト看做ス

◎本條ニ關スル諸問

- 一 舊法ニ於ケル告訴ノ效力(補遺第二六四條)
- 二 新舊二法ニ跨ル公判手續ノ停止(第三五二條)
- 三 在監者ト新舊兩法ニ跨ル再審ノ請求(第四九九條)

◎新法ニ適合セサル私訴ノ處置

一 (大審院) 舊刑事訴訟法施行當時ニ於テハ新法ト異リ私訴ハ公訴ノ被告人ニ對シテノミナラス其ノ以外ノモノヲモ相手方トシテ提起シ得ヘカリシコトハ本院判例

ノ夙ニ是認スル所ナリ然リ而シテ刑事訴訟法第六一六條第二項ノ規定ニヨレハ同法施行前舊法ニ依リ爲シタル訴訟手續ハ新法施行以後ニ於テモ其ノ效力ヲ妨ケサルモノニ係リ而シテ私訴ハ何人ヲ相手方トシテ提起シ得ヘキモノナルヤハ畢竟訴訟手續ニ關スル問題ニ外ナラサレハ舊刑事訴訟法施行當時公訴ノ被告人タラサル上告人ヲ相手方トシテ提起シタル本件私訴ハ其ノ當時適法ノモノナリシヲ以テ新法施行以後ニ於テモ前示第六一六條第二項ノ規定ニ從ヒ依然適法ナリ。(大審院大正十三年、法律新聞二二八五號一五頁)

二(大審院)舊刑事訴訟法施行ノ當時ニ在リテハ公訴附帶ノ私訴ハ公訴ノ被告人以外ノ第三者ニ對シテモ亦提起スルコトヲ得タレトモ現行刑事訴訟法ニ於テハ公訴ノ被告人ヲ相手方トスルニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得サルカ故ニ公訴ノ被告人ヲ相手方ト爲ササル本件私訴ハ現行刑事訴訟法施行ノ後ニ於テハ公訴ニ附帶スルコトヲ許ササルモノト謂ハサルヘカラス然レトモ本件私訴ハ舊刑事訴訟法施行ノ當時既ニ適法ニ提起セラレ且控訴ノ申立ニ依リ原裁判所ニ適法ニ繫屬シタルモノナレハ現行刑事訴訟法施行ノ後ニ於テハ原裁判所ハ之ヲ其ノ裁判所ノ民事部ニ移送スルヲ相當トス蓋シ斯ル場合ニ付法律上別段ノ明文ナシト雖モ此ノ如ク處理

スルヲ以テ法ノ精神ニ適シタル正當ノ解釋ト認ムレハナリ然レニ原審ノ措置茲ニ出テスシテ現行刑事訴訟法ノ施行セラレタル後ニ於テ之ヲ審判シ本案ノ判決ヲ爲シタルハ不法タルヲ免レス結局上告ハ其ノ理由アルニ歸スルヲ以テ原判決中私訴被上告人ニ對スル請求ニ關スル部分ヲ破毀シ事件ヲ神戸地方裁判所ノ民事部ニ移送スヘキモノトス。(大審院大正十三年(れ)第八〇三號同十四年三月六日第六刑事部判決破毀移送、大審院判例集四卷三號刑事一四六頁)

三 新法ニ適合セサル私訴ノ處置(第五六七條)

◎舊法時代ノ檢事聽取書ノ效力

一(大審院)裁判所カ舊法ニ依ル檢事聽取書ヲ證據トシテ採用スルト否トテ決スルハ訴訟手續ニ該當スルモノトス然ラハ則チ現行刑事訴訟法第六百十六條第二項ノ規定ニ依リ同法施行前舊法ニ依リテ爲シタル訴訟手續ヲノ效力妨ケサルカ故ニ原判決カ所論聽取書ヲ證據ニ採用シタルハ違法ニ非ス。(大審院大正十二年(れ)第一八二三號同十三年二月六日第四刑事部判決棄却、大審院判例集三卷一號刑事六五頁)

二 現行法施行前ノ檢事聽取書ノ效力(第三四三條)

◎舊法參考人訊問調書ノ效力

一(大審院)刑事訴訟法第六一六條第三項ニ依レハ本法施行前舊法ニ依リテ爲シタル訴訟手續ニシテ本法ニ之ニ相當スル規定アルモノハ之ヲ本法ニ依リ爲シタルモノト看做ストアルヲ以テ舊刑事訴訟法ニ依リ豫審判事カ事實參考人トシテ訊問シタル者モ現行刑事訴訟法施行後同法ノ下ニ審判ヲ爲スニ際リテハ之ヲ證人トシテ訊問シタルモノト看做スヘキハ當然ナレハ同法ニ遵ヒテ爲シタル原判決カ所論各調書ヲ證人調書トシテ引用シタルハ正當ニシテ所謂ノ如ク探證ノ法則ニ違背シ又ハ虛無ノ證據ヲ罪證ニ供シタルノ違法アルモノニ非ス。(大審院大正十三年(れ)第九八六號同年七月十二日第三刑事部判決棄却、大審院判例集三卷八號五七七頁)

◎宣誓ヲ爲サシメサル證言ノ證據力(第二〇一條)

◎形式不備ナル舊法訊問調書ノ效力

一(大審院)現行刑事訴訟法ノ規定ニ依レハ官吏ノ作成スル書類ニハ所屬官署ノ印ヲ捺捺スルコトヲ要件トセ

ス舊刑事訴訟法ノ下ニ作成セラレタル所論下調調書ニ所屬官署ノ印ノ捺捺ナキコトハ論旨ニ違フル所ノ如シト雖現行刑事訴訟法第六百十六條第一項ニ依リ現行法ノ規定ヲ適用スヘキヲ以テ右下調調書ノ作成手續ハ違法ト爲ラス從テ其ノ書類ノ無効ヲ惹起セサルハ勿論ナルヲ以テ其ノ無効ヲ前提トシテ原判決ノ探證ヲ批難スル本論旨ハ理由ナシ。(大審院大正十二年(れ)第一八六五號同十三年三月一日第四刑事部判決棄却、大審院判例集三卷三號刑事一七三頁)

二(大審院)證人甲ニ對スル第二回豫審訊問ノ當時ニ於テハ同人ハ當該事件ノ共犯トシテ訴追セラレ裁判所ニ繫屬中ナリシトキハ其ノ訊問當時ノ法律タル舊刑事訴訟法ニ依レハ宣誓シタル證人トシテ訊問スルヲ得サルモノナルヲ以テ其訊問手續ニ違背スル所アリト雖モ現行刑事訴訟法ノ施行セラレタル以上同法第六一六條第二〇一條第三項ノ規定ニヨリ右證人訊問手續ハ違法トナラサルモノトス。(大審院大正十三年(れ)第一一六六號同年九月十三日第四刑事部判決棄却、大審院判例集三卷十號刑事六六八頁)

三 第七一條「方式違背ノ書類ノ效力」ノ二

四 第七二條「挿入削除ニ關スル方式違背ノ書類」ノ三

五 第五六條「供述者ノ署名捺印ヲ缺ク調書ノ效力」ノ

四、五參看

◎告訴ノ責任有無ノ判定ト準據法

一〔大審院〕本訴ハ上告人ニ於テ舊刑事訴訟法施行當時
被告上告人カ上告人ニ對シ責任及詐欺ノ犯行アリトシテ
告訴シタルモ上告人ノ不起訴トナリタルモノニシテ右
ハ全ク被告上告人チ惡意若ハ重過失ニ基因スル行為ナリ
トシ之カ爲ニ生シタル損害ノ賠償ヲ求ムル爲同法第十
三條ニヨリ提起シタル案件ニ係ルコトハ記録ニ徴シテ
明カナリ然リ而シテ右法條ハ民法ノ不法行為ノ規定ニ
一ケノ例外ヲ設ケタルモノニシテ畢竟實體的規定ニ外
ナラサレハ本件告訴人タル被告上告人ノ責任ノ有無ヲ判
定セントスルニハ前示舊刑事訴訟法第十三條ノ如キ規
定ヲ有セサル現行刑事訴訟法ノ下ニ於テモ尙告訴提起
當時施行セラレタル實體的規定タル右舊刑事訴訟法ノ
規定ニ依據スヘク民法ノ規定ヲ適用スヘキモノニアラ
ス而モ現行刑事訴訟法第六百十六條第三項ノ規定ハ民
法ヲ適用スルノ論據ト爲スニ足ラサルニヨリ原院カ被
上告人ニ惡意若ハ重過失アリシヤ否ヲ判定シタルノミ
ニテ通常過失若ハ輕過失ノ有無ニ付何等判斷スル所ナ
カリシトテ之ヲ以テ所論ノ如キ不法アリト謂フチ得ス

・(大審院大正十三年(オ)第一一〇二號同十四年六
月一日第一民事部判決棄却、大審院判例集四卷七號民
事二九五頁)

◎舊法ニ依ル告訴ト時効成否ノ判斷

一〔大審院〕刑事訴訟法中公訴ノ時効ニ關スル規定ハ公
訴權實行ノ條件ニ關スル手續法規ニ外ナラサレハ刑事
訴訟法ノ改正アリタル場合ニ於テ新法ノ施行以前ニ係
ル犯罪ニシテ未タ告訴ノ時効完成セザリシモノニ付テ
モ亦之ヲ適用スヘキハ論ナシト雖既ニ舊法施行中ニ於
テ起訴セラレタル犯罪ニ付新法施行後ニ於テ公訴時効
ノ成否ヲ判斷スル場合ニ於テハ起訴當時ノ舊法ノ規定
ニ依ルヘク其ノ規定ニ依リ公訴時効完成前ニ於テ起訴
セラレタル事件ニ付テハ適法ノ起訴アリタリト認ムヘ
ク判決當時ニ於ケル新法ノ規定ニ依リテハ起訴ノ當時
ニ於テ既ニ時効完成シタリト認ムヘキモノトスルモ舊
法ニ依リ爲シタル起訴ノ效力ヲ妨ケス是レ刑事訴訟法
第六百十六條第二項ノ規定ニ徴シテ疑テ容レス而シテ
本件豫審請求ノ當時即チ大正七年三月九日ニ於テ施行
中ニ屬スル舊刑事訴訟法第八條ニ依レハ被告人ニ對ス
ル公訴ノ對象タル責任罪ノ時効ハ七年ニシテ其犯罪終

了ノ時タル明治四十四年七月ヨリ起算シテ其ノ期間ヲ
經過セサルヲ以テ時効ハ未タ完成セサルモノトス。
(大審院大正十三年(レ)第九九六號同年十二月五日
第一刑事部判決破毀自判、大審院判例集三卷十二號刑
事八五一頁)

二〔小野氏〕公訴ノ時効ニ關スル法規ノ變更カアツタ場
合ニ關シテ刑事訴訟法ノ原則ニ從ヒ新法ヲ適用スヘキ
ヤソレトモ刑法第六條ニ依リ被告人ニ利益ナルモノヲ
適用スヘキカトイフコトカ從來屢々問題トサレタ此ノ
點ニ付テ判例ハ公訴ノ時効カ訴訟法上ノ制度ナルヲ理
由トシテ常ニ新法ヲ適用スヘク刑法第六條ヲ適用スヘ
キ限リテナイトイフコトニ一定シテキル學說モ亦之ヲ
認メテキルノテアル私ハ多少異ツタ考ヘテモツテキル
カ原則トシテ新法ノ適用アルヘキコトニツイテハ全ク
意見ヲ同シクシテキルノテアル而シテ刑訴法第六一六
條第一項ハ新法施行前ニ生シタル事件ニモ新法ヲ適用
スヘキコトヲ規定シテキルカコレハ原則テアツテ同條
第二項ハ「本條施行前舊法ニ依リ爲シタル訴訟手續ノ
效力ヲ妨ケス」トイフ重要ナル例外ヲ規定シテキルノ
テアル此ノ例外ハ公訴時効期間ノ變更ノ場合ニモ亦適
用カアルヘキテアル尤モ私ハ公訴時効ノ制度ヲ以テ純
粹ニ訴訟法上ノ制度テアルトハ考ヘナイ科刑權ノノモ

ノモ消滅セシムル意味ニ於テ實體法上ノ制度ナリト信
スルモノテアルカシカシ實體的科刑權ハ手續上ノ事實
ニヨツテ或ヒハ變更サレ又ハ消滅スルモノテ公訴ノ時
効モ亦此ノ意味ニ於テ手續上ノ事實ニヨリ科刑權ヲ消
滅セシムルモノテ從テ舊法ニ依テ公訴時効ノ完成前ニ
爲サレタ公訴提起ノ效力ハ新法施行後ニ於テモ尙之ヲ
認メルトイフ限リニ於テ刑事訴訟法ノ原則ニヨルコト
ハ何等公訴時効ソノモノカ實體法上ノ制度テアルトイ
フコトト矛盾スルモノテハナイト思フ私ハ右ノ如キ理
由ニヨツテ本件豫審請求ノ適法ヲ認メタ大審院ノ判決
ヲ是認スルノテアル。(法學士小野清一郎氏、法學志
林二八卷二號一〇五頁)

△本法前ノ管轄指定ノ申請

一 本法施行前裁判所構成法第十條第一號ノ規定ニ依リ爲
シタル管轄指定ノ申請ハ之ヲ管轄移轉ノ請求ト看做ス

第六百十八條

△本法前ノ忌避ノ申請

1 本法施行前忌避ノ申請ヲ爲シ其ノ理由ノ疏明ヲ爲サザリシ者ハ本法施行ノ日ヨリ三日内ニ之ヲ爲スヘシ

第六百十九條

△本法前ノ法人處罰ノ被告人

1 本法施行前法人ヲ處罰スヘキモノトシテ其ノ代表者ヲ被告人ト爲シタル事件ニ付テハ本法施行ノ日ヨリ法人ヲ被告人トス

第六百二十條

△本法前ノ法定期間ト猶豫

1 本法施行前始リタル法定期間ニ付訴訟行爲ヲ爲スヘキ者ノ住居又ハ事務所ノ所在地ト裁判所所在地トノ距離ニ從ヒ加フヘキ期間ハ仍從前ノ規定ニ依ル

第六百二十一條

△本法前ノ闕席者ノ逮捕

1 本法施行前闕席判決ヲ受ケタル者ニ對シテハ從前ノ規定ニ依リ逮捕狀ヲ發スルコトヲ得

◎本條ニ依ル逮捕狀ノ效力

一〔法曹會〕現行刑事訴訟法第六二一條ニ依リ檢事ハ同法施行前闕席判決ヲ受ケタル者ニ對シ從前ノ規定ニ依リ逮捕狀ヲ發スルコトヲ得ルヲ以テ其逮捕狀ニ關シテハ現行法ノ施行後ニ於テモ舊刑事訴訟法第三一九條ノ適用セラルルハ勿論ニシテ逮捕狀ノ效力モ亦舊法ニ於ケル勾留狀ノ效力ト同一ナルモノト解スルヲ正當トス
・（法曹會大正十三年五月三日決議、法曹會雜誌二卷九號九一頁）

第六百二十二條

△本法前ノ保釋不許ノ言渡ト異議

1 本法施行前保釋ヲ許ササル言渡ニ對シテ爲シタル異議ノ申立ニ付テハ從前ノ規定ニ依リ裁判ヲ爲スヘシ

第六百二十三條

△本法前ノ告訴期間ノ起算

1 第二百六十五條ニ規定スル期間ハ本法施行前犯人ヲ知リ又ハ婚姻ノ無効者ハ取消ノ裁判確定シタル場合ニ於テハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第六百二十四條

△本法前ノ再起訴許可ノ請求

1 本法施行前免訴ノ決定確定シタル事件ニ付明治二十三年法律第九十六號刑事訴訟法第七十五條第二項ノ規定ニ依リ爲シタル請求ニシテ未ダ決定ナキモノハ其ノ效力ヲ失フ

第六百二十五條

△本法前ノ本案前ノ判決

1 本法施行前爲シタル本案前ノ判決ニシテ未ダ確定セザルモノハ其ノ效力ヲ失フ

第六百二十六條

△本法前ノ下調手續

1 本法施行前明治二十三年法律第九十六號刑事訴訟法第二百四十一條第二項又ハ同法第二百六十四條第一項ノ規定ニ依リ取調ヲ命セラレタル受命判事ハ事件ニ付第三百五十一條ノ規定ニ準シ其ノ手續ヲ爲スヘシ

第六百二十七條

△本法前ノ闕席判決ト故障申立

1 本法施行前言渡シタル闕席判決ニ對シテハ控訴ノ申立アリタル場合ヲ除ク外從前ノ規定ニ依リ故障ヲ申立ツルコトヲ得
2 本法施行前闕席判決ニ對シテ爲シタル故障申立ヲ不適法トスルトキハ從前ノ規定ニ依リ裁判ヲ爲スヘシ

第六百二十八條

△本法前ノ抗告ノ效力

1 本法施行前爲シタル抗告ハ之ヲ本法ニ依リ爲シタル即

時、抗、告、ト、看、做、ス

第六百二十九條

△本法前ノ再審ノ效力

1 本法施行前爲シタル再審ノ訴ニシテ上告裁判所ノ判決ヲ經サルモノハ本法ニ依リ管轄裁判所ニ再審ノ請求ヲ爲シタルモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ上告裁判所ハ書類及證據物ヲ管轄裁判所ニ送付スヘシ

第六百三十條

△本法前ノ私訴ノ時効

1 本法施行前進行ヲ始メタル私訴ノ時効ハ從前ノ規定ニ從フ

第六百三十一條

△本法前ノ要償ノ訴

1 本法施行前提起シタル要償ノ訴判決ヲ經サルモノナル

トキハ民事訴訟法ニ從ヒ事件ヲ管轄スヘキ裁判所ノ民事部ニ移送スヘシ

◎新法ニ適合セサル私訴ノ處置(第六一六條)

第六百三十二條

△市町村制不施行ノ地區ト本法ノ適用方

1 本法中市町村吏員ニ關スル規定ハ北海道ノ區ニ於テハ區吏員ニ之ヲ適用ス
2 本法中市町村長ニ關スル規定ハ市制第六條ノ市又ハ北海道ノ區ニ於テハ區長ニ、町村制ヲ施行セサル地ニ於テハ町村長ニ準スヘキモノニ之ヲ適用ス

補遺

第二條 (事物管轄異ナル牽連事件ノ併合)

◎事件ノ併合分離ト其ノ旨ノ宣言

一 (大審院) (舊) 裁判所ハ機宜ノ處分トシテ自由ニ事件ノ併合分離ヲ爲シ審判上ノ便宜ヲ計ルコトヲ得ルモノニシテ此ノ事タルハ毫モ訴訟關係人ノ權利ニ影響ヲ及ボスモノニ非サルカ故ニ併合分離ハ實際ノ手續ニ於テ之ヲ實現スルヲ以テ足り必シモ其ノ旨ノ宣言ヲ爲スコトヲ要スルモノニ非ス原審ノ手續ハ違法ナリトスルヲ得ス (大審院大正十二年(れ)第七四號同年三月三日第三刑事部判決棄却、大審院判例集二卷二號刑事一六五頁)

二 (大審院) (舊) 裁判所ニ於テ必要又ハ便宜ト認メタ

ル場合ニ於テ事件ヲ分離審判スルコトハ法律ノ禁止セサル所ニシテ又之ヲ分離スルニ付決定ヲ要スヘキ旨ノ規定ナクハ假令決定ヲ爲サスシテ事件ヲ分離スルモ不法ニ非ス本件記録ヲ查スルニ原審ハ大正十一年二月三日其ノ第二回公判ニ於テ審理ノ便宜上本件ヲ甲乙丙ノ三組ニ分離シ乙組ニ屬スル各被告ニ對シテハ大正十一年四月十九日丙組ニ屬スル各被告ニ對シテハ同月二十日又甲組ニ屬スル者ニ對シテハ同月二十一日ヲ續行公判ノ期日ト指定シ各關係被告ニ對シ其ノ通知ヲ發シタルモノナルコト明瞭ナルヲ以テ其ノ通知ヲ受ケザリシ被告等ニ於テ呼出ヲ受ケタル他ノ被告等ノ公判期日ニ出頭セザリシハ當然ニシテ原審ノ訴訟手續ニ些ノ違法アルコトナシ (大審院大正十一年(れ)第一四〇七號同十二年六月十二日第一刑事部判決一部破毀移送、大審院判例集二卷七號刑事五二四頁)

三 (平井氏) 事件ノ併合分離ハ實際ノ手續ニ於テ之ヲ實現スルヲ以テ足り必シモ其旨ノ決定(豫審ニテハ裁判)ヲ爲シ又ハ告知宣告ヲ爲ス等ノ形式ヲ必要トセザルモノトス (檢事平井彦三郎氏、法律評論十六卷刑訴三一二頁)

四 (舊) 審理併合ニ關スル決定ノ告知(刑訴法一六二頁)

◎被告事件ノ管轄ヲ定ムル標準（刑訴法四〇頁）

第十條（同等裁判所間ノ審判競合ノ調和）

◎同一事件ニ對スル二個ノ裁判（第三六三條）

第二十五條（刑事忌避ノ原由及申立權者）

◎忌避ノ申請ト辯護士ノ品位（諸法令下卷（辯護士法）一九〇二頁）

第三十六條（法人ノ犯罪ト其ノ代表）

◎法人ヲ處罰スル場合ノ被告人

一（大審院）（舊）法人ヲ處罰スヘキトキハ其代表者ヲ以テ被告人ト爲スヘキモノナレハ本件ニ於ケル如ク當該法人カ合資會社ニシテ其無限責任社員ノ各自ニ依リ代表セラレ得ル場合ニ於テハ其代表者ノ全部ヲ被告人ト爲スト其一部ヲ被告人ト爲ストハ敢テ問フ所ニアラサルヲ以テ法人ニ對スル判決ニ付キ控訴ヲ爲スニ當リテモ必スシモ第一審判決ニ表示セラレタル代表者ヲ悉ク表示スルコトヲ要スルモノニアラスシテ其一部ヲ表示スルモ何等不法ノ廉アルコトナシ。（大審院大正七年（れ）第七四〇號同年六月八日第三刑事部判決破毀移送、大審院判決錄二十四輯十五卷刑事六七五頁）

◎（舊）代表者個人ノ公訴ト法人ノ處罰（刑訴法一四五頁）

第四十二條（辯護人選任ノ方式）

◎復任權ニ基ク辯護届

一（法曹會）辯護人ハ被告人ノ訴訟代理人ニ非ス又自己ノ代理ヲ他ノ辯護士ニ委任スルコトヲ得ルコトニ關シテハ刑事訴訟法上其規定ナシ故ニ辯護人ハ當然他人ニ代理ヲ委任スル權限アルモノト謂フヲ得ス然レトモ被告人ヨリ差支アル場合ニ他ノ辯護士ヲ選任スル權限ヲ付與セラレタルトキハ被告人ノ爲他ノ辯護士ヲ辯護人ニ選任スルヲ得ヘク此ノ場合ハ其ノ權限ヲ證明スル書面ト共ニ自己及他ノ辯護人ノ連署シタル辯護人選任ノ書面ヲ裁判所ニ差出スコトニ依リ選任ノ效力ヲ生スルモノトス。（法曹會大正十四年三月二十八日決議、法曹會雜誌三卷七號九八頁）

第四十九條（裁判ニハ理由ヲ附ス）

◎理由不備ノ違法アル判決（第四一〇條）

第五十三條（裁判書又ハ其ノ調書ノ謄本抄本）

◎判決謄本ノ請求ト判決書ナキ場合

一（法曹會）區裁判所ノ判決宣告ノ日ヨリ七日後ニ判決書ノ謄本ノ請求アリタル場合ニハ判事ニ於テ判決書ヲ作成スルコトヲ要セサルヲ以テ判決書ナキ以上ハ請求者ニ對シ判決書ノ謄本ヲ下付スルヲ得サルモ若シ更メテ裁判ヲ記載シタル公判調書ノ謄本ヲ請求スルトキハ刑事訴訟法第五十三條及第七十條ニ則リ之ヲ下付スヘキモノトス但此場合ニハ公判調書ノ抄本ヲ請求スルヲ便利トス。（法曹會大正十四年六月二十日決議、法曹會雜誌三卷八號八五頁）

第五十六條（訊問調書ノ作成ト記載事項）

◎證人ノ署名捺印ナキ豫審訊問調書

一(大審院) 刑事訴訟法第七十四條ニハ官吏又ハ公吏ニ非サル者ノ署名捺印スヘキ場合ニ於テ署名スルコト能ハサルトキハ他人ヲシテ代書セシメ捺印スルコト能ハサルトキハ花押又ハ捺印スヘキ書類ハ無効トスヘキ旨ノ規定存セサルヲ以テ署名スルコト能ハサルトキ他人ヲシテ代書セシメ捺印スルコト能ハサルトキ花押又ハ捺印ヲ爲ササリシトスルモ署名捺印スヘキ書類ハ直ニ無効ナリト解スヘキニ非スシテ其ノ效力ノ有無ハ一二文書ノ性質形式署名捺印セサル理由其ノ他諸般ノ事情ヲ參酌シテ裁判所自由ニ之ヲ判斷シ得ヘキモノトス而シテ豫審訊問調書ハ一私人力自由ニ作成スル書類ト其ノ形式ヲ異ニシ刑事訴訟法所定ノ手續ニ依リ豫審訊問調書カ裁判所書記立會ノ下ニ證人等ヲ訊問シタル事項ニ付裁判所書記ノ作成スヘキ書類ナルヲ以テ虛偽ノ事項ヲ自由ニ記載スルカ如キ虞ナキノミナラス所論證人極戸ミヤノ豫審訊問調書ヲ閱スルニ調書中同證人ノ署名捺印ナキモ其ノ理由トシテ調書末尾ニ「右錄取シ讀聞ケタルトコロ相違ナキ旨承認シタルモ署名捺印不能ニ付テ

ス」トノ記載アリ而モ一件記録ニ依レハ所論證人カ豫審訊問ヲ訊問テ受ケタル當時ハ同證人ハ重傷ヲ負ヒテ動作意ノ如クナラス從テ署名ハ勿論捺印タモ爲ス能ハサリシ状態ナリシコトハ之ヲ推知スルニ難カラサレハ右末尾ノ記載ハ眞實ノ記載ニシテ同調書ノ供述記載ハ同證人ノ供述シタルトコロヲ錄取シタルモノト認メ得ヘキヲ以テ之ニ同證人ノ捺印ナク又署名ノ代書ナキモ其ノ記載ハ信ヲ措クニ足ルヲ以テ旁々該豫審調書ハ豫審訊問カ適法ニ證人ヲ訊問シタル結果作成セラレタル有效ノ調書ナリト解スヘキモノトス。(大審院昭和四年(レ)第一五八一號同五年二月二十一日第一刑事部判決棄却、大審院判例集九卷二號刑事九五頁)

◎計算書ヲ綴込ミタル豫審調書ノ效力(刑訴法八八頁)

◎自首調書ノ形式(刑訴法二八頁)

第五十八條(調書ト取調ノ年月日、場所及署名捺印)

◎地方裁判所支部ノ書記ト其ノ職印

一(大審院) 區裁判所ニ開クヘキ地方裁判所支部ハ所轄地方裁判所ノ一部ニ過キサルコト裁判所構成法第三十條ノ解釋上疑ヲ容レサル所ナリト雖同法中其ノ支部ノ事務ヲ取扱ハシムル爲特ニ地方裁判所所屬ノ裁判所書記ヲ置クヘキ旨ノ條規存セサルカ故ニ當該區裁判所勤務ノ書記ハ一面支部ノ事務ヲ取扱フヘキモノナリトス從テ地方裁判所支部ニ於テ公判ヲ開キ當該區裁判所勤務ノ裁判所書記カ公判ニ立會シ公判調書ヲ作成シ之ニ署名捺印シ又ハ契印ヲ爲スヘキトキハ所屬區裁判所書記ノ職印ヲ使用スルヲ妨ケサルモノトス。(大審院昭和二年(レ)第一七四一號同三年二月二十二日第三刑事部判決棄却、大審院判例集七卷二號刑事一〇五頁)

二(大審院) (舊) 地方裁判所支部ヲ設置セラレタル區裁判所ノ書記ハ事務ノ分配ニ依リ當然支部ノ事務ヲ取扱フヘキモノナレハ其干與シタル事件ノ判決書並ニ其作成シタル公判始末書豫審調書等中書記名下ニ區裁判所書記ノ印ヲ捺捺シタルハ違法ニ非ス。(大審院大正八年(レ)第二五七四號同年十二月十八日第二刑事部

判決棄却、法律新聞一六四五號一八頁)
三 支部ニ於ケル豫審ニ立會スル書記(刑訴法八七頁)
四 支部設置ノ區裁判所書記ノ權限(諸法令上卷(裁判所構成法)六一三頁)

◎豫審調書ノ署名捺印ナキ豫審調書

一(大審院) 所論調書ノ末尾ニハ裁判所書記某ノ署名印影アル次行ニ甲地方裁判所豫審掛ナル印影アルニ止リ豫審調書某ノ署名ハ之ヲ見ルヲ得サルコト寔ニ所論ノ如シ而シテ豫審ニ於ケル證人訊問調書ノ作成ニハ當該豫審調書所書記ト共ニ署名捺印スヘキモノナルコトハ刑事訴訟法第五十八條第一項ノ明定スル所ナルト共ニ豫審ニ於ケル證人調書モ他ノ訴訟書類ト同シク法定形式ニ違背シテ作成セラレタル場合ニ於テモ常ニ當然無効トナルヘキモノニハ非スト雖全然豫審調書ノ署名捺印コト前叙ノ如キモノニアリテハ果シテ當該證人ニ對シ調書記載ノ豫審調書ニ依リ調書記載ノ如キ訊問カ行ハレタルモノナリヤ否到底之ヲ知ルニ由ナク結局斯ノ如キ調書ハ全ク無効ノモノナリト認メサルヲ得ス從テ原審カ前掲證人調書ヲ採テ以テ斷罪ノ資料ト爲シタルハ畢竟虛無ノ證據ニ依リ事實ヲ認定シタルニ歸

シ其ノ違法タルヤ多言ヲ俟タサルト共ニ該違法ハ各被告ニ對スル事實ノ確定ニ影響ヲ及ボスヘキモノナルコト勿論ナレハ原判決ハ竟ニ破毀ヲ免ルヘカラス仍テ刑事訴訟法第四百四十條ニ則リ主文ノ如ク決定シタリ
・(大審院昭和五年(レ)第二〇號同年三月十日第五刑事部決定事實審理、大審院判例集九卷三號刑事一六八頁)

◎領事官補ノ囑託證人訊問ト調書ノ捺印(刑訴法一二二頁)

第六十條(公判調書ト其ノ記載事項)

◎公判調書ノ記載ニ關スル諸問

- 一(舊)公判ノ證人訊問ト其ノ調書(刑訴法二一九頁)
- 二(舊)身分關係ノ調査ト公判始末書ノ記載(刑訴法二一九頁)
- 三(舊)公判ノ鑑定ト鑑定書ノ要否(刑訴法二一九頁)

- 四(舊)不得要領ノ證言ト始末書ノ記載(刑訴法二一九頁)
- 五(舊)公判ノ證言ハ書證ニ非ス(刑訴法二一九頁)
- 六(舊)判決ノ言渡ト理由ノ朗讀及告知(刑訴法二二〇頁)
- 七 公判調書ト事件陳述ノ記載方(第三四五條)
- 八 被告事件ノ陳述ナキ公判手續ノ效力(第三四五條)
- 九 判決言渡調書ノ欠缺ト控訴申立ノ效力(第四〇〇條)

◎辯護人ノ氏名ヲ遺脱セル公判調書

一(大審院)刑事訴訟法第六十條第二項第二號ニ於テ公判調書ニ出頭シタル辯護人ノ氏名ヲ記載スヘキコトヲ命ジタル所以ノモノハ要スルニ辯護權ノ正當ニ行使セラレ審理手續ノ公正ナルコトヲ調書ニ依リ明瞭ナラシムル趣旨ニ外ナラズト解スヘキカ故ニ辯護人ニシテ公判ニ出頭シテ辯護權ノ十分ニ行使セラレタルコト明白ナル以上該公判調書ニ其ノ辯護人ノ氏名ノ記入ヲ遺脱シタルカ爲ニ該公判調書又ハ公判手續ヲ無効ト爲スヘキモノニ非ス・(大審院昭和五年(レ)第三五五號同年五月五日第五刑事部判決棄却、法律新聞三一三四號一一頁)

◎數回ノ公判ト公判調書ノ作成

- 一(大審院)前後數回ノ公判ニ付一通ノ調書ヲ作成シ其ノ末尾ニ裁判長裁判所書記ト共ニ署名捺印スルハ其ノ禁スル所ニ非ス・(大審院昭和四年(レ)第一一六六號同年十一月二十九日第一刑事部判決棄却、大審院判例集八卷十一號刑事五七五頁)
- 二(舊)數回ノ公判始末書ノ合綴ト署名捺印(刑訴法第二二〇條二二四頁)
- 三(舊)數回ニ亘ル公判始末書ノ一部無効(刑訴法二二五頁)
- 四(舊)公判調書ノ整理ニ關スル規定ノ解釋(第六二條)

第六十四條(公判手續ノ證明方法)

◎本條規定ノ趣旨(本文第六四條ノ續キ)

「本文補遺第六十四條四二五頁ヨリ移ル」
二(同上)以上ノ理論ハ從來ノ大審院判例ノ悉ク之ヲ認メタルモノノ如シ然ルニ最近ノ判例ハ之ニ反セリ被告人カ公判廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナキハ本法第三百十二條ノ規定スル處ニシテ訴訟手續上關係ノ規定ノ遵守セラレタルヤ否ハ公判調書ニ依リテノミ之ヲ證明スヘキコト本條ノ定ムル處ナリ然レトモ本件ハ公判調書ノ記載方或事實ヲ證明シ得ヘキ場合ニ適用アルモノニシテ同調書ニ記載ナキ事實ニ付テハ之ヲ證明スルヲ得サルハ當然ノ事ナレハ斯ル場合ニハ同條ノ適用ナキコト自ラ明カナリ從テ同調書ニ身體拘束ノ記載ナキ場合ニ於テハ更ニ他ノ證據ヲ以テ其事實ヲ闡明セサルヘカラサルモノトス此判例ニ依ルトキハ先ニ例示シタル公判調書ニ記載ナク判決書ニノミ記載アル證人ノ供述關係檢事ノ官氏名ノ如キ公判調書ニ記載ナキノ故ヲ以テ直ニ其存在ヲ否定シ得サルノ結果公判調書ニ絶大ノ證明力ヲ付與シタルノ趣旨ハ半ハ滅却セラレルニ至ルハ勿論該判例ハ何カ故ニ公判調書ニ依リ事實ノ不存在ヲ證明シ得サルモノト爲ス其理由ヲ發見スルニ苦シム公判調書ハ存在シタル訴訟手續ノ記載ヲ命シタルモノニシテ不存在ノ事實ハ何等ノ記載ナキ事實ニ徴シ當然證明シ得ラレルモノトス恰モ不存在ノコトヲ

不存在ト記載シアルト同様ナリ即チ其調書ノ末尾ニ以上ノ外何等ノ訴訟手續ナシト記載シアリタリトセンカ當然其不存在ニ付キ證明力アリト斷スルニ躊躇セザルカ如シ果シテ然ラハ法文ノ趣旨カ存在スル手續ノミナ記載シ不存在ノ手續ハ其旨記載スルヲ要セスト解シ得ル前示説明ノ場合モ亦同様ナルコト勿論ナリト云ハサル可カラス公判調書ニ記載ナキ事項ニ付テハ其調書ニ依リ不存在ヲ證明シ得ヘシトノ説明ニ付テハ一ノ例外ヲ認メサルヘカラス曰ク訴訟手續上遵守サルルコトノ常態ニ於テ且特ニ調書ニ記載スヘキ列記事項ニ屬セサルモノハ其記載ヲ略記スルモ尙其訴訟手續ノ遵守サレタルモノト解スヘキコト是ナリ被告人カ公判廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受ケサリシコトモ亦此例外ノ一例ニ屬スルモノトス蓋シ被告人カ公判廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受ケサリシコトハ刑事訴訟法第三百三十二條ニ被告人ハ公判廷ニ於テ身體ノ拘束ヲ受ケルコトナシトアリテ此規定ノ遵守サルルコトノ公判廷ニ於ケル常態ナルコトハ公開ノ常態ナルコトト何等選フ處ナキノミナラス此事項カ右第六十條ノ列記事項ニ屬セザルコトモ亦一見シテ明カナル處ナレハナリ若シ此常態ニ反シテ之ヲ拘束スルコトアラシキ被告人其他ノ訴訟關係人ハ同條第十一號ニ依リ之カ記載ヲ請求シテ其不法ヲ明確ニシ得ヘ

ク又右記載ノ有無ニ拘ハラス之ヲ上告ノ理由ト爲シタルトキハ上告審ニ於テハ右記載アルトキハ直ニ上告理由アルモノト認メ記載ナキトキハ第四百三十五條第一項ニ依リ事實ノ取調ヲ爲シ以テ上告理由アルモノト認メ得ヘキヲ以テ右不法手續ニ對スル救濟十分ナルニ於テオヤ・(檢事平井彦三郎氏、法學新報三七卷八號一二三頁)

◎公判調書ノ證明力ト判決言渡ノ事實(第四〇〇條)

第六十八條(裁判書ノ署名捺印)

◎裁判書ニ署名捺印スヘキ判事

一(大審院)判決書等總テ裁判書ノ作成ニ付テハ刑事訴訟法第六十八條ニ其ノ規定アリテ同裁判書ニハ其ノ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印スヘキモノト爲セリ而シテ裁判ナルモノハ訴訟審理ノ末裁判所カ事件ニ關シテ下ス評決ニシテ内部行爲ニ屬スルニ反シ裁判ノ宣告ハ裁判

ノ實體ヲ形成スルモノニ非シテ單ニ其ノ公示方法タルニ過キサルヲ以テ右審理評決ニ關與セザル判事ト雖裁判ノ宣告ニ關與スルコトヲ得レトモ裁判書ニ署名捺印スヘキ者ハ右評決ニ關與シタルモノノ即チ裁判ヲ爲シタル判事タルコトヲ要スルヲ以テ單ニ裁判ノ宣告ニ關與シタル判事ハ右裁判書ニ署名捺印スルコトヲ得ザルモノトス。(大審院昭和四年(れ)第一五五六號同五年二月十八日第一刑事部判決棄却、大審院判例集九卷二號七四頁)

二 判決ノ言渡ト審理不關與ノ判事(第五一條)

第七十一條(官吏公吏ノ作成スヘキ書類ノ方式)

◎所屬官署名ノ表示方

一 第七一條「所屬廳名ニ「假名交リ」ノ判決書」參看

第七十四條(常人ノ書類ト署名又ハ捺印ノ不能)

◎證人ノ署名捺印ナキ豫審訊問調書(補遺第五六條)

第八十條(書類ノ送達ト民法ノ準用)

◎送達ニ關スル諸問

一 召喚乃至送達ニ關スル諸問(第三二〇條)
二 送達ニ關スル諸問(續民法八六〇頁以下)

第九十四條(勾引ノ囑託、轉囑及移囑)

◎電信ニ依ル訊問囑託ノ可否(刑訴法七〇頁)

◎特別ニ裁判權ヲ有スル官署

一 (草刈氏) 法令ニ因リ特別ニ裁判權ヲ有スル官署トハ臺灣、朝鮮、關東州、南洋羣島ノ裁判所、領事官廳ノ如キヲ謂フ。(法學士草刈融氏、刑事訴訟法詳解一三四頁)

第一百十二條 (被拘留者ノ接見及物件授受ノ制限)

◎證人訊問囑託ノ方法 (刑訴法二二〇頁)

第一百十六條 (保釋許否ノ裁判)

◎保釋許否ノ裁判ト方式及送達

一 (法曹會) 保釋請求ノ許否ニ付テハ其ノ決定書ニ保釋請求者ヲ表示シ此ノ者ニ對シ決定書ノ謄本ヲ送達スヘ

キモノトス。(法曹會昭和四年十二月十三日決議、法曹會雜誌八卷三號刑事一二六頁)

第一百三十七條 (被告人トノ對質)

◎被告ニ他人ヲ指示セル訊問手續 (刑訴法八八頁)

第一百五十四條 (押收、搜索ノ囑託ト轉囑及移囑)

◎特別ニ裁判權ヲ有スル官署 (第九四條)

第一百五十五條 (押收又ハ搜索ト時ノ制限)

◎五時半頃カ晝間ナルヤ否ノ判斷 (刑訴法二四〇頁)

第七十條 (檢事又ハ司法警察官ノ押收—搜索)

◎非現行犯ニ於ケル檢事ノ違法處分 (刑訴法三四一頁)

◎廣義ノ押收品 (刑訴法九二頁)

第七十五條 (裁判所ト檢證ノ職責)

◎檢證及檢證調書ニ關スル諸問

一 (舊) 實地臨檢ノ決定ニ包含スル證據調 (刑訴法二五

八頁)

二 (舊) 檢證ノ際ニ於ケル證人訊問ノ場所 (刑訴法二三〇頁、同二五八頁)

三 檢證調書ニ關スル諸問 (第五七條)

四 檢證調書ト作成ノ時及場所 (第五七條)

五 (舊) 部員全員ノ臨檢訊問ノ性質 (刑訴法二五八頁)

六 (舊) 裁判官全員ノ臨檢訊問ト調書ノ方式 (刑訴法二五八頁)

第七十六條 (檢證ノ物體及手段ニ關スル要件)

◎刑事訴訟法上ニ所謂處分ノ意義

一 (刑事部會) 刑事訴訟法ニ所謂處分ト稱スルハ事實的行爲ヲ云フモノニシテ訴訟法上ノ法律行爲タル鑑定等ヲ包含スルコトナキモノトス。(法曹會雜誌編輯部刑事部會、法曹會雜誌五卷六號一六九頁)
◎本條ノ繼續檢證ト鑑定其他ノ強制處分 (第一八二條)

第七十八條 (檢證ニ準用スヘキ規定)

◎檢證通知ノ欠缺ト檢證ノ效力(第一五八條)

第八十四條 (裁判所ノ證人訊問)

◎精神病者ノ證言ト證據能力

一 (大審院) 精神病者ノ證言ハ常ニ必ス之ヲ證據ニ供スルコト能ハストノ探證上ノ通則アルコトナク唯タ其ノ多クノ場合ニ於テハ之ヲ信用スヘカラサルカ故ニ事實承審官ニ於テ之ヲ採用チ難ンスルニ過キス精神病者ト雖症狀ニ依リ時ニ依リ普通人ノ精神狀態ト異ナラサルコト少シトセサルヲ以テ其ノ際ニ於ケル證言ヲ採用スルニ何等探證上ノ不當ナリトスヘキ點ナク要ハ自由ナル

判斷ニ基キ之ヲ採否ヲ決スヘキモノトス
二 (同上) 本件ニ於ケル證人菅谷源六郎ハ外傷性神經症ニ罹リ居ルモノナルモ鑑定人三宅鐵一ノ鑑定書ニハ「彼ノ陳述カ全然架空ノ虛構トノミハ考ヘ難キ點アリ即チ其ノ陳述ノ凡テカ正シキモノトハナシカタキモ亦所謂狂ノ妄想乃至幻覺トノミ斷スルコト不可能ニシテコハ事實調査ノ上ニ於テ定メラルヘキモノナリ即チ彼ノ陳述ノ一部ニハ追想ノ誤リアリ間違ヒアリ誇張アリ空想ノ存在モアリトハ考ヘ得ヘキモノハ或性格異常者殊ニ變質者ニハ斯カル判斷ノ偏頗構想多キモノアリトセラルルニ止マリ他ニ大正七八年頃源六郎日常ノ作業ニハ勤勉ニシテ精神上他ニ異常アリトスヘキ點ナキコトヨリ考ヘ又現在同症ノ存在ヲ認メカタクソノ陳述ノ骨子カ全然考ヘ違ヒナリトスヘキ反證モナク却テ之ヲ肯定スヘキ如キ暴行事實モアリトスレハ末葉ノ點ニ於テ多少ノ奇異ナル陳述アリトシテモ根本ニ於テ當時ノ源六郎ノ全人格ニ精神病アリトシトハ思ヒ難キモノナリ」トノ旨ノ記載アリ又鑑定人ノ杉田直樹ノ鑑定書ニモ「源六郎ノ精神ノ現在症ニ於テハ目下多少ノ神經衰弱性症候等ヲ認メラルルモ理智的要素作用(理智作用)ニ何等ノ障礙ナク從來有セル堅忍ナル性格正義ニ對スル固執性豐富ナル常識感情竝ニ衝動ノ抑制力自己ノ行

四一頁)

◎其人ナルヤ否寫眞ヲ以テスル訊問(刑訴法一五五頁)

第八十六條 (身分關係ニ因ル證言義務ノ免除)

◎内縁ノ妻ト證人資格

一 (大審院) 民法第七百七十五條ニハ婚姻ハ之レヲ戶籍更ニ届出ツルニ因リ其ノ效力ヲ生スト規定シアリテ内縁ノ妻ハ同法第七百二十五條ニ所謂配偶者ニ該當セサルヲ以テ所論ゆきスハ刑事訴訟法第二百二十三條ニ依リ證人資格ヲ喪失スヘキ謂ナキヲ以テ原審カ右ゆきスニ對シ宣誓ヲ命シ證人トシテ訊問ヲ爲シタルハ相當ナルト同時ニ該證言ヲ採テ本案斷罪ノ資料トナシタルハ違法ニ非ス。(大審院大正七年(れ)第一三九五號同年六月十一日第一刑事部判決棄却、法律新聞一四三九號二六頁)

動ノ後果ノ豫察洞見能力等ヲヨク保有スルモノナリ」
「菅谷源六郎ハ大正八年頃ヨリ現在ニ至ル迄ノ間ニ著シキ精神病的症狀ヲ發生シタル形跡ナシ大正十五年九月一日夜身體ニ廣汎ナル傷害ヲ受ケタル以前ニモ精神病的異常症狀ヲ有シタリト認ムヘキ證據ナク又右傷害ヲ受ケタル直後並其後ニ於テモ意識ニハ障礙ナクヨク健全ナル精神作用ヲ保持シタルモノト認メラル現在ニ於テ源六郎ハ其ノ精神作用ニ精神病ノ障礙アルヲ認メス但シ源六郎ハ生來性ニ神經質性格異常ヲ有スルモノニシテ爲ニ氣宇正直ニシテ自我感情亢進シ利害心銳ク正義ヲ愛シ放逸ヲ惡ム等ノ性格的特質アリコハ精神病ノ異常トハ認ムヘカラスシテ正常人ノ範圍ニ入ルヘキモノナレトモ廣ク一般人トノ交際ニハ和シ難キ失アリ」トノ旨ノ記載アリ菅谷源六郎ノ證言ハ絕對ニ採用スヘカラサルモノナリトノ醫學的根據ナク寧ロ之ヲ採用スルモ危險ナキモノト認メ得ヘキヲ以テ原審カ細心ノ注意ヲ拂ヒ他ノ證據ト承應シテ之ヲ信憑スヘキモノトシテ證據ニ採用シタルハ何等探證上ノ不法アルコトナク論旨ハ畢竟原審ノ專權ニ屬スル證據ノ取捨判斷ナ非難スルニ過キサルモノナルヲ以テ理由ナシ。
(大審院昭和四年(れ)第一四五七號同五年二月十三日第二刑事部判決棄却、大審院判例集九卷三號刑事一

◎親屬關係ノ不明ト參考人訊問(刑訴法一一二頁)

第百八十八條(刑事訴訟ノ虞アル場合ト證言義務)

◎證人資格ノ調査ト共同被告人ノ範圍(補遺第一九五條)

第百九十五條(證人ノ身分關係及人違ナキヤノ取調)

◎證人資格ノ調査ト共同被告人ノ範圍

一(大審院)記録ヲ審查スルニ豐原區裁判所檢事神岡文章ハ大正十一年一月二十一日收賄者タル被告人勝太郎ト必要の共犯ノ關係ニ在ル贈賄者タル林作ノ贈賄事件ニ付公訴ヲ提起シテ略式命令ノ請求ヲ爲シ豐原區裁判

所判事田中甲子次郎ハ先ツ適式ノ豫告手續ヲ踐ミ尋テ同年二月二日林作ニ對シテ略式命令ヲ爲シ同日之ヲ同人ニ送達セシメタルコト明確ナリトス而シテ本件第一審タル同區裁判所ニ於テ所論證人寅松ヲ訊問セル當日即チ大正十一年二月二日ニ在テハ該略式命令ハ未ダ確定スルニ至ラス右林作ハ其ノ被告事件ノ關係ヨリ離脫スルコト能ハサルヲ以テ右證人訊問ノ場合ニ於テハ被告人勝太郎ノ收賄被告事件ニ付證人ト勝太郎トノ身分關係ヲ調査スルヲ以テ足レトセス共犯者タル林作ノ贈賄被告事件ニ付證人ト林作トノ身分關係ニ付テモ調査セサルヘカラス然ルニ第一審裁判所ハ右手續ヲ悉サス單タ被告人勝太郎ト證人トノ身分關係ヲ調査シタルノミニテ直ニ證人ヲ宣誓セシメ之ヲ訊問シタルハ違法ニシテ右違法ノ手續ニ依リ爲シタル證人ノ供述ハ無効ニ屬スルヲ以テ原審力第一審公判始末書所載ノ所論證人寅松ノ供述ヲ援用シテ被告人勝太郎ノ收賄罪ヲ認定スルノ資料ト爲シタルハ違法ナリ。(大審院大正十一年(れ)第四七七號同年四月二十五日第一刑事部判決破毀、大審院判例集一卷五號刑事三〇〇頁)

◎追起訴ト證人資格ノ調査

查スヘキモノニシテ證人資格アルニ於テハ宣誓セシメテ之ヲ訊問スヘキモノトス其共同被告人中ノ或者ニ對スル呼出手續ヲ爲シタルト否ト又之ニ對スル重罪下調手續ヲ爲シタルト否トハ前述ノ如ク共同被告人全員ニ對スル關係ニ於テ證人ノ資格ノ調査ヲ經テ宣誓ヲ爲サシムル手續ヲ履踐スルヲ要スルコトニ何等ノ消長ナキモノトス。(大審院大正八年(れ)第一九六八號同年十二月十八日第二刑事部判決棄却、大審院判決錄二十五輯三十卷刑事一三八八頁)

三(大審院)共犯トシテ訴追ヲ受ケ未タ其公訴事件ヨリ離脫セサルモノハ盡ク刑事訴訟法第百二十三條所謂被告人ニ該當シ其繫屬シタル裁判所ノ同一ナルト否トハ之ヲ問フヲ要セサルヲ以テ證人ヲ訊問スルニ當リテハ證人ト被告人全體トノ間ニ同條列記ノ關係アルヤ否ヤヲ調査スルコトヲ要スルモノトス。(大審院大正六年(れ)第二九七九號同七年一月三十日第三刑事部判決破毀移送、法律新聞一三六六號三三頁)

四(舊)被告人ノ意義(刑訴法一一一頁)

◎共犯又ハ共同被告人ト證人資格(第二〇一條)

◎宣誓資格ノ調査ヲ欠缺セル證言(第一九五條)

一(大審院)記録ヲ查スルニ被告ニ對シ大正四年十二月二十一日詐欺事件ノ追起訴アリタルコトハ洵ニ所論ノ如クナレハ同事件ニ付證人訊問ヲ爲スニハ縱令其證人カ前ノ起訴ニ係ル事件ニ付一旦資格ノ調査ヲ受ケ宣誓ヲ爲シタルトキト雖トモ更ニ右追起訴事件ニ付證人資格ノ有無ヲ調査シ宣誓ヲ爲サシメサルヘカラスルハ本院從來ノ判例ニ照シテ明カナリ然ルニ所論「イーセイキンケ」第二三回豫審調書ニ依リハ豫審判事カ追起訴ニ係ル詐欺事件ニ付テモ同人ヲ證人トシテ訊問シタルコト明白ナルニ拘ハラズ同事件ニ付證人ノ資格調査ヲ爲サス又宣誓セシメサリシハ不法ニシテ該證人訊問ハ無効ニ歸スルモノト謂ハサルヲ得ス然レハ即チ原判決カ右訊問調書ヲ採テ本件被告ノ罪證ニ供シタルハ違法ニシテ破毀ヲ免レス。(大審院大正六年(れ)第二六八號同年四月十日第一刑事部判決破毀移送、法律新聞一二五〇號三〇頁)

二(大審院)前ニ起訴アリタル特定ノ被告人ニ對スル被告事件ニ付キ證人ヲ訊問セル場合ニ於テ證人資格ニ關スル審查ヲ遂ケ宣誓セシメタルモ其後ニ起訴アリタル同一被告人ニ對スル別箇ノ被告事件ニ付キ同一證人ヲ訊問スルニハ重テ證人資格ノ審查ヲ爲シ且宣誓セシムルコトヲ要スルモノトス。(大審院大正六年(れ)年

第三五〇號同七年三月一日第一刑事部判決一部破棄移送一部棄却、大審院判決錄二十四輯三卷刑事一四四頁)

三(舊) 刑訴法一〇六頁「併合事件ノ證人宣誓」ノ二
◎起訴事實ニ包含セサル別個ノ事實(第二九一條)

◎牽連犯ト證人鑑定人ノ資格調査

一(大審院) (舊) 豫審請求書ニ家宅侵入罪ヲ竊盜罪ト牽連犯ノ關係ニ在ルトキ證人ニ付キ竊盜被告事件ニ關スル身分調査ヲ爲シタル以上ハ家宅侵入罪ニ關スル身分調査ヲ爲シタル趣旨ナリト解スルヲ相當トス
(大審院大正七年(れ) 第二四六二號同年十月九日第三刑事部判決棄却、法律新聞一四七四號二三頁)

二(大審院) (舊) 檢事豫審請求書ノ記載ニ被告等ノ業務上過失致死傷ノ行爲ト失火燒燬ノ行爲トハ一個ノ行爲ニシテ數個ノ罪名ニ觸レ一罪トシテ處分スヘキモノトシテ起訴シタルモノナルトキハ證人及鑑定人ノ各豫審調査ニ業務上過失致死傷被告事件ニ付身分關係ノ有無ヲ調査シタル旨ノ記載アル以上特ニ失火燒燬ナル罪名ヲ記載セサルモ證人及鑑定人ノ資格調査ノ手續上瑕疵アルモノト謂フヲ得サルモノトス。(大審院大正八

(れ) 第二八一七號同九年三月十八日第二刑事部判決棄却、法律新聞一七五四號二〇頁、法律評論九卷刑訴八七頁)

二(舊) 追起訴事件ト證人調査ノ手續(刑訴法一〇三頁)
◎連續犯、牽連犯ト公訴ノ範圍(第二八八條)

◎被告人氏名ノ不詳ト證人訊問手續

一(舊) 被告人不明事件ノ證人訊問手續(刑訴法一〇三頁)
二(舊) 氏名不詳ノ被告人ト證人調査ノ手續(刑訴法一〇三頁)
◎公訴ノ提起ト被告人ノ指定(補遺第二九一條)

◎檢事及司法警察官ノ訊問ト身分調査(補遺第二一五條)

第九十六條(證人ノ宣誓義務)

◎證人ノ宣誓ニ關スル證據力

- 一(舊) 數事件ノ證人宣誓(刑訴法一〇六頁)
- 二(舊) 數箇ノ事件ト宣誓及探證(刑訴法一〇六頁)
- 三(舊) 併合事件ノ證人宣誓(刑訴法一〇六頁)
- 四(舊) 官公吏ノ證言ト個人資格ノ宣誓(補遺第一九八條)
- 五(舊) 補充訊問ト宣誓ノ要否(刑訴法一〇七頁)
- 六(舊) 證人宣誓書ノ讀聞ニ關スル推定(刑訴法一〇八頁)

◎同一證人ノ數次ノ訊問ト宣誓

一(大審院) (舊) 前ニ起訴アリタル特定ノ被告人ニ對スル被告事件ニ付キ證人ヲ訊問セル場合ニ於テ證人資格ニ關スル審査途々之ヲシテ宣誓セシメタルモ其後ニ起訴アリタル同一被告人ニ對スル別箇ノ被告事件ニ付キ同一證人ヲ訊問スルニ付テハ重テ證人資格ノ審査ヲ爲シ且ツ宣誓セシメサルヘカラス蓋シ被告事件ヲ異ニスレハ自ラ被告人ト證人トノ關係ニ於テ異同アルヲ免レサレハ宣誓ヲ更新スルノ必要アルヲ以テナリ。

(大審院大正六年(れ) 第三五五〇號同七年三月一日第一刑事部判決破毀移送、大審院判決錄二十四輯三卷刑事一四四頁)

二(溝淵氏) 實際豫審ノ煩雜ナル事件ニ於テハ同一證人ノ數回ノ訊問ヲ見ル例アリ毎回正式宣誓ノ煩ニ堪ヘサルヨリ實際獨逸流儀ノ簡便手續ヲ採ルニ至ル然レトモ宣誓代用ヲ認メサルカ故ニ原則ニ從フノ外ナク數回ノ訊問ニ付テハ僅力ニ繼續訊問ニヨリテ宣誓包容ノ範圍ヲ劃スル外アラス此限度ヲ超越スルトキハ宣誓ノ破壞ナリ此點ニ於テハ獨逸ノ宣誓採用ノ規定ハ頗ル實用向ナリ其草案ニ至リ更ニ百尺竿頭ニ一步ヲ進メタルモノナリ宣誓モ同一人カ屢スレハ莊嚴味ヲ失フコトニ顧慮セハ獨逸ノ如キ安全辨ヲ設ケ其實ヲ失ハサルヲ要ス然レトモ證人義務ノ不繼續ニ於テ先ノ宣誓力後ノ供述ヲ當然包容スト云フ如キハ訴訟法ノ問題テ一時抑止スルニ足ルモ實體刑法偽證ノ問題ト併セ考フレハ首尾一貫セサルモノト謂ハサルヲ得ス。(檢事溝淵孝雄氏、法曹會雜誌七卷十二號五一頁)

◎鑑定人ノ宣誓ヲ以テセル證人ノ供述

- 一 (大審院) (舊) 第一審第三回公判始末書ノ記載ニ依レハ判事ハ證人トシテ呼出シタル兒玉榮熊ニ對シ證人資格ヲ調査シ本案被告事件ニ付キ證人トシテ訊問スル旨ヲ告ケ宣誓セシメタルモノナレトモ記録ニ於ケル宣誓書ニ依レハ同人ハ公平且正實ニ鑑定スヘキコトヲ誓フト記シタル書面ニ鑑定人トシテ署名捺印シタルモノニシテ其宣誓ハ刑事訴訟法第九十條第百二十二條ノ方式ニ違背スルヲ以テ同人カ此宣誓ニ基キ證人トシテ爲シタル事實上ノ供述ハ證言トシテ無効ナリ從テ事實ニ關スル供述トシテ何等ノ證據力ヲ有セサルモノトス故ニ右第一審公判始末書ニ於ケル前記證人兒玉榮熊ノ事實上供述ノ記載ヲ罪證ニ供シタル原判決ハ探證ノ法則ニ違背スルモノトス。(大審院大正八年(れ)第三〇六四號同九年三月三日第三刑事部判決破毀移送、大審院判決錄二十六輯二卷刑事一〇一頁)
- 二 (舊) 證人ノ宣誓ト鑑定人ノ宣誓(刑訴法一〇五頁)

第九十七條 (證人宣誓ノ時期)

.....

- 一 (舊) 本條第一項ノ趣旨(刑訴法一〇五頁)
- 二 宣誓書ノ文詞ハ限定的ナルカ(第二二〇條)

證人カ文字ヲ知ルヤ否ヤノ調査(刑訴法九九頁)

第二百一條 (宣誓ヲ爲サシメサル證人(一))

.....

證人資格ニ關スル雇人ノ意義

- 一 (舊) 本條ニ所謂雇人ノ意義(刑訴法一一二頁)
 - 二 (舊) 共犯者ノ雇人ト證人資格(刑訴法一一三頁)
 - 三 (舊) 解雇後ニ於ケル雇人ノ證言(刑訴法一一三頁)
 - 四 (舊) 雇主カ雇人ノ爲ニ證言スル場合ト本條(刑訴法一一二頁)
- ◎第三號ノ雇人ノ意義(續民訴法一〇六九頁)

同居人ノ意義

- 一 (大審院) (舊) 刑事訴訟法第一二三條第四號ニ所謂

證人宣誓ノ時期(刑訴法一〇五頁)

第九十八條 (證人ノ宣誓ト其ノ方式)

.....

官公吏ノ證言ト個人資格ノ宣誓

- 一 (大審院) (舊) 證人トナルノ義務ハ各個人ノ負フモノニシテ其ノ人カ官公吏タルト又ハ其ノ他ノ者タルトニ依リ何等ノ差別アルコトナシ但シ官公吏又ハ官公吏タリシ者ハ其ノ職務上默秘スヘキ事項ニ關スル證言ヲ拒ムコトヲ得ルニ過キス從テ之ニ伴フ宣誓義務モ亦各個人ノ負フヘキモノタルハ疑ナシ故ニ原審ニ於テ森林主事タル證人兩名ヲ訊問スルニ當リ各個人ノ資格ニ於テ宣誓セシメタルハ固ヨリ正當ナリ。(大審院大正十一年(れ)第一〇九二號同年九月十二日第一刑事部判決棄却、大審院判例集一卷七號刑事四三七頁)
- 二 (舊) 證人宣誓ト資格ノ明示(刑訴法一〇七頁)

宣誓書ノ文詞ハ限定的ナルカ

- 同居人トハ民事原告人又ハ被告人ノ戸主タル主宰ノ下ニ在ル者ヲ指稱スルモノナレハ證人ト被告人ト同一寄宿舍ニ在リトスルモ同條ノ所謂同居人ニ該當セス。(大審院大正八年(れ)第七四九號同年五月十六日第一刑事部判決破毀、法律評論八卷刑訴六六頁)
 - 二 (舊) 本條ニ所謂同居人ノ意義(刑訴法一一三頁)
- ◎同居者ノ意義(民訴法二七一頁)

證人資格ノ調査ト共同被告人ノ範圍(補遺第一九五條)

第二百四條 (證人ト他ノ證人トノ對質)

.....

證人訊問ト訊問事項ノ取捨

- 一 (舊) 證人訊問事項ノ範圍(刑訴法一六二頁)
- 二 (舊) 證人訊問事項ノ擴張(刑訴法一六二頁)
- 三 證人訊問ト訊問事項ノ取捨(第二〇五條)

第二百十條 (宣誓又ハ證言ノ拒絕ト其ノ制裁)

◎證人ノ宣誓拒絕ト證人決定ノ取消

一 (大審院) (舊) 一旦喚問ノ決定ヲ爲シタル證人ト雖
後ニ至リ其ノ必要ナキコトヲ發見シタルトキハ裁判所
ハ隨時之カ決定ヲ取消スコトヲ得ヘシ是レ審理程度ノ
裁量ニ關スル事實審ノ職權行使ニ外ナラサルナリ故ニ
原審カ所論證據決定ヲ取消シタルハ不法ニ非ス而シテ
所論證人トシテ呼出テ受ケ出頭シナカラ正當ノ事由ナ
ク宣誓ヲ拒ミタル東野某ニ對シ刑事訴訟法第二百十六
條第一項ノ制裁ヲ加フルニ至ラザリシトスルモ之カ爲
同人喚問ノ決定ヲ取消スコトヲ妨クヘキ事由タルヘキ
謂レアルコトナシ。(大審院大正十二年(れ)第一二
四一號同年十一月十七日第三刑事部判決棄却、大審院
判例集二卷十一號刑事八〇三頁)

第二百十二條 (證人訊問ノ囑託及轉囑移囑)

◎囑託訊問ニ關スル諸問

- 一 特別ニ裁判權チ有スル官署(補遺第九四條)
 - 二 (舊) 電報ニ依ル豫審處分ノ囑託(刑訴法一二〇頁)
 - 三 (舊) 訊問囑託手續ノ當否(刑訴法一二二頁)
- ◎囑託書ノ存否ト囑託ノ效力(第一五四條)
- ◎囑託訊問ノ不完全ト證據決定ノ施行(第三四四條)

◎受託判事ト訊問事項ノ釋明

一 (大審院) (舊) 辯護人カ一定ノ鑑定事項ヲ舉示シテ
鑑定人ノ訊問ヲ求メタル場合ニ於テ受託裁判所カ該申
請ヲ許可シ鑑定人ノ訊問ヲ區裁判所判事ニ囑託シタル
トキハ受託判事ハ鑑定人ヲ訊問スルニ當リ鑑定人ノ求
ニ因リ鑑定ヲ爲スニ必要ナル限リ辯護人ヲシテ其ノ申
請事項ノ内容ヲ釋明セシムルモ違法ニ非ス——所論ノ

如ク原審ノ證據決定ニ依リ定メラレタル鑑定事項以外
ノ事項ニ付鑑定ヲ命ジ又ハ原審ノ提供シタル鑑定資料
以外ノ事項ヲ以テ鑑定ノ資料ニ供シタルモノニ非サル
コト明ナルカ故ニ原審ハ所論ノ如ク證據決定ヲ適法ニ
施行セサル違法アルモノト云フヲ得ス。(大審院大正
十二年(れ)第五六五號同年七月九日第二刑事部判決
棄却、大審院判例集二卷十號七一〇頁)

第二百十五條 (檢事及司法警察官ノ證人訊問ト不宜誓)

◎檢事及司法警察官ノ訊問ト身分調査

- 一 (大審院) (舊) 檢事及司法警察官ハ宣誓ヲ用ヒテ關
係人ヲ尋問シ其供述ヲ聽クヲ得サルヲ以テ關係人ヲ尋
問スルニ際シ其身分關係ヲ調査シ宣誓能力ヲ審査スル
ノ要ナシ。(大審院大正十年(れ)第三六二號同年四
月七日第二刑事部判決棄却、法律新聞一八四二號二一
二頁)
- 二 (舊) 檢事ノ證人訊問ト身分關係ノ調査(刑訴法一〇

第二百十六條 (司法警察官ノ證人訊問ト立會人)

◎告訴ノ補充調査ト其ノ方式(補遺第二七三條)

二二二條—二二六條 一〇二九

二 (舊) 囑託以外ノ證人訊問ノ效力(刑訴法一二二頁)

一 (大審院) (舊) 甲裁判所豫審判事ノ囑託書ニ依レハ
伊藤清吉ヲ證人トシテ訊問スル旨ノ囑託アリタルコト
ヲ認メ得ルニ止リ其指定スル伊藤清吉トハ別人ナル伊
藤清之助ヲ訊問スルコトハ全ク囑託ナキヲ以テ右被告
事件ニ付乙裁判所豫審判事ハ伊藤清之助ヲ證人トシテ
訊問スル權限チ有セス證人伊藤清之助ヲ證人トシテ之
ヲ訊問スル權限チ有セサル判事ニ依テ訊問セラレタル
モノニシテ其訊問手續ハ無効ナリ從テ其訊問調査モ亦
無効ナリトス。(大審院大正八年(れ)第七七七號同
年五月十二日第二刑事部判決破毀移送、法律新聞一五
七三號二二頁)

第二百十九條 (鑑定ノ命令)

◎檢證ノ範圍ト假設問題

- 一 (舊) 假設問題ノ鑑定 (刑訴法八五頁)
- 二 檢證ノ範圍 (假設問題ノ觀測) (第一七五條)

第二百二十條 (鑑定人ノ宣誓)

◎ (舊) 本條第一項ノ趣旨 (刑訴法一〇五頁)

第二百二十一條 (鑑定ノ方式及鑑定書ノ說明)

ノニアラス鑑定人三宅鐵一ニモ同様ノ鑑定命令アリ同鑑定人ハ「源六郎ノ身體的精神狀態ヲ再診シ其ノ結果ヲ瀧澤病院ニテノ病床日誌ヲ對照考査シタリ」ト云フニ在ルヲ以テ是レ亦其ノ命令材料ノ範圍外ナリト云フヘキニアラス

二 (同上) 而シテ鑑定ハ固ヨリ裁判ニアラサルカ故ニ鑑定材料トナスコトヲ得ヘキ關係人ノ陳述ニハ一々證人トシテ宣誓ノ上ニアラサレハ採用スルヲ得サルモノニアラス從テ又聽取書ハ地方裁判所事件ノ斷罪ノ資料トナスコトヲ得サルトノ探證上ノ法則ハ鑑定ニ適用スヘカラサルコトハ勿論ナリ其ノ他三宅鑑定人ノ鑑定書ニ「當然加害者ハ其責ヲ負フヘキモノナリ」トノ記載アル部分ニ付テハ同鑑定人自身モ鑑定命令以外ナルコトヲ明言シタリ原判決力之ヲ採用シタリトスルモ原判決破毀ノ理由トナラス。(大審院昭和四年(レ)第一四五七號同五年二月十三日第二刑事部判決棄却、大審院判例集九卷三號刑事一四八頁)

三 (同上) 所論鑑定書ニ「輓近斯界專門家ヨリ特ニ考究セラレツツアルモノニシテ就中歐洲大戰爭ニ於テ此ノ種傷病兵ノ處置ニツキテ夙ニ多クノ學說發達セルトコロアリトス而カモ當然加害者ハソノ責ヲ負フヘキモノナリコノ問題ニ付キテハ他ニ述フヘキコト多キモ實

◎鑑定方法ノ自由 (刑訴法一五三頁)

第二百二十三條 (鑑定資料ニ關スル鑑定人ノ權利(一))

◎精神鑑定ト鑑定資料ノ範圍

◎鑑定資料ノ採用ト採證上ノ法則

一 (大審院) 鑑定人ハ必要アル場合ニハ其ノ資料ニ付廣汎ナル權限ヲ有スルコトハ刑事訴訟法第二百二十三條第二百二十四條ノ規定スル所ナルヲ以テ裁判所力鑑定命令ヲ爲スニ當リ特ニ資料トナスコトヲ禁止シタルモノヲ除ク外ハ鑑定人ハ自由ニ之ヲ取調ヲ爲スコトヲ得ルモノトス本件鑑定人杉田直樹ニ對スル鑑定命令中ニハ菅谷源六郎ノ精神ニ異狀アリトセハ其ノ發病ノ原因如何トノ條項アリ之ニ依リ源六郎ノ主治醫タル瀧澤靖ニ就キ源六郎ノ入院後ノ從來ノ疾病經過ヲ聞クコトハ極メテ必要ニシテ又鑑定材料トシテ「菅谷源六郎ニ就キ必要ノ事項ヲ調査シ」トアル指定ノ範圍ヲ出ツルモ

問外ノコトトシテ省略ス」トアリテ鑑定人自身モ鑑定命令以外ノ事項ナルモ學說ノ一端ヲ叙述スル旨ノ明記ヲ爲シアリ原判決モ加害者ノ責任ヲ負フヘキヤ否ノ事項ノ點ヲ被害者ノ精神狀態ノ鑑定ニ依リ判斷スヘキモノニアラサルハ十分熟知セルモ唯々鑑定書摘錄ノ際筆勢之ニ及ヒシト云フニ過キスト認ムヘク假令此ノ點ニ付違法アリトスルモ本件ニ付加害者力責任アリトノ點ハ他ノ採用證據ニ依リ優ニ之ヲ認ムルヲ得ヘキヲ以テ未タ以テ原判決ヲ破毀スルノ理由トナラス。(同上) 四三頁)

四 (舊) 鑑定資料ノ採取方法 (刑訴法一五三頁)
◎命令以外ノ資料ニ基ク鑑定ノ效力 (第二二四條)

第二百二十五條 (受命判事ノ鑑定處分)

◎數名ノ受命判事ト其任務ノ執行 (刑訴法二五九頁)

◎牽連犯ト證人鑑定人ノ資格調査 (補遺第一九五條)

第二百三十二條 (國語ニ通セサル者ノ通譯)

◎判決ノ言渡ト通事ノ立會

- 一 (大審院) 刑事訴訟法第二百三十二條ノ規定ハ公判廷ニ於ケル被告人ノ陳述及裁判所ノ訊問裁判等ノ趣旨ヲモ了解セシムル爲ニ通事ヲ用フル法意ヲ有スルモノト解スヘキモノナルヲ以テ苟クモ公判廷ニ於ケル口頭辯論ニ際シ通事ヲ必要トスル被告人ニ對シテハ其ノ判決言渡ニ際シテモ通事ヲ用ヒ如何ナル判決ノ言渡シアリタルヤチ克ク了解セシムヘキモノトス
- 二 (同上) 原審ノ第一回及第二回公判調書ニハ通事トシテ裁判所書記竹島景文ヲ立會ハシメタル旨ノ記載アルヲ以テ原審ニ於テハ本件ノ口頭辯論ニ際シ被告人ノ爲メ通事ヲ用フルコトノ必要ヲ認メタルコト明ナリ然レハ其ノ判決ノ言渡ニ際シテモ通事ヲ用フヘキモノナルニ拘ラス其ノ判決言渡期日ニ於ケル第三回公判調書ニハ通事ヲ用ヒタル何等記載ノ看ルヘキモノナキヲ以

テ原審ニ於テハ口頭辯論ニ際シ通事ヲ必要トシタル被告人ノ爲メニ其ノ判決言渡ニ際シテハ通事ヲ用ヒサル違法アリト謂フヘク論旨ハ此ノ點ニ於テ理由アリ而シテ該違法ハ被告人ニ對スル關係ニ於テ原判決ノ認定シタル事實ノ確定ニ影響ヲ及ボスヲ以テ刑事訴訟法第四百四十條ニ依リ本院ニ於テ事實ノ審理ヲ爲スヘキモノトス。(大審院昭和四年(レ)第一五九五號同五年三月六日第五刑事部決定事實審理、法律新聞三一一二號七頁)

◎判決ノ言渡ト通事ノ立會 (刑訴法一六八頁)

◎判決言渡ノ通事ト宣誓ノ要否 (第二三六條)

◎證據調ヲ爲スヘキ旨ノ告知ト通事

- 一 (大審院) (舊) 證據調ヲ爲スヘキ旨ノ告知ハ證據調自體ニ屬セス單ニ證據調ノ豫告ニ止マルヲ以テ訴訟手續上重要ノ事項ニアラス通事ヲシテ其通譯ヲ爲サシムルコトハ法ノ要求スル所ニアラサルヲ以テ原審ニ於テ之ヲ通譯セシメサリシトスルモ違法ニアラス。(大審院大正十年(レ)第一七八五號同年十二月二十一日第三刑事部判決棄却、大審院判決錄二十七輯二十九卷刑事七一三頁)

第二百三十六條 (通譯及翻譯ト準用規定)

◎裁判所書記ノ通譯ト旅費日當

- 一 (法曹會) (舊) 裁判所ノ通譯ニ從事セシムル爲メ特ニ任命シタル裁判所書記カ其所屬廳ニ於テ通事トシテ立會シタルトキハ其當然ノ職務ヲ行フニ止マリ別ニ旅費其他ノ入費ヲ要セサルカ故ニ旅費日當ノ支給ヲ受ケルコトヲ得スト雖モ其他ノ場合ニ於テハ通常一般ノ通事ト同シク民事訴訟費用法第十一條又ハ刑法施行法第六十三條第六十四條ニ依リ旅費日當ヲ受ケルコトヲ得ヘシ。(法曹會明治四十三年五月二十八日決議、法曹記事二十卷八號三九頁)

◎通事タル裁判所書記ト宣誓ノ要否

- 一 書記ノ通譯ト宣誓其ノ他ノ諸問 (第二三六條)
- 二 通事タル裁判所書記ト宣誓ノ要否 (諸法令上卷(裁判所構成法)六二八頁)

第二百六十四條 (姦通罪ニ對スル告訴ノ要件)

◎姦通ノ宥恕ト告訴權ノ拋棄

- 一 第二六七條「親告罪ノ告訴ト拋棄ノ許否」ノ一
- 二 第二六四條「姦通ノ宥恕ト告訴權ノ消滅」ノ一乃至四
- 三 (草野氏) 「上略」私ハ大審院ノ昭和四年十二月十六日ノ第二刑事部ノ判決(右一ニ相當ス)カ大正十五年三月十九日第六刑事部ノ下シタ判決(右二ニ相當ス)ト矛盾スルコトナキヤチ吟味シテ見タイト思フノテアル、ナセナラハ學者ニヨツテハ右判決ヲ以テ親告罪ニ於ケル告訴權ノ拋棄ヲ認メタモノト解シテ居ルカラテアル
- 四 (同上) 此ノ判決(二)ハ本夫ノ告訴權ハ其ノ宥恕ト同時ニ消滅ニ歸ストハイフテ居ルモノノ決シテ宥恕ハ告訴權ノ拋棄テアルトハイフテ居ラヌノテアル然ルニ牧野博士ハ其ノ教科書ニ於テ右判例ヲ以テ告訴權ノ拋棄ヲ認メタモノトノ趣旨ニ於テ引用サレテ居リ(重訂刑事訴訟法一三二頁)小野學士モ判例批評ニ於テ

「上告理由」一「姦通ニ對スル本夫ノ宥恕ハ即チ告訴ノ
 拋棄ナルヲ以テ其ノ後ニ於ケル告訴ハ其ノ効ナシ」ト
 イフ主張ハ大審院ニヨツテ認メラレタ（刑事訴訟法
 判例研究第一七七頁）トサレテ居ルケレトモ果シテ爾
 ク解シテ誤ナイテアラウカ疑ナキヲ得ナイノテアル
 五（同上）ソコテ姦通ノ宥恕トハ一體如何ナルコトテ
 アルカト云フコトカ問題ニナルノテアル前記判例ハ所
 謂宥恕トハ妻ニ一旦姦通ノ非行アリタルモ夫ニ於テ感
 情自ラ融和シ嘗テ其ノ非行ナカリシモノノ如ク做スヘ
 キ旨ヲ表明スルコトテアルト解説シテ居ル而シテ之ヲ
 民法學者ニ就テ聞クモ宥恕ハ感情ノ表示テアツテ意思
 表示テハナイトイフコトニ略解釋ハ一致シテ居ルヤウ
 テアル（鳩山氏法律行為乃至時効第四五頁、穂積氏離
 婚原因ニ對スル宥恕法學協會雜誌第二七卷第六號第九
 六五頁以下第七號第一一四頁以下）果シテ然リトセ
 ハ宥恕ハ離婚訴訟ノ意思表示テナイト同時ニ告訴
 權拋棄ノ意思表示テモナイト解セネハナラズ其ノ宥恕
 ニ因リテ離婚訴訟ノ消滅ニ歸スルハ全ク法律當然ノ效
 果テアツテ意思表示ノ效果テハナイノテアル而シテ離
 婚訴訟ノ消滅即チ告訴權ノ消滅テナイコトハ勿論テア
 ツテ小野學士モ言ハレテ居ル如ク一旦夫カ妻ノ姦通ヲ
 宥恕シタ後テモ「協議離婚ヲ爲シタル後ニ告訴ヲ提起

スレハ刑事訴訟法第二六四條ノ制限ニハ觸レナイ」
 （刑事訴訟法判例研究第一八五頁）コトモ出來ルカ判例
 ノ解スルカ如ク法律全般ノ精神カラシテ離婚訴訟ノ消
 滅ハ延イテ告訴權ノ消滅ヲ來スモノト解スルノカ妥當
 テハアルマイカ判例カ「本夫ノ告訴權ハ其ノ宥恕ト同
 時ニ當然消滅ニ歸ス」トイフテ告訴權ノ拋棄ト云ハナ
 カツタ所ニ大ニ用盡ノ存スルモノカアルコトカ判ラウ
 六（同上）由是觀之本夫カ妻ノ姦通ヲ宥恕シタ後告訴
 權ヲ提起スルモ其ノ効ナシトシタ大正十五年三月十九日
 ノ判決ハ宥恕ノ效果トシテ告訴權カ消滅スルコトヲ其
 ノ理由トシタモノテアリ今次ノ親告罪ニ付被害者カ加
 害者ト示談シタ後告訴ヲ提起シテモ其ノ効アリトシタ
 判決ハ親告罪ニ於ケル告訴權ハ之ヲ拋棄シ得サルコト
 ナリテ理由トシタモノテアツテ二者全ク其ノ論據ヲ異
 ニスルカ故ニ毫モ矛盾スルモノテハナイノテアル併シ
 ナカラ一派ノ學者ノ説クカ如ク眞キノ判例ヲ以テ告訴
 權ノ拋棄ヲ認メタモノト解スルニ於テハ彼此矛盾スル
 モノト誤解スル者ナキヲ保シ難イノテ此ノ一文ヲ草シ
 タ次第テアル・判事草野野一郎氏、法律新聞三〇九三
 號三頁）
 七 姦通ノ宥恕ト告訴權ノ消滅（第二六四條）
 八 親告罪ノ告訴ト拋棄ト許否（第二六七條）

◎舊法ニ於ケル告訴ノ效力

一（朝鮮高）本件訴訟記録ニ依レハ被告人ノ姦通行爲ニ
 付其ノ夫タル金南寅ニ於テ告訴ヲ爲シ公訴ハ之ニ基キ
 大正十二年十二月十九日提起セラレタルモノニ係ル右
 告訴ニハ刑事訴訟法第二六四條所定ノ婚姻解消又ハ離
 婚ノ訴ノ提起ナル要件ノ具備シタリシ形跡ノ認ムヘキ
 モノナシト雖當時施行セラレシ舊刑事訴訟法ニ於テハ
 之ヲ要件トセス他ニ同法上無効ヲ來スヘキ瑕疵ナキニ
 依リ本法施行前舊法ニ依リ爲シタル訴訟手續ノ效力ヲ
 保持スヘキ旨ヲ規定シタルヲ以テ該告訴及之ニ基ク公
 訴ノ提起ハ新法施行後ト雖尙效力ヲ有スルモノト謂ハ
 サルヘカラス・（朝鮮高等法院大正十三年（刑上）第
 三二號同年五月三日判決、朝鮮司法協會雜誌三卷五號
 一〇一頁）
 ◎（舊）告訴ノ拋棄ニ該當スルカ（刑訴法一五頁）
 ◎（舊）告訴權拋棄ノ條件トスル契約ト公ノ秩序（刑
 訴法一五頁）

◎告訴ノ取消ト他罪トノ關係

一（大審院）（舊）詐欺罪ハ人ヲ欺罔シテ財物ヲ騙取ス
 ルニ因リテ成立スルモノニシテ登記簿原本不實記載行
 使ノ如キハ同罪ノ法定構成要素ヲ成スモノニ非サルカ
 故ニ斯ノ如キ手段ヲ用ヒテ不動産騙取ノ目的ヲ達シタ
 ル場合ノ如キハ二者ノ間ニ刑法第五十四條所定ノ牽連
 關係アルモノト解スルヲ正當ト爲スヘク原判決力此ノ
 趣旨ニ基キ公訴事實ヲ解釋シ判示ノ疑律ヲ爲シタルハ
 不法ニ非ス而シテ既ニ登記簿原本不實記載行使ニ付テ
 疑律シ處斷シタル以上ハ之ト牽連一罪ヲ成スヘキ詐欺
 ノ點ニ付告訴ノ取下アリテ之ヲ不問ニ付スヘキ場合ト
 雖特ニ免訴ノ言渡ヲ爲スヘキモノニアラス・（大審院
 大正十一年（刑）第二〇〇〇號同十二年二月三日第三
 刑事部判決棄却、法律新聞二一〇〇號一五頁）
 二（舊）強姦負傷罪ニ對スル告訴ノ取下（刑訴法一六頁）
 三（舊）申告罪ヲ包含スル併合罪ノ上告ト告訴ノ取下
 （刑訴法五六頁）

第二百六十七條（告訴又ハ請求ノ取消）

◎連續的親告罪ノ一部取下ノ效果

一〔大審院〕(舊)兩判決ヲ對照スルニ被害者ノ數ニ於テ其間ニ二名ノ差アルコトハ洵ニ所論ノ如クナルモ右ハ單ニ連續的一罪中或部分ニ付キ兩者其見解ヲ異ニシ點ニ付止マリ刑ノ量定上毫モ差異ヲ認メザリシ以上此タルニキ原審カ第一審判決ヲ取消サザリシハ相當ナリトス

二〔同上〕記錄ヲ查スルニ所論五名ニ對シ被告ノ所爲ヲ罪トシ認メタル第一審判決言渡後所論前田恒三恒内政一ノ兩被害者ヨリ被告ニ對シ告訴ノ取下ヲ爲シタルカ爲メ原審ニ於テハ右兩名ニ對スル被告ノ所爲ニ付キ其罪ヲ認メス他三名ニ對スル傷害ニ付キテノミ其罪ヲ論シタルニ拘ハラズ其判決理由ニ於テハ其趣旨同一ナリトシテ第一審判決ヲ是認シタルコト洵ニ所論ノ如クナルモ本件ハ既ニ第一點ノ論旨ニ對シ說明シタル如ク五箇ノ行爲ヲ通シ單ニ連續的一罪ヲ構成スヘキ事實ニ係ルヲ以テ縱シ該事實中前掲ノ理由ニ因リ被害者ノ數ニ異動ヲ來シタリトスルモ爲メニ科刑ノ程度ニ影響ヲ及ボサザル限リ之レヲ同一趣旨ノ判決ト云フニ何等妨ケアルコトナケレハ原審カ所論判示ノ如ク判決シタリシハ相當ナリ。(大審院大正八年(レ)第二八七〇號同九年二月十日第一刑事部判決棄却、大審院判決錄二十六輯二卷刑事三九頁)

◎告訴ノ取下ト緣由ノ錯誤

一〔大審院〕(舊)被害者石太郎ハ被告人浦吉ニ對シ文書偽造行使詐欺事件ノ告訴狀ヲ當該檢事ニ提出シタルモ同年二月二十七日檢事ニ對シ口頭ヲ以テ右告訴ヲ取下ケタル事跡明瞭ナレハ本件ニ必要ナル訴訟條件タル被害者ノ告訴ヲ缺クノ結果公訴權ハ消滅ニ歸シタルモノト解スヘキモノトス但シ其ノ後大正十年四月二十三日附本村石太郎代理人清川岩太郎名義小笠原惣太郎上野永吉ニ對スル偽證罪ノ告訴狀中其ノ末段ニ於テ眞ニ被告人浦吉ニ對スル告訴ヲ取下ケタルハ同被告人ニ犯罪行爲ナキモノト誤信シタルニ因リタルモノニシテ眞意ニ出テタルニ非サレハ同人ニ對スル被告事件ノ取調ヲ爲シ相當ノ處分アランコトヲ請フ旨ヲ附言シ被告人浦吉ニ對スル本件詐欺罪ニ付告訴ノ意思ヲ表示シアルヲ以テ同罪ノ訴訟條件ハ茲ニ完備シ之ヲ論スルニ妨ナキカ如シト雖告訴ヲ待テ論スヘキ罪ニ付一旦告訴人カ任意ニ告訴ヲ取下ケタル場合ニ於テハ取下ノ目的タル告訴事件ニ付錯誤ナキ以上ハ告訴權ハ消滅スヘク其ノ緣由カ告訴人ニ於テ眞ニ加害者ノ犯罪ヲ宥恕スルニ出テタルト將タ加害者ニ犯罪ナシト錯覺シタルニ出テタ

ルトト問フコトヲ要セス蓋後ノ場合ニ於テハ告訴取下ノ緣由ニ錯誤アリト雖此ノ種ノ錯誤ハ告訴取下ノ無效ヲ惹起スヘキモノニ非サルヲ以テナリ從テ告訴人カ其ノ後ニ於テ告訴取下ノ事由ヲ證明シ其ノ眞意ニ非サルコトヲ主張シ更ニ告訴ヲ提起スルモ既ニ消滅セル公訴權ヲ復活スルニ由ナケレハ其ノ效力ヲ有セザルヤ疑ナ容レス。(大審院大正十年(レ)第二〇六八號同十一年二月二十八日第一刑事部判決破毀、大審院判例集一卷二號刑事八八頁)

第二百七十三條〔口頭ノ告訴發ト受理ノ手續〕

◎告訴ノ補充調書ト其ノ方式

一〔朝鮮高〕告訴補充調書ハ法令ニ依リテ作成スル訊問調書ノ一種ニ外ナラズト雖證人訊問調書トハ其ノ性質ヲ異ニスルヲ以テ證人訊問調書ト同一ナリト謂フヲ得ス從テ司法警察官ハ刑事訴訟法第二百七十三條ニ則リテ告訴補充調書ヲ作成スルヲ以テ足り同法第二百十六

第二百八十一條〔公訴ノ時効期間〕

條所定ノ方式ヲ履踐スル要アルコト無ケレハ所論司法警察官事務取扱ノ伊甲朱ニ對スル告訴補充調書ニ司法警察吏ノ立會ナキハ固ヨリ當然ニシテ違法ニ非サルヲ以テ原判決力同調書ノ内容ヲ證據ニ採用セシハ相當ナリ。(朝鮮高等法院昭和四年(刑上)第一一一號一一二號同年十一月十四日刑事部判決、朝鮮司法協會雜誌八卷十一號四六頁)

◎時効期間ノ五年「未滿」ノ意義

一〔舊〕刑事法規ニ於ケル以下ト未滿トノ別(刑法五頁)
 二〔舊〕以下ト未滿トノ別(續刑法三一頁)
 三〔舊〕文書偽造及偽造文書行使罪ノ時効完成期(刑訴法一八頁)

第二百八十四條 (時效期間ノ起算點)

◎公訴ノ時効ニ關スル諸問

- 一 (舊) 公訴ノ時効ト刑ノ時効トノ關係 (刑訴法一七頁)
- 二 (舊) 刑ノ時効ト公訴時効トノ關係 (續刑法六三頁)
- 三 (舊) 届出義務違犯ト公訴時効 (刑訴法三三八頁)
- 四 (舊) 國稅犯則ト時効ノ進行 (刑訴法三三八頁)

◎教唆、從犯等ノ時効ノ起算點

- 一 (舊) 教唆行為ノ時効起算點 (刑訴法一九頁)
- 二 (舊) 從犯ニ對スル公訴時効ノ起算點 (刑訴法一九頁)

第二百八十五條 (時効中斷ノ事由)

審若クハ公判ノ手續中ニ入ルモノナリ若シ夫レ狹義ニ解シテ豫審若クハ公判ノ手續トハ訴訟ノ遂行行為ノミヲ指スモノトセム歟勾留處分ノ如キモ時効中斷原因タラサルコトナリテ甚シク注意ヲ失スルコトナレハシ何者法文ニハ廣ク豫審若クハ公判ノ手續ト規定シ附帶的手續ヲ除外セサルノミナラス此ノ手續タルヤ訴訟ノ遂行ニ便宜ヲ供スルコトアリテ時効制度ノ趣旨ニ毫モ反スル所ナキモノナレハナリ

三 (同上) 夫レ刑事訴訟ノ目的ハ犯罪ノ證明 (現行法ノ規定ニ依ル) 及ヒ犯人ノ處罰ニアリ今犯人重病ニ罹リ獄中ニ呻吟スルコト數日ニ亘リ其生命ヲ失フヘキ危險アル場合ニ於テ保釋責任ノ決定ヲ爲スコトハ單ニ人情ニ適シタル處置タルニ止マラス刑事訴訟ノ目的ヲ達スルノ妨礙タルヘキ事情ヲ排除スルモノナレハ即チ此手續タル判例ニ所謂刑事訴訟ノ目的ヲ遂行スルモノナルナリ且ツ保釋責任ノ決定ハ勾留狀ノ效力ヲ變形セルニ過キサレモノナレハ保釋責任ノ決定ハ其本質ニ於テハ新ナル獨立ノ時効中斷原因ニ非ラスシテ勾留狀ノ效力ノ確認ニ外ナラス確認前ニ於ケル勾留狀ノ效力 (執行ノ繼續) ハ時効中斷ノ原因タレトモ確認後ニ於ケル勾留狀ノ效力 (保釋責任) ハ時効中斷ノ原因タラスト謂フハ奇怪ナル論理ナリ下略 (法學博士板倉松

◎時効中斷ノ原因タル公判手續 (一)

一 (大審院) (舊) 苟モ刑事訴訟ノ目的ヲ遂行スル手續アルニ於テハ公訴ノ時効ハ中斷セラレ其ノ手續ノ止ミタル時ヨリ更ニ時効期間ノ進行ヲ始ムルモノタルヤ洵ニ明カナリ而シテ犯人ニ對スル勾留ノ處分ハ刑事訴訟ヲ遂行スルノ目的ヲ以テ禁錮以上ノ刑ニ該ルヘキ者ニ對シ行フモノニシテ且此ノ處分タルヤ一時的ノ性質ヲ有スル他ノ處分ト其ノ趣ヲ異ニシ繼續的ノ效果ヲ有スルモノナレハ取調上ノ必要ニ因リ現ニ勾留ノ執行繼續スル以上ハ引續キ時効ヲ中斷スルノ效アルモノニシテ保釋若ハ責任ノ處分アリタルトキハ爾後更ニ時効ノ進行ヲ始ムルモノト謂ハサルヘカラス (大審院大正十一年 (レ) 第八〇〇號同年八月二十三日第三刑事部判決破毀移送、大審院判例集一卷七號刑事四一六頁)

二 (板倉博士) 抑モ保釋責任ノ決定ナルモノハ犯罪ノ證明若クハ刑罰ノ適用ニハ直接ノ關係ナク其目的ハ被告人ニ加ヘタル自由ノ拘束 (此拘束ハ證據ノ湮滅被告人ノ逃走ヲ防ク目的トスルモノ) ナク解クニ在リテ豫審若クハ公判中ニ生スル手續ナレハ其性質ハ附帶的ノモノニシテ訴訟ノ遂行手續ニ屬セサレトモ第一一條ノ豫

◎時効中斷ノ原因タル公判手續 (二)

一 (東京區) 密賣淫媒合容止ノ公訴事實ニ付當裁判所ハ大正五年六月二日以來審理中ノ處一件記録ニ徵スレハ大正五年六月九日ノ第二回公判期日ニ於テハ其ノ期日ハ追テ定ムヘキ旨ヲ告ケ閉廷シ之ニ基キ大正五年十一月八日同年十一月十一日公判開廷スヘキ旨ノ呼出ヲ被告ニ發シタルトモ當裁判所ハ當日開廷セスシテ更ニ大正六年六月五日ニ於テ同年六月十二日出頭スヘキ旨ノ適式ノ呼出ヲ被告人ニ發シ其間適式ニ審理ヲ進行シタル事實ノ徵スヘキモノナキヲ以テ本件ハ眞ニ大正五年十一月八日ノ呼出ノ發布ニ依リ時効ノ中斷ヲ爲シタルトモ該呼出狀ニ指定シタル期日ニ公判ヲ開廷セサルニ依リ該期日ハ更ニ時効ノ進行ヲ始メ大正六年六月五日呼出狀發布迄六月以上ノ期間ヲ經過シタルモノトス然ルニ刑事訴訟法第八條ニ依レハ本件ノ如ク拘留ニ該ル罪ハ六月ノ期間經過ニ依リ時効ニ罹カルヲ以テ本件ハ既ニ時効ノ完成シタルモノナリ仍テ同法第二百二十四條第六十五條第三號ニ則リ被告人ニ對シテ免訴ノ言渡ヲ爲ス可キモノトス (東京區裁判所大正六年十一

太郎氏、法學新報三二卷第一〇號)

月六日判決、法律新聞一三七一號三四頁)

二(舊) 公判開廷ノ延期ト時効ノ中斷(刑訴法二〇頁)

◎犯人ノ不明ト時効ノ中斷(刑訴法二〇頁)

第二百八十八條(公訴ノ提起ノ形式)

◎關稅法ノ通告及告發ト訴追條件

一(臺灣高) 凡ソ關稅法違反事件ニ於テハ稅關長ハ關稅法第九十四條九十五條及第九十七條ニ依リ先ツ犯則者ニ對シ罰金若クハ科料ニ相當スル金額其他同法第九十四條所定ノ事項ヲ通告シ其通告ニ應セザルトキ又ハ犯則者ニ通告ヲ爲シ難シト認ムル方若クハ通告ノ旨ヲ履行スル資力ナシト認メタルトキハ直ニ告發スルコトヲ要シ以上ハ關稅法犯則者ニ對シ必然ニ履踐スヘキ行政處分ナルヲ以テ稅關官吏力其ノ犯則事件ヲ發見シタル場合ト檢察官又司法警察官力之ヲ發見シタル場合トニ因リ其處分ヲ異ニスヘキ理由ナキノミナラス同法第九

十六條ニ依レハ犯則者ニ於テ右通告ノ旨ヲ履行シタルトキハ公訴權ハ消滅スルモノナレハ一面ニ於テ通告ヲ爲シ一面ニ於テ公訴ヲ提起スル方如キハ固ヨリ法律ノ許ササル所ナリト謂ハサルヘカラス然ルニ若シ檢察官力稅關長ノ告發ヲ待タスシテ公訴ヲ提起スルコトヲ得ヘシトセハ稅關長ノ通告處分ヲ爲シタルニ拘ラス檢察官ハ之ヲ知ラスシテ公訴ヲ提起スルコトナシトセス此ノ如クナル時ハ關稅法ノ法意ニ悖ルノミナラス其通告ヲ爲シ又ハ告發ヲ爲スハ一ニ稅關長ノ認定ニ因ルモノナルヲ以テ結局右犯則者ニ對シテハ稅關長ノ通告ニ關スル處分竝ニ告發ヲ待ツニ非サレハ檢察官ハ公訴ヲ提起スルコトヲ得サルモノト解セザルヘカラス即右二個ノ手續ハ關稅法違反罪ニ付訴追條件ヲ形成スルモノトス。(臺灣高等法院大正九年(上刑)五〇號同年十二月十六日上告部判決棄却、法律新聞一八二〇號一九頁)

◎親告罪ヲ含ム牽連事件ト其ノ審判

一(舊) 親告罪非親告罪ノ牽連ト審判方(刑訴法一五

頁)

二(舊) 親告罪ヲ含ム牽連犯ト審判方(續刑法一五一頁)

三(大審院) 牽連罪ヲ構成スヘキ公訴事實ノ一部カ親告罪ニシテ告發ナキ爲メ之ニ對スル公訴ハ受理スヘカラスアルモノナルトキト雖モ公訴ノ適法ナル他ノ部分ニ付キ罪ノ有無ヲ判決シ其判決力確定シタルトキハ公訴事實全部ニ對スル公訴權ハ之ニ依リ消滅スルヲ以テ右親告罪ニ付キ更ニ告發ノ要件ヲ具備スルモノニ對シ再ヒ公訴ヲ提起シ得ヘキモノニアラス從テ牽連罪ノ一部カ無罪ナルトキト等シク主文ニ於テ公訴不受理ノ言渡ヲ爲スヘキモノニアラス然レハ原判決力所論公訴事實ニ對スル公訴ハ受理スヘカラスアルモノトスルモ起訴狀ニ依レハ列示傷害罪ト牽連ノ關係アルカ故ニ主文ニ於テ其言渡ヲ爲サザリシハ相當ニテ論旨ハ理由ナシ(大正七年(れ)第四二一號及同年(れ)第一二九六號判例參照)。(大審院大正七年(れ)第二三七八號同年十一月三十日第三刑事部判決棄却、大審院判決錄二十四輯二十九卷刑事一四八七頁)

四(大審院) 記録ヲ查スルニ玉田三治聽取書ニハ「私ハ被告洋ト親族テスソレハ同人ノ從妹玉田イヨ方(私ハ婿養子ニ行テ居リ「イヨ」ハ私ノ妻テアリマス)トノ三治ノ陳述記載アリテ三治ハ被告洋ノ直系血族ニアラ

第二百九十條(公訴提起ノ意思表示ノ方式)

◎公訴ノ提起ニ關スル諸問

- 一 電話ニ依ル公訴提起ノ效力(第二九〇條)
- 二 (舊) 日曜日ニ於ケル公訴提起ノ效力(刑訴法六二頁)
- 三 (舊) 「明治四〇年四月一日」トアル豫審請求書(刑訴法六二頁)
- 四 (舊) 起訴ノ有無ヲ定ムル標準(刑訴法六二頁)
- 五 (舊) 見解ノ相違ト起訴ノ效力(刑訴法六四頁)
- 六 (舊) 豫審手續ニ缺點アル事件ノ審判(刑訴法一四七頁)
- 七 (舊) 豫審請求書ノ欠缺(刑訴法三〇五頁)
- 八 (舊) 豫審請求書ノ不合法ト追完(刑訴法六三頁)
- 九 (舊) 追訴ノ手續(刑訴法六二頁)
- 一〇 (舊) 起訴ノ場所(刑訴法六二頁)
- 一一 (舊) 受訴裁判所ノ表示ナキ公判請求書(第二九〇條)
- 一二 (舊) 單獨判事ト自己ヲ檢事代理ニ指定(諸法令上卷(裁判所構成法)六〇一頁)
- 一三 (舊) 審理更新ト口頭起訴ノ效力(刑訴法一六四頁)

第二百九十一條(公訴ノ提起ト事件及被告人)

◎公訴ノ範圍ニ關スル諸問

- 一 (舊) 起訴ノ範圍ト審判ノ職責(刑訴法一四五頁)
- 二 豫審經由事件ト權利拘束ノ範圍(第二八八條)
- 三 (舊) 犯罪ノ一部ニ對スル起訴ノ效果(刑訴法六四頁)
- 四 起訴事實ニ包含セサル別個ノ事實(第二九一條)
- 五 起訴事實ト判示事實ト異同(補遺第三六〇條)
- 六 (舊) 起訴後ノ犯罪遂行ト公訴ノ效力(刑訴法六七頁)
- 七 (舊) 繼續犯ニ對スル起訴ノ目的(刑訴法六四頁)
- 八 (舊) 數箇ノ段階アル犯罪ト起訴及審判(刑訴法一四六頁)
- 九 (舊) 因果ノ關係アル數所爲ニ對スル審判權(刑訴法一四六頁)
- 一〇 (舊) 加重ノ情態アル犯罪ト審判權(刑訴法一四六頁)
- 一一 (舊) 姦淫事件ニ對スル豫審終結決定(刑訴法一三六頁)

頁)

- 一二 (舊) 動産ノ轉讓及脱漏ト起訴ノ範圍(刑訴法六六頁)
- 一三 (舊) 贓物罪ニ關スル公訴事實ノ範圍(刑訴法一六八頁)
- 一四 (舊) 破産宣告確定前ニ於ケル詐欺破産ノ公訴(刑訴法六五頁)
- 一五 一部有罪一部無罪ト判決理由(第三六〇條)
- 一六 公訴ノ範圍ニ關スル諸問(第二九一條)

◎公判ノ提起ト被告人ノ指定

- 一 (關東高) 起訴ハ一定ノ被告人ニ對シ特定ノ所爲ニ關シテ之ヲ審理裁判ヲ要求スル行爲ナルヲ以テ起訴狀ニ於テハ常ニ一定ノ被告人ヲ指定スルヲ以テ其要件トシ被告人ヲ一定スルニハ其姓名ヲ掲ケルヲ以テ通例トスヘク氏名詳カナラサル場合ニ於テハ其人相特徴等ノ記載ニ依リ起訴セラレタル被告人ヲ特定セサルヘカラサレハ本件公判請求書ニ於ケルカ如キ外六名ノ文詞ハ到底其何人ヲ起訴シタルヤ明カナラサル者ナルヲ以テ即チ被告人ノ指定ヲ缺キ起訴ノ方式ニ於テ適法ナラサルモノト謂ハサルヘカラス故ニ起訴狀中適法ノ起訴アリタリト認ムヘキ被告類藏安次郎ニ對スル器物毀棄及被告類藏ニ對スル傷害ノ點ヲ除キ其他ハ總テ公訴受理ス

ヘカラサルノ言渡ヲ爲スヘキモノトス。(關東都府高等法院大正六年七月七日判決、法律新聞一二九〇號二三頁)

- 二 (舊) 氏名不詳ノ被告人ニ對スル公訴(刑訴法六一頁)
- 三 (舊) 氏名不詳男一人ト記載セル起訴狀(刑訴法六〇頁)
- 四 (舊) 被告人不明ナル現行犯ノ起訴(刑訴法六〇頁)
- 五 (舊) 豫審請求書ノ被告人氏名ノ誤謬(刑訴法六一頁)
- 六 (舊) 豫審請求書ニ於ケル被告人表示ノ判斷(刑訴法六一頁)
- 七 法人ヲ處罰スル場合ノ被告人(補遺第三六條)

◎連續犯、牽連犯ト公訴ノ範圍

- 一 (舊) 連續犯ノ公訴ト審判ノ範圍(續刑法一六四頁)
- 二 (舊) 連續犯ニ對スル公訴ノ範圍(第二五八條)
- 三 (舊) 一罪ノ一部ニ對スル起訴ト審理權ノ範圍(刑訴法六四頁)
- 四 (舊) 事實上ノ牽連罪ト公訴ノ範圍(刑訴法一七二頁)
- 五 連續犯、牽連犯ト公訴ノ範圍(第二八八條)
- 六 一個ノ連續犯ニ對スル二通ノ起訴狀(刑訴法二四九頁)
- 七 連續行爲ニ對スル數回ノ起訴ト其ノ效力(刑訴法一

五〇頁)

◎包括一罪ノ一部ト判決ノ要否(續刑法一六六頁)

◎二重起訴ノ效力

- 一 (舊) 同一事件ニ對スル再度ノ豫審請求(刑訴法六七頁)
- 二 (舊) 豫審繫屬中公判ニ對スル再起訴(刑訴法六七頁)
- 三 (舊) 訴旨ノ釋明ナルカ將タ再起訴ナルカ(刑訴法六七頁)
- 四 同一事實ニ對スル二個ノ公訴(第二九一條)
- 五 一犯罪ニ公訴ノ適否(第三一七條)

◎同一事件ノ再起訴ナリヤ(補遺第三一七條)

第二百九十五條(豫審ノ目的ト取調事項)

◎豫審ニ於ケル併合審理

- 一 (大審院) 檢事カ同一被告人ニ對シ併合罪ノ關係ニ立

ツヘキ數罪トシテ數回ニ起訴シタル場合ニ於テ豫審判事ハ檢事ノ意見ニ反シ右數罪ヲ連續犯ノ關係ニ在ルモノト思料スルトキト雖モ豫審終結決定ニ於テ之ヲ連續ノ一罪トシテ公判ニ付スルハ格別豫審處分上一罪ヲ以テ之ヲ取扱フコトハ法ノ許容セサル所ニシテ必ス數罪トシテノ取扱ヲ爲ササルヘカラス。(大審院大正六年(レ)第三五〇號同七年三月一日第一刑事部判決破毀移送、大審院判決錄二十四輯三卷刑事一四四頁)

- 二 (平井氏) 豫審判事ハ豫審請求事件ニ付自ラ其審理ノ方針ヲ定ムヘキ裁量權ヲ有スルモノトス蓋シ既ニ審理權ヲ認メラレタル以上起訴ノ範圍内ニ於テ如何ナル順序方法ニ依リ之ヲ審理スヘキヤハ全ク其職權内ニ包含スルモノト解スヘキナ正當トスレハナリ故ニ刑事訴訟法上何等ノ明文存セサルモ豫審判事ハ任意各個ノ事件ヲ併合審理シ得ヘク又多クノ場合併合罪ノ規定ノ適用上寧ロ之ヲ妥當トスヘシ——併合審理ニ付テハ何等ノ形式ヲ必要トセス單ニ併合審理セラレタル事實アルノミヲ以テ足レリトス。(檢事平井彦三郎氏、法學新報三八卷八號一一四頁)
- 三 (牧野博士) 裁判所ハ同時ニ繫屬スル數箇ノ刑事事件ニ付任意ニ併合又ハ分離ヲ爲スコトヲ得ヘシ苟モ何等カノ關係アリテ併合審理ヲ適當トスルトキハ獨リ第一

審ノ公判ニ於テノミナラス豫審及第二審ニ於テモ之ヲ併合スルコトヲ得ヘシ。(法學博士牧野英一氏、新訂刑事訴訟法三二八頁)

◎豫審ニ關スル諸問

- 一 (舊) 豫審判事ノ職責(刑訴法六九頁)
- 二 (舊) 請求ヲ受ケサル事件ノ豫審カ(刑訴法六九頁)
- 三 (舊) 事件受附日附ニ先ツ豫審調書ノ效力(刑訴法六九頁)

第三百十四條(豫審免訴ノ決定(二))

◎連續犯ニ對スル確定判決ノ效力

一 (法曹會) 判決確定力ノ其效ヲ及ホス範圍ニ付キ異說アルハ論ヲ俟タスト雖モ之ヲ審判可能ノ範圍ト一致セシムルヲ以テ正解トス而シテ本問確定判決後ニ互ル連續犯ニ關スル審判可能範圍ノ終點ハ公訴提起ニ在ラス

◎(舊) 公訴權消滅ノ原因タル確定判決(刑訴法一七頁)

第三百十六條(豫審決定ト不服申立)

シテ該判決言渡ニ在ルコト明白ナルヲ以テ確定判決後ノ同一所爲ニ對シテハ更ニ起訴スルヲ得ヘキモ判決前ノ所爲ニ付テハ之ヲ起訴スルヲ得ス或ハ結審後判決言渡前ノ犯罪行為ハ審判不能ニ屬スト論スル者ナキヲ保セスト雖モ若シ裁判所ニ於テ慎重ニ審判スルモノトセシカ或ハ辯論ヲ再開シテ該行為ニ付キ審判ヲ爲シ得サルニ非サルヲ以テ此期間ニ於ケル犯罪行為ニ付テモ慎重ニ審判スルコトヲ怠リテ爲シタル判決ハ其確定力ヲ及ホスモノト論斷セサルヲ得ス。(法曹會大正六年六月二日決議、法曹記事二十七卷七號五三頁)

二 (舊) 連續犯ニ對スル確定判決ノ效力(續刑法一六八頁)

◎聚合罪ノ一部ニ對スル起訴ト審判權(刑訴法一六四頁)

◎豫審決定ノ效力發生時期

- 一 (大審院) (舊) 豫審終結決定ハ之カ決定ヲ爲スト同時ニ其ノ效力ヲ生スルモノニシテ其ノ決定ノ正本ヲ被告ニ送達スルヲ俟テ初メテ其ノ效力ヲ發生スルモノニ非ス。(大審院大正十一年(レ)第五五六號同年五月二十五日第二刑事部判決棄却、法律評論十一卷刑訴七四頁)

第三百十七條 (豫審免訴ノ決定ノ效果)

◎同一事件ノ再起訴ナリヤ

- 一 (舊) 詐欺破産罪ノ再起訴ナルカ (刑訴法六五頁)
- 二 (舊) 罪名ノ變更ト再訴ノ不許 (刑訴法六七頁)
- 三 罪名ノ變更ト公訴ノ範圍 (第二九一條)
- 四 (舊) 實質上ノ一罪ト判決ノ確定力 (刑訴法六四頁)
- 五 連續犯ニ對スル確定判決ノ效力 (第三一四條)

六 二重起訴ノ效力 (補遺第二九一條)

- ◎ (舊) 公訴不受理ノ判決ト起訴手續 (刑訴法六六頁)
- ◎ 一犯罪ニ公訴ノ適否 (第三一七條)

第三百三十一條 (罰金以下ノ被告事件ト代理人ノ出頭)

◎被告代理人ノ供述ト證據力

- 一 (津田氏) 罰金以下ノ刑ニ該ル事件ニ付代理人ノ出頭シタル場合ニ於テ代理人ノ供述ハ代理人自身ノ供述トシテ斷罪ノ資料ニ供シ得ヘキモノトス。(法學士津田進氏、法學新報三十六卷四號八四頁、法律評論十五卷刑訴一二六頁)

第三百三十六條 (證據裁判ノ原則)

◎事實「認定」ノ意義及事例

- 一 (舊) 「認定」ノ意義 (刑訴法二三九頁)
- 二 (舊) 事實裁判所ノ認定權 (刑訴法二三九頁)
- 三 (舊) 正當防衛ナルヤ否ヤノ判斷 (刑訴法二四〇頁)
- 四 (舊) 犯罪供用ノ物件タル判斷 (刑訴法二四〇頁)
- 五 檢事及警察官ニ對スル自白ノ效力 (第三四六條)
- 六 自白ノミニ據ル事實認定ノ適否 (第三四六條)
- 七 (舊) 別異ノ裁判所ニ於ケル事實認定ノ異同 (刑訴法一八三頁)
- 八 一過失數人ノ死傷ト事實ノ判示方 (續刑法四九三頁)
- 九 犯罪事實ノ判示方 (刑訴法一八六頁)
- 一〇 (舊) 帳簿保管者ノ判定 (刑訴法二四〇頁)

第三百四十條 (證據書類ノ取調)

◎證據書類ノ意義

◎證據調ト展示カ朗讀カノ選擇

- 一 (大審院) (第三四一條) 「證據調ト展示カ朗讀カノ選擇 (一)」ノ六七
- 二 (平井氏) 右一ノ批評—證據書類ハ講學上文中ノ所謂報告文書ニ屬ス文書ニハ其ノ形態カ證據ト爲ルモノト其ノ意義カ證據ト爲ルモノトアリ前者ヲ檢證物ト謂ヒ後者ハ更ニ之ヲ分チ認識スヘキ事項ヲ内容トスルモノナラシメテ報告文書ト謂フ而テ以上ノ三者ハ之ヲ物的證據又ハ物證ト稱シ又之ヲ刑事訴訟法上ノ分類ニ從フトキハ檢證物ト處分文書トハ第三四一條ノ證據物ニシテ報告文書ハ第三四十條ノ證據書類ナリトス報告罪ニ於ケル告訴狀ハ認識スヘキ事項ヲ内容トシ其ノ書面ノ意義カ證據トナルモノナレハ證據物ニシテ證據書類ニ非サルコト本判決ノ如シ然レトモ本判決力其ノ存在カ事實證明ノ用ヲ爲スモノニ外ナラサルカ故ニ證據物ニ屬スト説明シタルハ適當ナラス蓋シ物的證據ハ單ニ報告罪ノ告訴狀ノ如キ處分文書ニ止マラス各種押收物ノ如キ檢證物ハ勿論訊問書鑑定書ノ如キ報告文書ト雖存在シテ始メテ證據ト爲ルモノナレハ此ノ意味ニ

リシテ其ノ存在カ證據ト爲ラサルモノトシテ存セザレハナリ以下更ニ證據書類ノ性質ヲ明カニセン

三〔同上〕證據書類ハ報告文書ナルモ必スシモ刑事訴訟法ニ依リ作成シタルモノナルコトヲ要セス蓋シ報告文書中ニハ刑事訴訟法ニ依リ作成スル訊問調書處分調書公判調書鑑定書等ノ如キモノ即チ依テ法文書ト同法ニ依ラス任意ニ作成スル檢察司法警察官ノ聽取書公務員報告書私人ノ盜難届書ノ如キモノ即チ任意文書トアルモ證據書類ハ此兩者ヲ包含シ二者取扱上區別スヘキ何等ノ理由ナキコトハ他ノ第五十五條第三百四十二條第三百四十三條等ノ書類カ此兩文書ヲ包含スル用例ニ照シ明カナリ

四〔同上〕次ニ證據書類ハ當該被告事件又ハ之ト密接ノ關係アル他ノ被告事件ニ付作成シタル報告文書ナルコトヲ要セス蓋シ第三百四十條カ證據書類ノ取調方法トシテ之ヲ明瞭シ又ハ其ノ要旨ヲ告知クルコトヲ原則トシテ爲シタル所以ハ其ノ書類ノ意義カ證據ト爲リ其ノ内容ヲ知悉セシムルニ最モ適當ナル方法ト認メタルニ因ルナルヘシ果シテ然ラハ性質上報告文書ナルニ於テハ民事事件ニ付作成シタルモノト雖之ヲ除外スル理由存セザレハナリ舊法當時ノ判例ニ於テ證據書類ヲ以テ當該被告事件又ハ之ト密接ノ關係アル他ノ被告事件ニ

付作成シタル報告文書ナルコトヲ要スト説明シ又本判決カ犯罪ニ依リ作成シタル報告文書ナリト説明シタルハ首肯シ難シ民事事件ニ付作成シタル報告文書ノ例トシテハ民事訴訟法ニ於テ證人甲カ偽證ヲ爲シタルコトカ其ノ民事訴訟法ニ於ケル證人乙丙丁等ノ證言ニ依リ明確ナル場合ニ於ケル甲乙丙丁等ノ訊問調書ノ如シ是等ノ人々カ後日甲ノ偽證被告事件ニ付刑事被告人又ハ證人トシテ取調ヘラレタルトキハ其ノ訊問調書カ第三百四十條ノ報告文書タルニ之ト同一内容ヲ有スル右民事事件ニ於ケル證人訊問調書カ報告文書タラサルノ理由ナカルヘク又一ハ證據書類トシテ則讀又ハ要旨ノ告知ヲ適當トスルモ他ハ證據物件トシテ展示ヲ適當トスルノ理由ナカルヘシ是等ノ點ヲ考慮セハ證據書類ハ總テノ報告文書ヲ包含シ斯ノ如キ制限ヲ付スヘキモノニ非サルヲ知ルヘシ。(檢事平井彦三郎氏、法學新報三八卷一號一〇八頁)

五 證據書類カ證據物件カノ判定(第三四〇條)
六(舊)證據書類ノ意義(刑訴法二三三頁)

◎辯護人提出ノ證據ト被告人ノ意見(第三四七條)

第三百四十一條 (證據物件ノ取調)

◎被告人ノ不出頭ト證據物ノ展示

一〔林博士〕證據物ノ展示又ハ要旨ノ摘示ハ被告人ニ對シテ之ヲ爲スモノナルヲ以テ被告人存在セスシテ手續ヲ遂行スル場合ニ於テハ之ヲ爲スヲ要セス。(法學博士林賴三郎氏、刑事訴訟法要義五四一頁)
二〔廣瀨氏〕被告人ニ對スル示シハトリモナホサス公判廷顯出テ意味シ從テ又證據物ニ對スル Begleitungsノ主體ハヒトリ被告人ノミニ限定セラルヘキテナク公判廷ニ居合ハス人々ノ關係人タルト非關係人タルトヲ問ハスノ一切モマタ之カ主體テアルトノ解釋ハ刑事訴訟手續ニ於ケル公開主義ノ原則ト一致スル一人々ハ此ノ展示ニ依リテハシメテ何カ Unklarheit テアルカ理解スルコトカ出來ル。(廣瀨通氏、法曹會雜誌七卷七號八九頁)

第三百四十四條 (證據調ニ關スル決定)

◎記録取寄ノ決定ト其ノ施行

一〔大審院〕證據書類取寄ノ申請ニ對シ裁判所カ之ヲ許容スルノ決定ヲ與ヘ其ノ結果トシテ該書類ヲ取寄セ法廷ニ顯出シタル以上之ヲ以テ證據決定ノ施行ハ完了シタルモノト謂フヘク右書類ヲ被告人ニ讀聞ケ意見反證ヲ求ムル手續ヲ爲スカ如キハ右證據決定ノ内容ニ屬セサルモノトス。(大審院大正十四年(れ)第一三七一號同年十一月十四日第四刑事部判決棄却、大審院判例集四卷十號刑事六五五頁)
二〔大審院〕凡ソ判決裁判所カ訴訟關係人ノ申請若ハ職權ニヨリ證據物ヲ取寄ス可キ決定ヲ爲シ其ノ取寄セタル證據物ヲ公判廷ニ顯出シタル以上ハ被告人ニ意見ノ有無ヲ問ヒ且利益ノ證據ヲ提出シ得可キ旨告知スルヲ俟タシテ該決定ハ完全ニ施行セラレタルモノト謂ハサルヘカラス一叙上ノ場合證據決定ニ基キ裁判所ノ爲

スヘキ任務ハ其ノ證據物取寄ノ手續ヲ爲シテ取寄タル證據物ヲ公判廷ニ顯出スルニ因リテ終了シ被告人ニ意見ノ有無ヲ問ヒ且利益ノ證據ヲ提出スルコトヲ得可キ旨告知スルハ之唯被告人ナシテ完全ニ辯護權ヲ行使セシメントスル法意ニ外ナラサルカ故ニ該證據物ヲ斷罪ノ資料ニ供スル場合ニ其ノ必要アルニ止リ證據決定施行ノ範圍内ニ屬セス。(大審院大正十四年(れ)第一八五號同年三月二十七日第六刑事部判決棄却、法律評論十四卷刑訴六一頁)

三(舊) 記錄取寄決定ノ範圍ト被告ノ意見辯解(刑訴法一七一頁)

四(舊) 證據書類取寄決定ノ施行(刑訴法一六三頁)

五(舊) 書類取寄決定ト一部囑託不應(刑訴法一七四頁)

六 記錄取寄決定ト其ノ施行(第三四四條)

◎民事記錄ト證據調ノ方法(第三四〇條)

第三百五十三條 (十五日以上ノ不開廷ト公判手續ノ更新)

◎證據調ノ手續ト審理更新ノ要否

一(大審院) (舊) 辯護人カ公廷ニ於テ爲シタル證人訊問ノ申請ハ縱令裁判所ノ構成ニ變更ヲ生スルモ依然其效力ヲ保有スルモノニシテ證人申請ニ對スル決定ハ口頭辯論ニ基クコトヲ要セサルモノナレハ裁判所ノ構成ニ變更ヲ生シタル爲メ審理ヲ更新シタル場合ニ於テモ裁判所ハ必スシモ該申請ニ關スル口頭辯論ヲ聽クノ要ナク直ニ許否決定ヲ爲スコトヲ得ルモノトス。(大審院大正九年(れ)第二五號同年三月十七日第三刑事部判決棄却、大審院判決錄二十六輯三卷刑事一七八頁、法律評論九卷刑訴二三頁)

二(大審院) (舊) 公判ノ審理ヲ續行スルニ當リ裁判所ノ構成ニ異動アリタル場合ニハ刑事訴訟法第二百九條ノ律意ニ照スモ其續行公判ニ於テハ先ツ審理ヲ更新シ被告人ニ對シテ事實ノ訊問ヲ爲シ然ル後證據ノ取調ヲ爲スチ以テ普通當然ノ順序ト爲スヘキモノナルモ此順序ハ絕對的ニ之ヲ遵守スルヲ要スルモノニアラザレハ假令此順序ニ違ハサルトモ雖直ニ其審理手續ヲ無効ナリト論斷スルヲ得ス原審公判始末書ニ依レハ原審ハ裁判所ノ構成ニ異動アリタル其第二回公判ニ於テ審理更新ニ先チ直チニ第一回公判ニ於ケル決定ニ基キ呼出シタル證人小坂甚吉ヲ訊問シタルコト所論ノ如クナルモ尙之ニ引續キ審理ヲ更新スル旨ヲ告ケ被告人ヲ訊

問シ證據ノ取調ヲ爲シ辯論ヲ聽キタル上結審シ結局被告事件ノ全部ニ涉リ審理ヲ遂行シタルコト明白ナレハ原審ノ審理手續ハ前說示ノ順序ヲ變更シタルコトノ外毫モ實體眞實發見ヲ目的トスル口頭審理ノ定期ニ反シタル廉ナキモノト云フヘク而シテ右順序ノ變更ハ直チニ審理手續ヲ無効ニ歸セシムルモノニアラザルコト前說示ノ如クナレハ上告論旨第一點ノ如ク原審ノ審理手續ヲ以テ違法ナリトシ牽キテ原判決ヲ不法ナリト論スルハ其當ナ得タルモノニアラス隨テ前掲證人ノ證言ハ無効ニアラサルニヨリ原判決ニ於テ之ヲ罪證ニ供シタルハ違法ニアラス。(大審院大正六年(れ)第三二一三號同七年三月六日第三刑事部判決棄却、大審院判決錄二十四輯四卷刑訴一八七頁)

三 證據調ノ手續ト審理更新ノ要否(第三五四條)

第三百六十條 (判決ノ記載事項)

◎起訴事實ト判示事實トノ異同

一(大審院) 被告人彌太郎源次郎ニ對スル豫審請求書ヲ閱スルニ被告人等ハ共謀シ若クハ單獨ニテ栗林辰太郎又ハ江崎久吉ニ對シテ原神社境内所在ノ立木ナルコトヲ欺隱シ之ヲ賣却シテ代金ヲ交付セシメ因テ辰太郎又ハ久吉ヲシテ不法ニ右立木ヲ伐採セシメタル詐欺及竊盜ノ事實ヲ起訴シタル趣旨ヲ認ムルニ難カラズ而シテ原判決中被告人彌太郎源次郎ニ對スル判示第四乃至第七ノ竊盜ノ事實ハ右豫審請求書記載ノ竊盜事實中ニ包含セラレルモノトス蓋シ被害者ヲ同シクスルコトニ因リ犯罪ノ時及場所ヲ同シクスルコトニ因リ又犯罪ノ物體ヲ同シクスルコトニ因リテ起訴ノ事實ト判示ノ事實トニ付犯罪ノ同一性ヲ認メ得ヘキ以上ハ共犯ノ有無多少犯罪ノ物體ノ種別數量其ノ他犯罪ノ態樣ニ關シテ細ノ點ニ於テ異動アリトスルモ之カ爲ニ起訴ノ事實ト判決ノ事實トノ間ニ必スシモ差異アリト謂フヘカラス。(大審院大正十五年(れ)第一七三九號同年十二月二十四日第一刑事部判決棄却、大審院判例集五卷十二號刑事五九三頁、法律新聞二六五八號一三頁)

二(大審院) 豫審終結決定書ニ依レハ所論起訴事實ニ關スル認定ハ被告人ハ大正二年十月中人某カ琵琶湖ノ水ヲ利用シ水力電氣會社ノ設立ヲ計畫セルモ其ノ事實ノ確實ナラサルヲ知悉セルニ拘ラス……伊藤市太郎ニ

向ヒ之ニ出資セハ有利ナル旨申爲リ名ヲ出資ニ藉リテ
同人ヨリ數回ニ四千五百圓程ヲ騙取シタリト言フニア
リテ之ヲ列示第一事實ト對比スルトキハ犯罪ノ日時被
害者ニ出資ヲ求メタル口實騙取金額等ニ一致セザルト
コロアルコト所論ノ如シト雖而カモ其ノ詐欺ノ内容ハ
等シク琵琶湖ノ水ヲ利用スル水力電氣會社ノ設立ニ假
託シ同一被害者ヨリ金員ヲ騙取シタル事實ニ關スルモ
ノニシテ彼此同一性ヲ有シ兩者間ニ於ケル叙上犯罪日
時等ノ相違ハ事件ノ同一性ヲ害スルモノニ非サルコト
明ナルヲ以テ原判決ハ不告不理ノ原則ニ違背シタル不
法アルコトナク又所論公訴事實ニ對シ無罪ノ言渡ヲ爲
ササリシハ相當ナリト言ハサルヘカラス。(大審院昭
和二年(れ)第三三七號同年五月三日第六刑事部判決
棄却、法律新聞二七二六號一頁)

◎訴訟條件ト判決理由ノ説示

一〔大審院〕(舊)姦通罪ハ親告罪ノ一種ニ屬シ親告罪
ニ於ケル被害者ノ告訴ハ處罰條件ニ非スシテ訴訟條件
ナリトス訴訟條件ハ當該被告事件ニ付裁判所カ職權ヲ

三 請求書ト犯罪日時ノ異ナル豫審決定(第三一二條)
◎公訴ノ範圍ニ關スル諸問(補遺第二九一條)

◎自首ノ事實ト判示ノ要否

一 教唆犯成立ノ時及所(續刑法一九二頁)

以テ審査スヘキ事項ニシテ現實ニ其ノ具備スルヲ要ス
ルハ勿論ナルモ判決理由ニ於テ特ニ訴訟條件ノ具備ス
ル事實ヲ判示シ且證據ヲ擧ケテ其ノ事實ヲ認メタル理
由ヲ説明スルノ要ナキモノトス。(大審院大正十一年
(れ)第二四三號同年三月二十八日第一刑事部判決棄
却、大審院判例集一卷三號刑事一七四頁)
二(舊)訴訟條件存否ノ説示(刑訴法一九三頁)
三 親告罪ト告訴トノ關係(刑訴法一九三頁)

◎教唆又ハ從犯ト犯罪場所ノ判示

一 教唆犯成立ノ時及所(續刑法一九二頁)

一〔大審院〕(舊)自首者ニ對シ其ノ刑ヲ減輕スルト否
トハ裁判所ノ職權ニ屬シ其ノ刑ヲ減輕スルコト適當
ナラストスルトキハ縱令自首ノ事實アリトスルモ特ニ
之ヲ判示スルノ要ナキモノトス。(大審院大正十二年
(れ)第四七一號同年四月二十日第一刑事部判決棄却、
大審院判例集二卷四號刑事三四二頁)
二(舊)自首減輕ト判示ノ要否(刑訴法一九八頁)

- 二 從犯行爲ノ場所ノ判示(刑訴法一八七頁)
- 三 從犯ノ成立ト其ノ場所(續刑法一九八頁)

◎相被告ノ豫審調書ノ援用ト判示方

一〔大審院〕(舊)被告甲ニ對スル強姦事件ト相被告乙
ニ對スル傷害事件トハ豫審ニ於テ併合審理ヲ爲シタル
ニ供スルトキハ右乙ノ豫審調書ヲ以テ甲ノ斷罪ノ資料
モノナル場合ニ於テモ特ニ乙ノ傷害事件ニ關スル豫審
調書ナル旨ヲ明記スルノ要シ。(大審院大正六年(れ)
第二〇二六號同年十月五日第一刑事部判決棄却大審院
判決錄二十三輯二十二卷刑事一〇九頁)

◎無罪ノ判決ト證據理由ノ要否(第三六二條)

◎證據ノ明示ヲ缺クヤ否ノ事例

一〔大審院〕(舊)判決ニ鑑定書ヲ引用スルニ當リ記錄
丁數ヲ明示シ且其ノ内容ヲ摘示シ以テ其ノ書類ノ如何
ナルモノナルカハ記錄ニ就キ容易ニ之ヲ知ルヲ得ヘキ
トキハ其ノ鑑定書ノ作成者ノ氏名ヲ舉示セザルノ故ヲ
以テ證據ノ明示ヲ欠クモノト謂フヲ得サルモノトス。
(大審院大正十一年(れ)第一〇九二號同年九月十二

日第一刑事部判決棄却、大審院判例集一卷七號刑事四
三八頁)

◎併合罪ノ一部無罪ト判示方

一〔大審院〕(舊)豫審終結決定ニ數箇ノ行爲ヲ列記シ
其數箇ノ行爲ハ併合罪ノ關係ニ在ルモノナリトシテ事
件ヲ公判ニ付シタル場合ニ於テハ公判裁判所ハ其數箇
ノ行爲ヲ併合罪トシテ審理ノ上ニ對シ相當ノ裁判ヲ
爲スノ職責アルモノニシテ其數箇ノ行爲ノ間ニ連續若
クハ牽連犯タルヘキ事實關係又ハ其他之ヲ包括シ一罪
トシテ處罰スヘキ特殊ノ關係等アルコトヲ認メタル場
合ヲ除キ其他ノ場合ニ於テハ併合罪ノ例ニ從ヒ有罪ノ
言渡ヲ爲スカ又ハ一部ヲ有罪トシ他ノ一部ヲ無罪トス
ルトキハ其一部ニ對シ有罪ノ言渡ヲ爲シ他ノ一部ニ對
シ無罪ノ言渡ヲ爲ササルヘカラサルモノトス。(大審

◎證據ノ明示ヲ缺クヤ否ノ事例

一〔大審院〕(舊)判決ニ鑑定書ヲ引用スルニ當リ記錄
丁數ヲ明示シ且其ノ内容ヲ摘示シ以テ其ノ書類ノ如何
ナルモノナルカハ記錄ニ就キ容易ニ之ヲ知ルヲ得ヘキ
トキハ其ノ鑑定書ノ作成者ノ氏名ヲ舉示セザルノ故ヲ
以テ證據ノ明示ヲ欠クモノト謂フヲ得サルモノトス。
(大審院大正十一年(れ)第一〇九二號同年九月十二

院大正八年(れ)第一四五一號同年七月二十八日第二
刑事部判決破毀移送、大審院判決錄二十五輯十八卷刑
事八九四頁)

二 連續犯ノ一部無罪ト審判ノ範圍(第二八八條)

◎(舊)併合罪ノ裁判ト牽聯犯ノ消滅(刑訴法一六二
頁)

◎連續犯ノ判示方

- 一 (大審院) (舊)連續一罪ヲ構成スヘキ數個ノ行為中
數個ノ同一罪名ニ觸ルル行為ニ包含スル場合ニ於テハ
先ツ該行為ニ付キ刑法第五四條第一項前段第一〇條ニ
依リ孰レノ罪名ヲ以テ重シト爲スヘキヤヲ定メ而シテ
後同法第五五條ヲ適用シ他ノ行為ト共ニ連續犯ヲ構成
スル旨ヲ判定スヘキモノトス。(大審院大正八年(れ)
第二〇八號同年六月七日第三刑事部判決一部破毀、法
律評論八卷刑訴六九頁、法律新聞一五八二號二〇頁)
- 二 (舊)連續犯ト事實ノ判示方(續刑法一六六頁)
- 三 連續犯ノ公訴ト審判ノ範圍(續刑法一六四頁)
- 四 連續犯ノ認定ト理由ト説示(第三六〇條)
- 五 (舊)連續犯ニ對スル新法ノ適用ト證據説明(刑訴法
二〇〇頁)

- 六 連續犯ノ各個行為ニ對スル所罰法條ノ判示(刑訴法
一九九頁)
- 七 連續行為ノ個數ヲ明示セサル判決ノ效力(刑訴法一
九九頁)

◎相被告ノ供述ト被告不知ノ證據

一 (大審院) 同一公廷ニ於ケル共同被告人ノ事實上ノ供
述ヲ斷罪ノ資料ニ供スルニ方リ刑事訴訟法第九十八
條規定ノ手續ヲ爲サザリシトテ之ヲ證據調手續ニ違背
シタルモノト云フヲ得サルコトハ當院判例ノ認ムル所
ナリ蓋シ共同被告人カ相互ニ其面前ニ於テ爲シタル供
述ニ付テハ常ニ意見辯解ヲ陳フルノ機會ヲ有スルヲ以
テ特ニ其ノ供述ニ付如上ノ手續ヲ盡スノ要ナケレハナ
リ然ルニ本件記錄ヲ查スルニ原審第一回公判開廷ノ初
ニハ被告重雄ノ共同被告タル渡邊源次郎ノミ出廷シ同
人ニ對スル訊問ノ終ル頃ニ被告重雄ハ入廷シ引續キ取
調ヲ受ケタルモノニシテ同人不在ノ間ニ於ケル右源次
郎ノ供述ヲ被告重雄ニ知ラシムル何等ノ手續ヲ執リタ
ル事蹟ナキコト洵ニ所論ノ如クナレハ被告重雄ハ右源
次郎ノ供述ノ内容ヲ知リ之ニ對スル意見辯解ヲ提出ス
ルニ由ナキニ而モ原告訴訟判決ニ於テ該供述ノ部分ヲ援

用シタルハ即チ被告不知ノ證據ヲ罪證ニ供シタル不法
アルモノトス。(大審院大正十一年(れ)第一三七九
號同年十一月十五日第三刑事部判決破毀移送、法律新
聞二〇六七號二一頁)

二 第三三九條「公判廷ニ於ケル退庭處分ノ諸問」ノ七

◎上海總領事館令ノ適用ト理由不備

一 (大審院) (舊)被告ノ行為ニ付上海總領事館令第一
號第二條第一條ノ規定ヲ適用スルニハ該行為カモルヒ
ネノ所持賣却及其幫助ヲ禁止スル支那ノ規則ニシテ在
支那帝國公使ノ承認ヲ經タルモノニ違反シタル事實ヲ
確定シ其證據説示ヲ爲スコトヲ要スルモノニシテ原判
決カ事茲ニ出テサリシハ理由不備ノ違法アルモノトス
・(大審院大正九年(れ)第一〇〇三號同年六月九日
第三刑事部判決破毀移送、法律新聞一七二四號二二
頁)

◎理由不備ノ違法アル判決(第四一〇條)

◎未決勾留ノ算入ト適用法條ノ明示

一 (大審院) 未決勾留日數ノ本刑算入ハ刑ノ言渡ソノモ

ノニアラサルヲ以テ必スシモ法律ノ正條ヲ明示スルノ
必要ナシ。(關東廳高等法院大正九年(控)第四二號同
年十二月二十二日判決、法律新聞一八〇四號一三頁)

◎適用法條明示ノ要否(第三六〇條)

◎刑變更後ノ刑法第二五三條ノ適用方

一 (大審院) (舊)刑法第二五三條ハ大正十年法律第七
七號ニ依リ刑ヲ變更シタルモノニシテ其ノ以後ニ在リ
テハ此ノ變更ニ係ル新規定カ刑法第二五三條トシテ在
在スルモノナルヲ以テ其ノ後ニ終了シタル行為ニ付同
條ノ規定ヲ適用スルニハ上叙第七七號法律ヲ明示スル
モ或ハ否ラサルモ其ノ趣旨ニ於テ異ル所ナキモノトス
・(大審院大正十一年(れ)第二〇六三號同十二年二
月七日第三刑事部判決棄却、大審院判例集二卷一號刑
事四五頁)

第三百六十四條(公訴棄却ノ判決)

◎公訴棄却ノ申立ト其ノ裁判

一〔大審院〕刑事訴訟法ニハ公訴棄却ノ申立ニ關シ舊刑事訴訟法第八十六條ノ如キ規定ナキヲ以テ裁判所ハ公訴ノ不適法ヲ理由トスル公訴棄却ノ申立カ其ノ理由ナキ場合ニハ特ニ判決ヲ以テ其ノ申立ヲ棄却スル言渡ヲ爲スノ要ナキモノトス本件ニ於テ原審ハ辯護人ノ爲シタル公訴棄却ノ申立ハ理由ナキモノト判斷シ本案ニ付審理判決ヲ爲シタルモノナルヲ以テ其ノ公判手續ニハ何等ノ違法ナキモノトス。(大審院大正十四年(れ)第一七四九號同十五年一月二十日第四刑事部判決棄却、大審院判例集五卷一號刑事一頁)

第三百七十一條〔判決ノ言渡ト勾留トノ關係〕

◎控訴及上告ノ併起ト勾留更新廳

一〔刑事局長〕共犯人中(又ハ併合審理ノ被告人中)或ル

者ハ控訴シ他ノ者ハ上告シタルニ因リ一件記錄ヲ控訴審ニ送致シタル場合ニ於テ上告申立ノ被告人ニ對スル勾留ノ更新等ハ何レノ裁判所ニ於テ爲スヘキヤ〔答〕大審院ニ於テ控訴審ヨリ記錄ヲ取寄セタル上決定ス。(刑事局長大正十二年刑事一〇三四一號通牒、法曹會雜誌二卷二號一〇二頁)

第三百七十二條〔判決ノ言渡ト押收トノ關係〕

◎押收物件ノ意義

一(舊)押收物件ノ意義(刑訴法一七九頁)
二(舊)差押物ノ意義(刑訴法一七九頁)

◎押收物ノ沒收ニ關スル諸問

一(舊)沒收ニ關スル理由ノ説示(刑訴法一八〇頁)
二(舊)偽造文書ノ沒收ト理由ノ説示(刑訴法一八〇頁)
三 沒收ト理由ノ説示(續刑法四六頁)

◎從物ニ對スル沒收處分

一 從物ニ對スル沒收處分(續刑法六七七頁)
二 主物ノ沒收ニ伴フ附屬物ノ沒收(第三七二條)

◎押收物ノ還付ニ關スル諸問

一(舊)留置權者ニ還付スヘキ供用物件(刑訴法一八一頁)
二(舊)手形ノ分割還付(刑訴法一八一頁)
三(舊)告發狀ノ還付(刑訴法一八一頁)
四(舊)恐喝ニ因リ得タル證書ノ還付(刑訴法一八一頁)
五(舊)取寄書類還付ノ言渡(刑訴法一八一頁)
六(舊)押收物件處分ノ言渡ト其ノ時期(刑訴法一八二頁)
七(舊)保存シ難キ領置物件ノ公賣(刑訴法一八二頁)

八(舊)差押物件ノ返還請求ト私法關係(刑訴法一八二頁)

九(舊)差押物還付ノ理由(刑訴法一八一頁)

一〇〔大審院〕(舊)差押物還付ノ言渡ヲ爲スニ付テハ其物件カ沒收ニ係ラサルコトヲ説示スルヲ以テ足ルモノトス左レハ原判決ニ於テ所論電球ヲ以テ大高水力電氣株式會社ノ所有ニ歸シタルモノト認メ同會社ニ還付スル言渡ヲ爲シタルコト判文上明白ナル以上更ニ右電球カ會社所有ニ歸シタル事由ヲ説示スルヲ要スルモノニ非ス又還付スヘキ物件ノ歸屬如何ハ罪ト爲ルヘキ事實ニアラサレハ之ニ對スル證據ヲ舉示スルヲ要スルモノニアラス。(大審院大正七年(れ)第二七六二號同年十一月二日第三刑事部判決棄却、法律新聞一四八五號二五頁)

第三百七十三條〔判決ノ言渡ト押收物件トノ關係〕

◎贓物ノ還付ニ關スル諸問

- 一 (舊) 贓物還付ノ判示方 (刑訴法一八二頁)
- 二 贓物ノ還付ト理由ノ説示 (諸法令上卷 (刑法施行法) 三四一頁)
- 三 (舊) 贓物ノ還給ト法律關係ノ説示 (刑訴法三一頁)
- 四 盜贓タル通貨ノ兩換ト還付處分 (續刑法六六五頁)
- 五 押收物ノ還付ニ關スル諸問 (補遺第三七二條)
- 六 所有者不明ナル贓物ノ處分 (諸法令上卷 (刑法施行法) 三四一頁)

○贓物犯人ノ手ニ在ルトキノ意義 (諸法令上卷 (刑法施行法) 三四〇頁)

第四百三條 (控訴審ト重刑言渡ノ制限)

○檢事ト被告人利益ノ控訴

- 一 (大審院) 刑事訴訟法第四百三條ニ所謂被告人ノ爲ニ控訴ヲ爲シタル事件トハ被告人及ヒ檢事ニ非スシテ被告人ノ利益ノ爲ニ控訴ヲ爲シタル事件ヲ指稱スルモノニシテ檢事控訴ノ趣旨カ偶被告人ノ利益ニ歸スル事件ヲ

包含スルモノニ非スト解スルチ相當トス蓋シ舊刑事訴訟法ハ同法第二百四十二條第二項ニ檢事ハ被告人ノ爲ニモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得同法第二百六十五條第一項ニ被告人辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ利益ト爲スコトヲ許サス同條第二項ニ被告人ノ利益ノ爲檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シト規定シ檢事カ被告人ノ利益ノ爲ニ控訴ヲ爲シタル場合ニ付原判決ヲ變更シテ被告人ノ利益ト爲スコトヲ許ササルノ趣旨ヲ明規シタルニ拘ラス現行刑事訴訟法ニ於テハ之ト異ナリ檢事カ被告人ノ利益ノ爲ニ控訴ヲ爲シタル場合ニ付何等明規スル所ナキノミナラス刑事訴訟法第四百三條ニ所謂被告人ノ爲ニ控訴ヲ爲シタル事件ニ付テハ原判決ヨリ重刑刑言渡スコトヲ得スト規定セル所以ハ法カ被告人及ヒ檢事ニ非スシテ被告人ノ爲ニ上訴權ヲ有スル者ノ控訴ヲ爲シタル事件ニ付テハ被告人ノ控訴ヲ爲シタル事件ニ同シク控訴裁判所ノ職權ヲ制限スルチ相當トシ檢事ノ第一審判決ヲ被告人ノ利益ニ變更セントスル控訴趣旨ノ如キハ控訴裁判所ヲ羈束スルモノニ非スト認メタルニ在リト謂ハサルヘカラサレハナリ

二 (同上) 去レハ被告人ト共ニ第一審檢事モ亦控訴ヲ爲シタル事件ニ於テハ縱令檢事控訴ノ趣旨カ被告人ノ

判決棄却、判例彙報四十一卷十一號刑事二九二頁)

第四百五條 (第一審ニ於ケル判決書ノ引用)

○形式上違法ナル一審判決ノ引用

一 (大審院) 第一審判決書ヲ查スルニ其ノ八葉ト九葉トノ間ニ判事ノ契印ヲ缺如シ延テ該判決ノ違法ナルコト所論ノ如シ然レトモ刑事訴訟法第四百五條ニハ控訴裁判所ノ判決ニハ第一審ノ判決ニ示シタル事實及證據ヲ引用スルコトヲ得ト規定シテ該規定ハ控訴裁判所ハ其ノ判決ニ於テ第一審判決書ニ存在スル事實及證據ノ記載ハ之ヲ引用シ得ヘキ趣旨ニ外ナラサルヲ以テ縱令形式上違法ナル第一審判決ナリト雖現ニ事實上之ニ事實及證據ノ記載カ存在スル以上ハ控訴裁判所ハ其ノ判決ニ之ヲ引用スルニ毫モ妨ケルトコロナシ。(大審院昭和五年 (れ) 第四〇六號同年五月九日第一刑事部判決棄却、大審院判例集九卷四號刑事二七一頁)

○罰金ト執行猶豫ノ懲役刑トノ輕重

一 (大審院) 罰金刑ニ處セラレタル者カ罰金刑ニ執行猶豫ノ恩典ナキ所ヨリ寧ロ懲役刑ニ處シ犯情ニ同情シテ刑ノ執行猶豫ヲ與フヘキモノナリトノコトヲ以テ上告ノ趣旨トナスハ則チ自己ノ刑ヲ重ク處罰セラレントト主張スルモノニ該當シ被告ノ上告トシテハ適法ナラス。(大審院昭和四年 (れ) 第七二七號同年九月五日

利益ニ原判決ヲ變更セントスルニ在リトスルモ控訴裁判所ハ之ニ拘束セラレルコトナク原判決ヨリモ重刑刑ノ言渡ヲ爲スチ妨ケサルノミナラス原判決ハ公訴事實ノ範圍内ニ於テ事實ヲ認定シ第一審判決ヨリ輕キ罰金刑ヲ言渡シ第一審判決ニ反シ町村制第三十七條衆議院議員選舉法第三十七條第一項ヲ適用セサル旨宣言セサルニ過キサルヲ以テ第一審判決ヲ被告人ノ利益ニ變更シタリト云フヘカラス。(大審院昭和五年 (れ) 第六八號同年四月九日第三刑事部判決棄却、大審院判例集九卷四號刑事二四五頁)

○被告人ノ爲ニスル控訴ノ意義 (第四〇三條)

○檢事控訴ノ性質 (第四〇三條)

○被告人利益ノ爲ニ檢事控訴 (第四〇三條)

第四百十六條 (一審判決ニ對スル上告)

◎控訴上告ノ併起ト勾留更新廳(補遺第三七一條)

第四百二十三條 (上告趣意書ノ差出)

◎上告趣意書ニ關スル諸問

- 一 (舊) 趣意書ノ差出ト最終日ノ休暇(刑訴法三一七頁)
- 二 (舊) 理由ヲ具セサル趣意書ノ效力(刑訴法三一八頁)
- 三 違法點不明示ノ上告趣意書ノ效力(第四二五條)
- 四 (舊) 相被告上告ノ取下ト其ノ理由援用ノ效力(刑訴法三一九頁)
- 五 上告趣意書ト援用ノ能否(第四二五條)

六 (舊) 辯護屬提出前ノ上告趣意書(刑訴法三四四頁)

◎電報ニ依ル上告趣意書

- 一 (大審院) 被告人ハ上告趣意ヲ記載シタル電報ヲ本院ニ發送シタルモ上告趣意書ハ上告申立書及上告取下ノ書面ト同シク上告裁判所力據テ以テ其ノ真正ニ上告本人ノ意思ニ出テタルモノナルヤ否ヲ審究シ之ニ對スル相當ノ手續ヲ爲スコキモノナレハ其書面ハ本人ノ作成シタルモノナルヲ要ス從テ電報ニ依ル上告趣意書ハ電報用紙ノ記載ニ依リ普通ノ場合ニ於テ真正ニ發信人本人ノ意思ニ出テタルコトヲ認ムルヲ得ヘシトスルモ之ヲ以テ上告本人ノ作成シタル書面ト同一ニ看做スコトヲ得サルノミナラス上告本人ノ署名捺印ヲ缺如シ刑事訴訟法第二十條第二項ノ規定ニ適合セサル力故ニ上告趣意書トシテハ不適法ト謂ハサルヘカラス。(大審院大正六年(れ)第一一八六號同年六月十九日第一刑事部判決棄却、大審院判決錄二十三輯十三卷刑事六九七頁)
- ◎電報ニ依ル上訴申立ノ適否(第三九六條)

◎上告趣意書ノ郵送ト不可抗力

- 一 (大審院) 上告趣意書ハ上訴申立書ト異リ刑事訴訟法第四百二十三條所定ノ期間内ニ上告裁判所ニ到達スルコトヲ要シ被告人カ上告趣意書ヲ右期間内ニ上告裁判所ニ到達スヘキ時日ヲ存シテ郵送シタルモ不可抗力其ノ他被告人又ハ代人ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニ因リ右期間内ニ上告裁判所ニ到達セザリシトキト雖前記期間内ニ上告趣意書ヲ差出シタルモノト解スルヲ得サルモノトス。(大審院昭和三年(つ)第二一號同年十月六日第三刑事部決定棄却、法律新聞二九四九號一三頁)

第四百二十五條 (上告趣意書ノ記載事項)

◎(舊) 相被告ノ上告取下ト其ノ理由援用ノ消滅 (刑訴法二六七頁)

第四百四十四條 (事實審理ト取調手續)

◎事實審理ノ場合ト附帶上告

- 一 (平井氏) 上告審ニ於テ事實審理ヲ開始シタル場合ニ於テ上告審ノ檢事ハ附帶上告ヲ爲シ得ルヤ即上告審ニ於テ最初ニ定メタル公判期日ノ十五日前迄附帶上告ヲ爲シ得ヘキコトハ第四百二十四條ノ規定スル所ナルモ本問ハ此期間經過後事實審理ノ開始中ニ於テ第四百五十五條後段ニ依リ第三百九十九條ノ控訴ノ附帶控訴ノ規定ヲ準用シ附帶控訴ト同様ノ實質ヲ有スル附帶上告ヲ爲シ得ルト云フニアリ本法ハ上告審ニ法律審ノ外事實審ヲ制定ス法律審ト事實審トハ全ク性質ヲ異ニスル別審ナリ之ヲ以テ上告審ニ關スル規定ハ之ヲ法律審ニ特有ナル規定及兩者ニ共通ナル規定ノ三者ニ分類スルコトヲ得第四百二十四條ノ附帶上告ノ規定ハ法律審特有ノ規定ニシテ事實審ニ共通スルモノニアラス事實審ニ於テ附帶上告ヲ爲シ得ルヤ否ハ特別ニ之ヲ明示シタ

ル規定又ハ控訴ノ規定ノ準用ニ俟タサル可ラス蓋シ右法律審ノ附帶上告ハ他ノ一般上告ト同シク法律違反ノ理由ト爲スカ又ハ特定メタル覆審事由ヲ理由トスル場合ニ限ラレルモ事實審ノ附帶上告ハ事實ノ覆審ナルヲ以テ控訴審ト同シク理論上斯ル制限ヲ必要トセザレハナリ上告審ニ於ケル事實審理ノ開始ハ法律違反ノ理由ニ基ク場合ト覆審事由ノ理由ニ基ク場合トノ二アルモ何レノ場合ニ於テモ事實審ノ第三審ナリト云フヲ妨ケス如斯上告審ノ事實審ハ控訴審ノ覆審ト其性質ニ於テ異ナル處ナキ以上法律審ニ於ケル附帶上告ハ一般上告ノ理由ニ依ルヘキモ事實審ニ於ケル附帶上告ハ一般控訴ノ場合ニ準スヘキ理由アリ即チ量刑ノ不當ノ場合ニ於テモ法律審ニ於テハ其甚シキ不當ナリト思料スヘキ顯著ナル事由アルトキニ止ムヘキモ事實審ニ於テハ苟モ量刑ニ不當アル以上其程度ノ如何ニ拘ラス悉ク之カ更正ヲ求メシムルノ必要アルカ如シ上告審ノ事實審判ハ控訴審ノ事實審理ト同シク何等制限ノ認ムヘキモノナシ量刑甚シキ不當ナル理由ニ基ク場合ト重大ナル事實ノ誤認アル理由ニ基ク場合ト將タ法律違反ノ理由ニ基ク場合トナリト間ハス苟モ事實審理ヲ開始シタル以上其審判手續ハ控訴審ノ場合ト全ク同一ナリ即チ量刑甚シキ不當ノ理由ニ基ク場合ニ於テモ其量刑甚

シキ不當ノ事實存セス單ニ輕微ナル不當ノ認メ得ラレル場合ニ於テモ其認メタル處ニ從ヒ適當ノ量刑ニ更正シ得ルカ如シ如斯裁判所ニ於テ其審判ニ何等ノ制限ナキ以上檢事ノ求刑ニ付テモ亦自由ノ範圍ヲ與ヘサル可ラス而シテ檢事カ上告ヲ爲シ又ハ第四百二十四條ノ附帶上告ヲ爲シタル場合ニ於テハ其求刑ニ於テ何等ノ制限ナキコト勿論ナルモ本問ノ場合ノ如ク檢事ノ此上告及附帶上告ナキ場合ニ於テ若シ事實審ニ於ケル本問附帶上告ヲ許ササルニ於テハ檢事ハ量刑ノ不當ニ輕キ場合ニ適當ノ求刑ヲ爲シ得サルニ至ルヘシ第四四五條ニ曰ク「第二編中公判ニ關スル規定ハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外上告ノ審判ニ付之ヲ準用シ第四四四條ノ規定ニ依リ被告事件ニ付更ニ審理ヲ爲ス場合ニ於テハ尙本編第二章ノ規定ヲ準用ス」ト此本編第二章控訴ノ規定トハ第二章控訴ノ規定ニシテ附帶控訴ノ規定タル第三百九十九條ノ規定モ亦此中ニ包含ス是即チ本法カ上告ノ事實審ニ於ケル附帶上告ノ必要ヲ認メ之ヲ規定シタルモノトス。(檢事平井彦三郎氏、法曹會雜誌四卷八號一七頁)

第四百五十五條 (上告審判及事實審理ノ準則)

◎事實審理ノ場合ト附帶上告 (補遺第四四四條)

第四百七十三條 (第四七〇條第四七一條ノ請求ト裁判手續)

◎(舊) 抗告裁判ト不利益變更ノ制限 (刑訴法三二四頁)

第五百六十七條 (私訴ノ提起)

◎私訴ヲ提起シ得ヘキ被害者

一 (大審院) (舊) 私訴ヲ提起シ得ヘキ所謂被害者トハ必シスモ犯罪自體ニ因リ害ヲ被リタル者ナルコトヲ要セス汎ク犯罪ニ因リ權利ヲ侵害セラレタル者ヲ指稱スルモノトス原判決ヲ査閱スルニ原審ニ於テハ第一點ノ

論旨ニ對シ説明シタル如ク各被告人ハ室田米治ノ上告人ニ對スル詐欺罪ニ因リ其電話加入名義ヲ各違法ニ上告人名義ニ變更セラレタリト判示シタル趣意アルコト明白ニシテ室田米治ノ欺罔騙取行為即チ犯罪自體ノ被害者ハ上告人ナルコト洵ニ所論ノ如シト雖モ室田米治カ前叙犯罪ニ因リ各被上告人ノ電話加入名義ヲ變更セシメタル行為ノ被害者ハ各被上告人ニ外ナラサルヲ以テ論旨ハ理由ナキモノトス。(大審院大正六年(れ)第四〇號同年三月三十日第一刑事部判決棄却、大審院判決錄二十三輯五卷刑事二五二頁)

二 (小野氏) 私ハ特ニ反對ノ理由ナキ限リ犯罪ニ因ル損害ヲ原因トシテ民法上行使シ得ヘキ請求ニツイテハ一般的ニ附帶私訴トシテ之ヲ許スコトカ正義ニ適スル所以テアツテ特ニ損害ヲ受ケタル法益ヲ第五六七條ノ列擧ニ制限スルカ如キハ何等ノ理由モナイモノト信スルノテアル……私訴原告ヲ犯罪ノ直接ノ被害者ニ限ルヘキカ間接ノ被害者タルヲ妨ケサルカニツイテハ間接ノ被害者モ亦私訴原告タルヲ得ルコト全ク争カナイノテアル唯其ノ所謂直接ノ被害者間接ノ被害者トハ何チイフカ……私見ニヨレハ犯罪ノ直接ノ被害者トハ公訴ノ客體タル犯罪ノ刑法上ノ構成要件ニ現ハレタ法益ノ主體テアルシ間接ノ被害者トハ其ノ構成要件ノ外ニ在

ル被害法益ノ主體テアル後者ト雖モ其ノ犯罪ニ因ル損害テアル以上犯罪ヲ構成スル事實トノ間ニ因果關係ノ存在ヲ前提トスルコトハ云フマテモナイコトテアル殺人被害事件ニ於テ直接ノ被害者ハ其ノ殺サレタ者テアルカ間接ノ被害者ハ直接被害者ノ死亡ニ因テ財産上又ハ精神上ニ損害ヲ受ケタ遺族テアル……遺族ハ死者ノ生命ニ對スル損害賠償請求權ヲ相續スルモノテハナイ遺族カ個人的ニ蒙ツタ財産上又ハ精神上ノ損害ヲ原因トシテ其ノ賠償ヲ請求スルモノナラザル。(法學士小野清一郎氏、法學協會雜誌四五卷三號一一八頁)

三 生命ノ侵害ト附帶私訴ノ許否(第五六七條)
 四 (舊) 此等ノ者ハ被害者ナルカ(刑訴法二頁)
 五 第五六七條「本條ニ關スル諸問」ノ三及四
 六 (舊) 私訴ヲ提起シ得ヘキ者(刑訴法二二七頁)
 七 (舊) 身元保證人ノ賠償請求權(刑訴法八頁)
 八 私訴ト直接又ハ間接ノ損害(第五六七頁)

◎犯罪以外ノ原因ヲ附加スル私訴

一 (朝鮮高) (舊) 私訴ハ犯罪ニ依リテ生シタル損害ノ賠償又ハ贓物ノ返還ヲ目的トスル場合ニ限りテ提起シ得ルモノナルコトハ刑事訴訟法第二條ノ規定スル所

ナルヲ以テ公訴ニ係ル事實關係ニ基カサル損害ノ賠償又ハ贓物ノ返還ハ私訴ニ於テ請求シ得ヘカラサルコト勿論ナルモ其請求セムトスル損害ノ賠償又ハ贓物ノ返還カ公訴ニ係ル事實關係ニ基因スルモノナル以上ハ私訴トシテ之ヲ提起シ得ルコト勿論ナルノミナラス其請求原因トスル事實主張ハ必スシモ常ニ公訴事實ト同一ナル事實主張ニ局限セラレルモノニアラスシテ他ノ原因事實ヲ附加シテ主張スルコトヲ妨ケサルモノトス。(朝鮮高等法院大正十一年第一四號同年三月六日、法律評論十一卷刑訴四三頁)

二 (大審院) (舊) 公訴事實ニ因リ又ハ公訴事實ト他ノ事由ト相映テ損害ヲ生セシメタリトスルトキハ被害者ハ公訴ニ附帶シテ賠償請求ノ私訴ヲ提起スルヲ得ルモノナルコト言テ然ラス然レハ原審カ私訴上告人ノ請求原因タル事實ヲ公訴ノ事實ト全ク別個ノ事實關係ナリトシ公訴附帶ノ私訴トシテハ不合法ナリトノ故ヲ以テ私訴上告人敗訴ノ判決ヲ爲シタルハ違法ニシテ破毀ヲ免レス。(大審院大正十二年(れ)第一〇七七號同年十月九日第一刑事部判決公訴棄却私訴破毀移送、大審院判例集二卷十號刑事七二七頁)

三 (舊) 犯罪以外ノ原因ヲ附加スル私訴(刑訴法二頁)
 四 (舊) 公訴事實ノ範圍外ナル私訴ノ原因(刑訴法二四

三頁)

◎私訴ニ因ル電話加入權ノ回復

- 一 (舊) 贓物ノ返還ト電話加入權ノ回復(刑訴法二四三頁)
- 二 (舊) 私訴ト電話加入權ノ回復(刑訴法二四三頁)
- 三 (舊) 電話加入權ノ侵害ト其ノ回復權(刑訴法六頁)

◎私訴ニ依ル登記抹消ノ請求

一 (大審院) 荷モ犯罪ニ基因シテ生シタル損害ニ付被害者カ右犯行ニ關スル公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲シ其ノ損害ノ回復ヲ請求スルコトヲ得ルハ刑事訴訟法第二條ニ徴シ明白ナリ而シテ原私訴判決ニ依レハ本件土地ノ賣買ハ右土地ノ所有者タル被上告人ニ於テ更ニ關知スル所ナク正一カ擅ニ被上告人名義ノ文書ヲ偽造シテ之カ賣買登記ヲ爲スニ至リタルモノニシテ本件登記ハ無因ノモノタルコト論テ峽タサル所ナレハ該登記ニ因リ示不動産所有權ノ移轉ヲ生スヘキモノニ非ス又判示ノ如ク被上告人カ詐欺ニ關係ナキ場合ニ於テハ詐欺ニ因ル意思表示ニ關スル規定ヲ適用スヘカラサルコト勿論

◎私訴ニ依ル身分關係ノ確定

一 (朝鮮高) (舊) 私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償又ハ贓物ノ返還ヲ以テ其目的ト爲スモノニシテ人ノ身分關係ノ確定ヲ求ムルカ如キハ其何レニモ該當セサルニ依リテ之目的トスル請求ハ私訴トシテ許容スヘキモノニ非ス。(朝鮮高等法院大正十一年刑上第八三號同年六月十八日、法律評論十二卷刑訴一〇八頁)

◎私訴ニ依ル慰藉料ノ請求

- 一 (舊) 慰藉料請求ノ私訴 (刑訴法六頁)
- 二 (舊) 毆打創傷ニ對スル慰安料ノ私訴 (刑訴法六頁)
- 三 生命ノ侵害ト附帶私訴ノ許否 (第五六七條)

◎殺害ニ基ク葬式費用ノ賠償

一 (大審院) (舊) 私訴上告趣意書第一點凡ソ人トシテ一生一度ハ必ス死ニ逢遇スルモノナルカ故ニ葬儀ノ費用ハ早晚何人ニモ免レ得サル費用ナリトス其天壽ヲ終ヘテ死スルト殺害ニ依テ死スルトニヨリ葬儀費用ニ有無ノ關係ヲ生スヘキモノニアラス原審ニ於テハ被告人カ民事原告人ノ父母兄妹ヲ殺害セシテ理由トシ其葬儀費用ノ損害賠償ヲ被告人ノ責ニ歸セシメタリ然レトモ此葬儀費用ハ前述ノ次第ノ如ク被告人カ犯罪ヲ爲ササルモ必ス生スヘキ費用ナルヲ以テ被告人カ賠償スヘキ筋合ナシ依テ原判決ハ不法ナリト云フニ在リ、按スル所論ノ如ク人トシテ生存スルモノ一回ハ必ス死ト遭遇スルト同シク葬儀ニ關スル費用ハ早晚何人ニモ免カレ

◎殺害ニ基ク賠償額ノ判示

得サル費用タルコトハ疑ヲ容レズト雖モ然レトモ人ヲ殺害シタル者ハ其殺害ニ因リ生シタル損害ヲ賠償スル責任アリ死カ人ノ早晚免カレ得サル運命ナルコトヲ理由トシテ其殺害ニ因ル損害ノ賠償ヲ辭スルヲ得ス人ノ殺害ニ因リ起リタル葬式費用ノ如キハ殺人行爲ニ因リ生シタル損害ニ外ナラサルヲ以テ故ニ又其費用カ早晚何人ニモ免カレ得サルモノナルコトヲ理由トシテ之カ賠償ヲ辭スルヲ容ルサス原判決ノ認ムル事實ニ依ルニ本件葬式費用ハ私訴上告人カ殺人ノ行爲ヲ爲スニアラサレハ生セザリシ私訴被上告人 (民事原告人) ノ損害ナルヲ以テ其損害ト私訴上告人ノ殺人行爲トノ間ニ因果關係アリ原審ニ於テ私訴上告人ニ其賠償ヲ命シタルハ正當ナリ論旨ハ理由ナシ。(大審院明治四十四年(レ)第四六五號同年四月十三日第二刑事部判決棄却、大審院判決第十七輯八卷刑事事五六九頁)

一 (大審院) (舊) 私訴上告趣意書第二點慰藉料ナルモノハ父母ヲ失フト兄弟ヲ失フト其間自ラ輕重ノ別アリ然ルニ原審ニ於テハ何人ヲ失ヒシ慰藉料ヲ幾干トスル旨ノ區別ヲ爲サス漫然包括的ニ金五千圓ヲ支拂フヘキ

旨ヲ判定シタルハ理由不備ノ裁判ナリトスト云フニ在レトモ、原判決ハ私訴上告人カ私訴被上告人ノ實父母弟妹合計五名ヲ殺害シタル損害賠償額ニ付テハ被害者ノ員數身分年齡私訴被上告人ノ身分及私訴上告人カ斯ル不法行爲ヲ爲スニ至リタル動機及ヒ其行爲ノ狀態等諸般ノ事情ヲ參酌シテ慰藉料ハ被控訴人ノ請求スル金五千圓ヲ相當ト認メタルモノニシテ其五千圓ト認ムルニ至リタル理由ハ之ニ依リ自カラ明白ナレハ包括的ニ數額ヲ判示スルヲ妨ケス從テ原判決ニハ所論ノ如キ違法アルコトナク論旨ハ理由ナシ。(大審院明治四十四年(レ)第四六五號同年四月十三日第二刑事部判決棄却、大審院判決第十七輯八卷刑事事五六九頁)

◎私訴ニ關スル諸問 (一)

- 一 (舊) 刑事訴訟法ニ所謂損害賠償ノ範圍 (刑訴法一頁)
- 二 (舊) 私訴ニ於ケル損害賠償ノ意義 (刑訴法二四二頁)
- 三 (舊) 犯罪ニ因ル權利侵害ト救済方法 (刑訴法一〇頁)
- 四 (舊) 轉讓セル贓物ト犯人ニ對スル返還請求 (刑訴法四頁)
- 五 (舊) 實物返還若クハ金額賠償ノ請求 (刑訴法二四四頁)

◎私訴ニ關スル諸問 (二)

- 一 (舊) 犯罪ニヨル損害利息ノ發生時期 (刑訴法二〇九頁)
- 二 證券ノ橫領ト私訴金額ノ算定 (刑訴法三三八頁)
- 三 (舊) 告訴提起ニ必要ナル費用ト要償權 (刑訴法四頁)
- 四 (舊) 警察署及檢事局ヘ出頭シタル旅費日當ノ要償 (刑訴法五頁)
- 五 (舊) 辯護士ニ委嘱セシ告訴事件ノ費用ト私訴權 (刑訴法五頁)
- 六 (舊) 辯護料ト損害賠償 (刑訴法五頁)
- 七 名譽回復ト金額未定ノ新聞廣告料 (刑訴法二四五頁)
- 八 (舊) 名譽回復ニ關スル私訴 (刑訴法五頁)
- 九 附帶私訴ト假執行ノ宣言 (刑訴法二四六頁)

六 (舊) 加工贓物返還ノ請求ト其ノ當否 (刑訴法二四四頁)

七 (舊) 冒認家屋ノ移築ト取毀返還ノ私訴 (刑訴法九頁)

八 (舊) 不動産競賣申立ノ取下ヲ求ムル私訴 (刑訴法九頁)

九 (舊) 豫定賠償額ノ請求ト私訴ノ範圍 (刑訴法一頁)

第五百七十二條〔私訴ニ準用スヘキ民事訴訟ノ規定〕

◎〔舊〕民事訴訟人タル檢事ノ座席〔刑訴法二三七頁〕

◎本條ニ關スル諸問

- 一〔舊〕民事被告人ノ權利拘束ノ抗辯〔刑訴法一二頁〕
- 二〔舊〕民事繫屬事件ト調査ノ職權〔刑訴法二三九頁〕
- 三〔舊〕私訴ニ關スル訴訟行爲追認ノ效力〔刑訴法一三頁〕
- 四〔舊〕私訴ト取下ト特別委任〔刑訴法一三頁〕
- 五〔舊〕私訴ニ對スル反訴ノ許否〔刑訴法一二頁〕
- 六〔舊〕私訴ノ反訴トシテ主張シ得サル請求〔刑訴法二三八頁〕

第五百八十五條〔裁判所ノ訴訟指揮權〕

舊刑事訴訟法目次

第一編 總 則	一
第二編 裁判所	四
第一章 裁判所ノ管轄	四
第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避	六
第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審	七
第一章 捜 査	七
第一節 告訴及ヒ告發	七
第二節 現行犯罪	八
第二章 起 訴	九
第三章 豫 審	一〇

第一節 令 狀……………一〇

第二節 (削除)……………一二

第三節 證 據……………一二

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質……………一三

第五節 檢證、捜索及ヒ物件差押……………一四

第六節 證人訊問……………一五

第七節 鑑 定……………一八

第八節 現行犯ノ豫審……………一九

第九節 保 釋……………二〇

第十節 豫審終結……………二二

第四編 公 判……………二三

第一章 通 則……………二三

第二章 區裁判所公判……………二八

第三章 地方裁判所公判……………三一

第五編 上 訴……………三二

第一章 通 則……………三二

第二章 控 訴……………三三

第三章 上 告……………三四

第四章 抗 告……………三八

第六編 再 審……………三八

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續……………四〇

第八編 裁判執行……………四一

第一章 裁判執行……………四一

第二章 (削除)……………四二

第三章 (削除)……………四二

附 則……………四二

舊刑事訴訟法

明治二十三年十月七日法律第九十六號
沿革 明治三十二年法律第七十三號、
同四十一年三月法律第二十九號、同年
七月法律第六十一號、同四十五年四月
法律第十九號

第一編 總 則

第一條

公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモ
ノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條

私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償、贓物ノ返還ヲ
目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第三條

公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ルモノニ非ス又告訴、私
訴ノ拋棄ニ因テ消滅スルモノニ非ス但法律ニ於テ特ニ
定メタル場合ハ此限ニ在ラス

第四條

舊刑事訴訟法

私訴ハ其金額ノ多寡ニ拘ハラズ公訴ニ付キ第二審ノ判
決アルマテ何時ニテモ其公訴ニ附帶シテ之ヲ爲スコト
ヲ得

第三者ハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ公訴附帶ノ私訴ニ參
加スルコトヲ得

第五條

被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ民法ニ從
ヒ被害者ヨリ賠償、返還ヲ要ムル妨礙ト爲ルコトナカ
ル可シ

第六條

公訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 被告人ノ死去

第二 告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ニ付テハ告訴ノ拋
棄

第三 確定判決

第四 犯罪ノ後頒布シタル法律ニ因リ其刑ノ廢止

第五 大赦

第六 時效

第七條

私訴ヲ爲ス權ハ左ノ事項ニ因テ消滅ス

第一 拋棄又ハ和解

第二 確定判決

一條 七條

一

第三 時效

第八條

公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ完成ス

一 死刑ニ該ル罪ニ付テハ十五年

二 無期又ハ長期十年以上ノ懲役若クハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ十年

三 長期十年未滿ノ懲役又ハ禁錮ニ該ル罪ニ付テハ七年

四 長期五年未滿ノ懲役若クハ禁錮又ハ罰金ニ該ル罪ニ付テハ三年

五 刑法第八十五條ノ罪ニ付テハ一年

六 拘留又ハ科料ニ該ル罪ニ付テハ六月

第九條

私訴ノ時效ハ被害者無能力ナルトキ又ハ公訴ニ附帶セ

スシテ其訴ヲ爲シタルトキト雖モ公訴ノ時效ト其期間

ヲ同クス

公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリタルトキハ民法ニ定メタ

ル時効ノ例ニ從フ

第十條

公訴、私訴ノ時效ハ犯罪ノ日ヨリ其期間ヲ起算ス但繼

續犯罪ニ付テハ其最終ノ日ヨリ起算ス

第十一條

時效ハ起訴、豫審又ハ公判ノ手續アリタルニ因リ其期

間ノ經過ヲ中斷ス其未タ發覺セサル正犯、從犯及ヒ民

事擔當人ニ付テモ亦同シ

時效ノ經過ヲ中斷シタルトキハ起訴、豫審又ハ公判ノ

手續ヲ止メタル日ヨリ更ニ其期間ヲ起算ス

第十二條

起訴、豫審又ハ公判ノ手續其規定ニ背キタルニ因リ無

効ニ屬スルトキハ時效ノ經過ヲ中斷スル効ナカル可シ

但裁判所ノ管轄違ナルニ因リ其手續ノ無効ニ屬スルト

キハ此限ニ在ラス

第十三條

被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル場合ニ於テ其訴

訟ノ原由告訴人、告發人又ハ民事原告人ノ惡意若クハ

重過失ニ出テタルトキハ是等ノ者ニ對シ損害ノ償ヲ要

ムルコトヲ得

被告人刑ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ告發人、告發人又ハ

民事原告人ヨリ惡意若クハ重過失ニ因リ其犯罪ニ付キ

過實ノ申立ヲ爲シタルトキ亦同シ

民事原告人上訴ヲ爲シ敗訴シタルトキハ被告人其上訴

ニ因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得

要償ノ訴ハ本案ノ判決アルマテ何時ニテモ其裁判所ニ

之ヲ爲スコトヲ得

第十四條

被告人無罪ノ言渡ヲ受ケタリト雖モ刑事、檢事、裁判

所書記、執達吏、司法警察官又ハ巡查、憲兵卒ニ對シ

要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス但是等ノ官吏被告人ニ對シ

故意ヲ以テ損害ヲ加ヘ又ハ刑法ニ定メタル罪ヲ犯シタ

ル場合ハ此限ニ在ラス

第十五條

此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即

時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ

最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可カラズ但時

效ノ期間ハ此限ニ在ラス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十

日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第十六條

此法律ニ定メタル期間ニハ海陸路八里毎ニ一日ノ猶豫

ヲ加フ八里ニ滿サルモノト雖モ三里以上ナルトキ亦同

シ

島嶼又ハ外國ニ付テハ裁判所ニ於テ特ニ附加期間ヲ定

第十七條

此法律ニ於テ訴訟ヲ爲スニ付キ定メタル期間ヲ經過シ

タルトキハ特別ノ場合ヲ除ク外其訴訟ヲ爲ス權ヲ失フ

第十八條

訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ住セザルトキハ其地ニ

假住所ヲ定メ裁判所ニ届出ツ可シ否ラザルトキハ書類

ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルコトヲ得ス

第十九條

書類ノ送達ハ此法律ニ於テ別ニ規定アラザルトキハ民

事訴訟法ノ規定ヲ準用ス

第二十條

官吏、公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署、公署ノ印ヲ

用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印

ス可シ若シ官署、公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合

ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタルトキハ

其書類ノ効ナカル可シ

官吏、公吏ニ非サル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署

名捺印ス可シ

第二十一條

官吏、公吏訴訟ニ關スル書類ノ原本、正本又ハ謄本ヲ

作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入、削除及ヒ

欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル

トキハ之ヲ讀ミ得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可

シ此規定ニ背キタルトキハ其變更増減ノ効ナカル可シ

第二十一條ノ二

官吏、公吏ニ非サル者ノ署名捺印ス可キ場合ニ於テ捺印スルコト能ハサルトキハ署名ノミヲ爲シ署名スルコト能ハサルトキハ立會人ヲシテ代署セシメ捺印ノミヲ爲シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ立會人ヲシテ代署セシム可シ
立會人ハ其代署ノ事由ヲ記載シテ署名シ又ハ署名捺印ス可シ
官吏、公吏ノ面前ニ於テハ本人署名スルコト能ハサル場合ト雖モ立會人ヲ要セス官吏、公吏代署シテ其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條

此法律ハ頒布以前ニ係ル犯罪ニモ亦之ヲ適用ス
頒布以前ニ爲シタル訴訟手續當時ノ法律ニ背カサルトキハ其效アリトス

第二十三條

此法律ハ陸海軍ニ關スル法律ヲ以テ處分ス可キ者ニ適用スルコトヲ得ス

第二十四條

〔削除〕

第二編 裁判所

第一章 裁判所ノ管轄

第二十五條

犯罪ノ種類ニ關スル裁判所ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二十六條

管轄ヲ異ニスル數個ノ犯罪ニ付キ同時ニ同一ノ被告人ニ對シテ訴アリタルトキハ上級ノ裁判所併セテ之ヲ管轄ス

第二十七條

同等ノ裁判所ニ於テハ犯罪ノ地又ハ被告人所在ノ地ノ裁判所ヲ以テ豫審及ヒ公判ノ管轄ナリトス

第二十八條

數個ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第二十九條

從犯ハ正犯ヲ管轄スル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十條

數個ノ裁判所ノ管轄ニ屬スル正犯數名アルトキハ其中ニテ最初豫審又ハ公判ニ著手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十一條

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル皇族ノ犯罪ニ付テハ其正犯、從犯ハ身分ノ如何ヲ問ハス大審院ニ於テ之ヲ管轄ス

第二十九條

外國ニ在テ犯シタル罪本邦ノ法律ニ依リ處斷ス可キモノニシテ内地ニ於テ被告人ヲ逮捕シタルトキハ逮捕ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス又外國ヨリ送致シタルトキハ送致ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス
關席判決ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ被告人最後ノ住所ノ地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十條

海船内ノ犯罪ニ付テハ定繫港又ハ犯罪後最初ニ著船シタル地ノ裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス

第三十一條

管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第三十二條

管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スコトヲ得
大審院ニ於テ管轄裁判所ヲ指定ス可キ場合ニ於テハ檢事總長ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其申請ヲ爲スコトヲ得

第三十三條

管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲サントスル者ハ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ其趣意書ヲ差出ス可シ

舊刑事訴訟法

裁判所ハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

第三十四條

犯罪ノ性質、被告人ノ身分、員數、地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スル恐アルトキハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十五條

公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ司法大臣ノ命ニ因リ大審院檢事總長ヨリ其院ニ之ヲ爲スコトヲ得

大審院ニ於テハ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クコトナク其申請ヲ決定スヘシ

第三十六條

被告人ノ身分、地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルコト能ハサル恐アルトキハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スコトヲ得

第三十七條

嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ハ管轄裁判所ノ檢事其他訴訟關係人ヨリ上級裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得
民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯論ヲ爲シタルトキハ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス

第三十八條

●嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移ス申請ヲ爲スニハ其趣意書ニ通テ原裁判所ニ差出ス可シ裁判所書記ハ速ニ一通テ相手方ニ送達シ相手方ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得
裁判所ニ於テ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ其訴訟手續ヲ停止ス可シ

第三十九條

前條ノ申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ於テハ書類ニ依リ其申請ヲ決定ス可シ

第二章 裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避、回避

第四十條

判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラル可シ

- 第一 判事被害者ナルトキ
- 第二 判事又ハ其配偶者ト被告人、被害者又ハ是等ノ者ノ配偶者ト親屬ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ
- 第三 判事其事件ニ付キ證人、鑑定人ト爲リタルトキ又ハ被告人若クハ被害者ノ法律上代理人ナルトキ

第四 判事其事件ノ豫審終結ニ干與シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ前審ニ干與シタルトキ

第四十一條

判事法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合及ヒ偏頗ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ情況アル場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

第四十二條

忌避ノ申請及ヒ其裁判ニ付テハ民事訴訟法第三十四條乃至第三十八條ノ規定ニ從フ

第四十三條

忌避ノ申請アリタルトキハ公判ニ付テハ其辯論ヲ中止ス可シ豫審ニ付テハ仍ホ其處分ヲ繼續ス可シ但急速ヲ要セサル事件ニ付テハ豫審手續ヲ中止スルコトヲ得

第四十四條

判事自ラ第四十條ニ定メタル理由アルコトヲ認メ又ハ回避ス可キモノト思料シタルトキハ忌避申請ノ管轄裁判所ニ回避ノ申立ヲ爲ス可シ

第四十五條

本章ノ規程ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス可シ

第三編 犯罪ノ捜査、起訴及ヒ豫審

第一章 捜査

第四十六條

檢事ハ後ニ記載シタル告訴、告發、現行犯其他ノ理由ニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ其證憑及ヒ犯人ヲ捜査ス可シ

第四十七條

警視總監及ヒ地方長官ハ各其管轄地内ニ於テ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査スルニ付キ地方裁判所檢事ト同一ノ權ヲ有ス但東京府知事ハ此限ニ在ラス
左ニ記載シタル官吏、公吏ハ檢事ノ補佐トシテ其指揮ヲ受ケ司法警察官トシテ犯罪ヲ捜査ス可シ

- 第一 警視警部長、警部、警部補
 - 第二 憲兵將校、下士
 - 第三 島司
 - 第四 郡長
 - 第五 林務官
 - 第六 市町村長
- 第四十八條
海船内ノ犯罪ニ付テハ船長ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第一節 告訴及ヒ告發

第四十九條

何人ニ限ラス犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

司法警察官告訴ヲ受ケタルトキハ違警罪ニ付キ即決ヲ爲ス場合ヲ除ク外速ニ其書類ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

第五十條

告訴人ハ成ル可ク其證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キコトヲ申立ツ可シ

第五十一條

告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
又告訴ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印ス可シ若シ告訴人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第五十二條

官吏、公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地

ノ檢事ニ告發ス可シ
告發ハ官吏、公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲
シ成ル可ク證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可
シ

第五十三條

何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思
料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所
在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發ス
ルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ
其處分ヲ爲ス可シ

第五十四條

告訴、告發ハ代人ニ委任シテ之ヲ爲スコトヲ得但第五
十二條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第五十五條

告訴、告發ハ其取下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スルコト
ヲ得此場合ト雖モ第十三條ノ規定ニ從ヒ被告人ヨリ要
償ノ訴ヲ受クルコトアル可シ

第二節 現行犯罪

第五十六條

現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺
シタル罪ヲ謂フ

第五十七條

重罪、輕罪ニ付キ左ノ場合ハ現行犯ニ准ス

- 第一 犯人トシテ一人又ハ數人ニ追呼セラレルトキ
- 第二 兇器、贓物其他ノ物件ヲ携帯シ又ハ身體、被
服ニ顯著ナル犯罪ノ痕跡アリテ犯人ト思料ス可キ
トキ
- 第三 家宅内ニ於テ犯シタル罪ヲ檢證スル爲メ又ハ
其犯人ト思料ス可キ者ヲ逮捕スル爲メ戸主ヨリ官
吏ニ其處分ヲ求メタルトキ

第五十八條

司法警察官及ヒ巡査、憲兵卒其職務ヲ行フニ當リ重罪
又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リ
タルトキハ令狀ヲ待タスシテ被告人ヲ逮捕ス可シ
罰金ノ刑ニ該ル可キ輕罪又ハ違警罪ノ現行犯アルコト
ヲ知リタルトキハ被告人ノ氏名、住所ヲ問ヒ輕罪ニ付
テハ檢事、違警罪ニ付テハ即決ヲ爲ス可キ官署ニ告發
ス可シ其氏名、住所分明ナラス又ハ逃亡ノ恐アル者ハ
檢事若クハ官署ニ引致スルコトヲ得

第五十九條

巡査、憲兵卒被告人ヲ逮捕シタルトキハ速ニ之ヲ司法

警察官ニ引致ス可シ

其被告人ヲ受取リタル司法警察官ハ逮捕及ヒ告發ニ付
テノ調書ヲ作ル可シ

第六十條

何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行
犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第六十一條

前條ノ場合ニ於テ被告人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ司法警
察官ニ引致ス可シ若シ引致スルコトヲ得サルトキハ自
己ノ氏名、職業、住所及ヒ其逮捕ノ事由ヲ陳述シ假ニ
之ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡スコトヲ得

被告人ヲ巡査、憲兵卒ニ引渡シタルトキハ速ニ告訴又
ハ告發ヲ爲ス可シ

被告人又ハ巡査憲兵卒ハ逮捕ヲ爲シタル者ニ對シ共ニ
官署ニ至ルコトヲ求ムルヲ得但逮捕ヲ爲シタル者ハ正
當ノ事由アルニ非サレハ其求ヲ拒ムコトヲ得ス

第二章 起訴

第六十二條

地方裁判所檢事犯罪ノ捜査ヲ終リタルトキハ左ノ手續
ヲ爲ス可シ

第一 重罪ト思料シタル事件ニ付テハ豫審判事ニ豫

舊刑事訴訟法

審ヲ求ム可シ

第二 輕罪ト思料シタル事件ニ付テハ其輕重難易ニ
從ヒ豫審ヲ求メ又ハ直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲ス可
シ

第三 區裁判所ノ管轄ニ屬スル罪ト思料シタル事件
ニ付テハ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ區裁判所檢
事ニ送致ス可シ

第六十三條

〔削除〕

第六十四條

檢事ハ被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノト思料
シタルトキハ之ヲ管轄裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ
被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト
思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲ス可カラス

第六十五條

前數條ノ場合ニ於テ被告事件告訴ニ係ルトキハ檢事ヨ
リ其處分ヲ被害者ニ通知ス可シ

第六十六條

檢事豫審ヲ求ムルトキハ證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ
事物ヲ送致シ且臨檢ス可キ場所、逮捕ス可キ人名及ヒ
證人ト爲ル可キ者ヲ指示ス可シ

第三章 豫審

第六十七條

現行ノ重罪、輕罪ヲ除ク外豫審判事ハ檢事ノ請求アルニ非サレハ豫審ニ取掛ルコトヲ得ス此規定ニ背キタルトキハ其請求ヨリ以前ニ係ル手續ノ效ナカル可シ

第六十八條

檢事ハ豫審中何時ニテモ豫審判事ニ請求シテ訴訟記録ヲ檢閱スルコトヲ得但二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ又必要ナリトスル處分ニ付キ臨時其請求ヲ爲スコトヲ得

第一節 令 狀

第六十九條

豫審判事ハ檢事ノ起訴ニ因リ重罪、輕罪ノ事件ヲ受理シタルトキハ被告人ニ對シ先ツ召喚狀ヲ發ス可シ但召喚狀ノ送達ト被告人出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第七十條

召喚狀ニ因リ出頭シタル被告人ハ即時ニ之ヲ訊問ス可シ又遅クトモ出頭ノ日ヲ過クルコトヲ得ス

豫審判事ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人其管轄地内ニ住セ

サルトキハ訊問ス可キ條件ヲ明示シテ被告人所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第七十一條

豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出頭セサルトキハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第七十二條

豫審判事又ハ受託判事ハ左ノ場合ニ於テ直チニ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

- 第一 被告人定リタル住所アラサルトキ
- 第二 被告人罪證ヲ湮滅シ又ハ逃亡スル恐アルトキ
- 第三 被告人未遂罪又ハ脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ達セントスル恐アルトキ

第七十三條

勾引狀執行ノ命ヲ受ケタル者ハ其令狀ヲ發シタル判事ニ被告人ヲ引致ス可シ

第七十四條

勾引狀ヲ以テ引致シタル被告人ハ四十八時内ニ之ヲ訊問ス可シ若シ其時間ヲ經過スルトキハ勾引狀ヲ發スルニ非サレハ當然之ヲ釋放ス可シ

豫審判事又ハ受託判事ハ召喚狀又ハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事由アリテ令狀ニ應スル能ハサ

ルコトヲ疏明シタルトキハ被告人ノ所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

第七十五條

勾引狀ハ被告人ヲ訊問シタル後禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノト思料スルニ非サレハ之ヲ發スルコトヲ得但被告人逃亡シタル場合ニ於テハ其訊問ヲ爲サスシテ之ヲ發スルコトヲ得

第七十六條

總テ令狀ニハ被告事件及ヒ被告人ノ氏名、職業、住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌、體格等ヲ明示ス可シ

第七十七條

召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾引狀、勾引狀ハ巡查、憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム

舊刑事訴訟法

第七十八條

令狀執行ノ命ヲ受ケタル巡查、憲兵卒ハ被告人其家宅若クハ他人ノ家宅ニ潛匿シタルトキハ其地ノ市町村長又其差支アルトキハ隣佑二名以上ノ立會ヲ求メ之ヲ搜索ス可シ

第七十九條

前項ノ場合ニ於テハ被告人ヲ發見シタルト否トニ拘ハラズ搜索調書ヲ作り立會人ト共ニ署名捺印ス可シ

第八十條

豫審判事ハ被告人所在ノ地ノ豫審判事、檢事又ハ司法警察官ニ令狀ヲ示シテ即時ニ執行ヲ求ム可シ

ヲ爲ス可キコトヲ請求スルヲ得
請求ヲ受ケタル検事長ハ其管轄地内ノ檢事ヲシテ捜索
及ヒ逮捕ノ處分ヲ爲サシム可シ此場合ニ於テ檢事ノ發
シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ效ヲ有ス

第八十一條

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ
對シ合狀ヲ發シタルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ合
狀ヲ示ス可シ其長官又ハ隊長ハ已ムコトヲ得サル差支
アルニ非サレハ本人ヲシテ連ニ合狀ニ應セシム可シ

第八十二條

勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ連ニ其合狀ニ記載シタル監
獄署ニ引致ス可シ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサ
ルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得
何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ合狀ヲ檢閱シテ被告人
ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第八十三條

〔削除〕

第八十四條

在監中ノ被告人ニ對シ發シタル勾留狀ハ司獄官吏ナシ
テ之ヲ執行セシム

第八十五條

勾留狀執行ニ關シテハ第七十七條ノ規定ヲ適用ス

勾留ヲ受ケタル被告人ハ官吏ノ立會ニ依リ他人ト接見
スルコトヲ得
書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閱ヲ經タル後他人ト之ヲ
授受スルコトヲ得

豫審判事ハ必要ナリト思料シタルトキハ被告人ノ監房
ヲ別異シ、他人トノ接見、書類物件ノ授受ヲ禁シ又ハ
其書類物件ヲ差押フルコトヲ得

第八十六條

豫審判事ハ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キモノニ非
スト思料シタルトキハ豫審中何時ニテモ勾留狀ヲ取消
ス可シ

第二節 〔削除〕

第八十七條

〔削除〕

第八十八條

〔削除〕

第八十九條

〔削除〕

第三節 證據

第九十條

被告人ノ自白、官吏ノ檢證調書、證據物件、證人及ヒ
鑑定人ノ供述其他諸般ノ微憑ハ判事ノ判斷ニ任ス

第九十一條

豫審判事ハ檢事若クハ被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ
以テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル證據微憑ヲ集取ス
可シ

第九十二條

豫審判事臨檢、捜索、物件差押又ハ被告人、證人ノ訊
問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書
ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ
裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサ
ルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人
ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシ
ム可シ
前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞
カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ
書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可
シ

第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第九十三條

豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ

證人ヲ訊問スルニ付キ急遽ヲ要スルトキハ此限ニ在ラ
ス

第九十四條

豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ自白セシムル爲メ恐嚇
又ハ詐言ヲ用ユ可カラス

第九十五條

裁判所書記ハ訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人ニ之ヲ讀聞
カス可シ

第九十六條

被告人其供述ニ付キ變更増減ス可キコトヲ申立タルト
キハ更ニ訊問ヲ爲シ其訊問及ヒ供述ヲ錄取シ之ヲ讀聞
カセ署名捺印ス可シ

第九十七條

被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第九十八條

豫審判事ハ被告人ノ共犯ナルコト、人違ナキコト其他
事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリト
スルトキハ被告人ト他ノ被告人、證人又ノ其他ノ者ト
對質セシムルコトヲ得

第九十九條

書記ハ對實人ノ供述及ヒ對實ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對實人ニ其對實ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ」
第九十五條第九十六條ノ規定ハ對實ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第一百條

被告人又ハ對實人聲ナルトキハ書面ヲ以テ問ヒ啞ナルトキハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聲者、啞者文字ヲ知ラサルトキハ通事ヲ命ス可シ
被告人又ハ對實人國語ニ通セサルトキ亦同シ

第一百一條

通事ハ正實ニ通譯ス可キ宣誓ヲ爲ス可シ
書記ハ通事ニ讀書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ」
第三十六條第三十七條第四十一條ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第五節 檢證、搜索及ヒ物件差押

第一百二條

豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ臨ミ檢證ヲ爲ス可シ

第一百三條

豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法、日時、場所及ヒ被告人

ノ人違ナキコトヲ證明ス可キ模樣ニ付キ調書ヲ作ル可シ
又被告人ノ利益ト爲ル可キ模樣ヲモ記載ス可シ

第一百四條

豫審判事ハ被告人ノ住居又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ住居ニ臨檢シ搜索ヲ爲スコトヲ得」
被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住居ニ在ラサルトキハ同居ノ親屬若シ其在ラサルトキハ市町村長ノ立會アルヲ要ス

第一百五條

第七十八條第三項ノ規定ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
豫審判事ハ被告人又ハ事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スル疑アル者ノ身體及ヒ之ニ屬スル物件ニ就キ搜索ヲ爲スコトヲ得

第一百六條

豫審判事ハ臨檢、搜索ニ因リ發見シタル物件其事實ヲ證明スルニ足ル可シト思料シタルトキハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目錄ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スルハ裁判所書記之ヲ擔任ス可シ

第一百七條

豫審判事ハ臨檢、搜索、物件差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサルトキハ場所ノ周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置ク

コトヲ得

第一百八條

被告人ハ臨檢、搜索、物件差押ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ自ら立會フコトヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトスルトキハ此限ニ在ラス

第一百九條

豫審判事ハ被告人物件差押ノ處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ
其訊問及ヒ供述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ

第一百十條

豫審判事ハ臨檢、搜索ノ場所ニ於テ證人ノ供述ヲ聽クコトヲ必要ナリトスルトキハ第九十五條以下ノ規定ニ從ヒ之ヲ訊問ス可シ

第一百一條

豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルコトヲ禁スルヲ得
若シ其禁ヲ犯ス者アルトキハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルコトヲ得

第一百二條

豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢、搜索、

物件差押ノ事ヲ區裁判所判事ニ囑託スルコトヲ得

第一百三條

豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ驛遞、電信、鐵道ノ官署、諸會社ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審判事ニ關係アル者ヨリ發シ若クハ此等ノ者ニ對シ發シタル書類、電報又ハ物件ヲ受取開披スルコトヲ得但受取證書ヲ渡ス可シ

第一百四條

證言ヲ拒ムコトヲ得ル者ノ所持スル物件ニシテ其默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルモノハ其承諾アルニ非サレハ之ヲ差押ヘ及ヒ開披スルコトヲ得ス

第六節 證人訊問

第一百五條

證人ノ呼出狀ニハ其氏名、住所及ヒ職業ヲ記載ス可シ」
又出頭ノ日時、場所及ヒ呼出ニ應セサルトキハ罰金ヲ言渡シ且勾引スルコトアル可キ旨ヲ記載ス可シ
呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ

第一百六條

證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ疏明シタルトキハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊

問ス可シ

第百十七條

證人ト爲ル可キ者豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ナルトキハ其所屬ノ長官又ハ隊長ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官又ハ隊長ハ即時ニ出頭セシム可キコトヲ認可シ又ハ職務上已ムコトヲ得サル差支アルトキハ其事由ヲ付シテ出頭ノ延期ヲ豫審判事ニ請求ス可シ

第百十八條

豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セザルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第百十九條

豫審判事ハ證人罰金言渡書ノ送達アリタルヨリ三日内

ニ其出頭セザリシコトヲ正當ノ理由ヲ以テ辯解シタルトキハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

第百二十條

證人呼出狀ニ因リ出頭シタルトキハ其呼出狀ヲ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタルトキハ其人違ナキコトヲ疏明ス可シ

第百二十一條

豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名、年齢、職業、住所及ヒ第百二十三條ニ記載シタル者ナリヤ否ヤヲ問フ可シ

第百二十二條

豫審判事ハ證人ヲシテ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セザル旨ヲ宣誓セシム可シ裁判所書記ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第百二十三條

左ニ記載シタル者ハ證人ト爲ルコトヲ許サス但宣誓ヲ爲サシメスシテ事實參考ノ爲メ其供述ヲ聽クコトヲ得

第一 民事原告人

第二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬但姻族ニ付テハ

婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ此等ノ者ノ後見ヲ受クル者

第四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人又ハ同居人

第百二十四條

左ニ記載シタル者亦前條ニ同シ

第一 十六歳未満ノ幼者

第二 知覺精神ノ不十分ナル者

第三 瘖啞者

第四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者

第五 重罪事件又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付キ公判ニ付セラレタル者

第六 現ニ供述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受ケ其證恐十分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者

第百二十五條

左ニ記載シタル場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥劑師、藥種商、産婆、辯護士、辯護人、公證人又ハ此等ノ職ニ在リシ者及ヒ宗教若ク

舊刑事訴訟法

ハ禱祀ノ職ニ在ル者又ハ此等ノ職ニ在リシ者其業務上取扱ヒタルコトニ付キ知得タル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

證言ヲ拒ム者ハ拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

第百二十六條

證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ供述ヲ肯セザルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ四十圓以下ノ罰金又ハ科料ヲ言渡ス可シ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金又ハ科料ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス可シ

第百二十七條

證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト對質セシムルコトヲ得

第百二十八條

豫審判事ハ證人ノ供述ヲ確實ナラシムル爲メ必要ナリトスルトキハ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルコトヲ得若シ證人同行スルコトヲ肯セザルトキハ第百十八條ノ規定ニ從フ

第二百二十九條

第一百條第一條ノ規定ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス

第二百三十條

皇族證人ナルトキハ豫審判事所在ニ就キ訊問ヲ爲ス可シ

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ

第二百三十一條

豫審判事ハ證人ニ其供述ノ相違ナキヤ否ヤヲ知ラシムル爲メ裁判所書記ヲシテ調書ヲ讀聞カセシム可シ
證人ハ其供述ヲ變更増減センコトヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルコト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載ス可シ
調書ニハ豫審判事、書記及ヒ證人共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第二百三十二條

豫審判事ハ證人裁判所所在ノ地ニ住セサルトキハ其住居ノ地ノ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ルトキハ其所在ノ地ノ豫審判事又ハ區裁判所判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルコトヲ得

第二百三十三條

第一百八條第一百九條及ヒ第二百二十六條ニ掲ケタル證人ニ對スル豫審判事ノ權ハ受託判事ニモ屬ス

第二百三十四條

證人ハ出頭ニ付テノ旅費、日當ヲ要ムルコトヲ得

第七節 鑑定

第二百三十五條

豫審判事ハ犯罪ノ性質、方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定ヲ必要ナリトスルトキハ學術、職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得ヘキ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定ノ爲メ必要ナリトスルトキハ死體ノ解剖ヲ命シ又既ニ埋葬シタル死體ヲ解剖シ若クハ檢視スル爲メ墳墓ノ發掘ヲ命スルコトヲ得

第二百三十六條

鑑定ニ付テハ第一百十五條第一百八條乃至第二百一十一條第一百二十三條乃至第二百五條第二百二十八條及ヒ第二百三十二條ノ規定ヲ準用ス但鑑定人ニ對シテハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第八節 現行犯ノ豫審

第二百四十二條

豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ檢事ノ請求ヲ待タズ直チニ其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルコトヲ得

豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ合狀ヲ發シ其他此章ノ規定ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第二百四十三條

前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公訴ヲ受理シタルモノトス其調書ニハ現行ノ重罪又ハ輕罪ナルコトヲ記載ス可シ

豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キモノニ非サル意見アリト雖モ通常ノ規定ニ從ヒ之ヲ終結ス可シ

第二百四十四條

地方裁判所檢事及ヒ區裁判所檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ重罪又ハ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急遽ヲ要スルトキハ豫審判事ヲ待ツコトナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得但罰金又ハ科料

第二百三十七條

第一百條第一條ノ規定ハ鑑定人ニ付テモ亦之ヲ適用ス
鑑定人ハ公平且正實ニ鑑定ス可キ宣誓ヲ爲スコシ其宣誓ハ第二百二十二條ノ式ニ從フ

第二百三十八條

鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ鑑定ヲ肯セサルトキハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ四十圓以下ノ罰金又ハ科料ヲ言渡スコシ但其決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル效力ヲ有ス

第二百三十九條

豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲシテ鑑定セシムルコトヲ得

第二百四十條

鑑定人ハ鑑定書ヲ作リ其手續、結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記ス可シ
若シ結果ヲ得サルトキハ其推測スル所ヲ記載ス可シ
鑑定人意見ヲ異ニスルトキハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

第二百四十一條

鑑定人ハ旅費、日當及ヒ立替金ノ辨濟ヲ要ムルコトヲ得

及ヒ費用賠償ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ス
證人及ヒ鑑定人ノ供述ハ宣誓ヲ用ユルコトナク之ヲ聽
ク可シ

第四百四十五條

前條ノ場合ニ於テ地方裁判所檢察ハ證憑書類ニ意見書
ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致シ區裁判所檢察ハ之ヲ
地方裁判所檢察ニ送致ス可シ

第四百四十六條

區裁判所檢察其裁判所ノ管轄ニ屬スル輕罪ノ現行犯ア
ルコトヲ知リタル場合ニ於テ其事件急速ヲ要スルトキ
ハ第四百四十四條ニ規定シタル處分ヲ爲スコトヲ得
若シ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發シタルトキハ三日内ニ起
訴ノ手續ヲ爲スコシ

第四百四十七條

第四百四十四條第四百四十六條ニ於テ檢察ニ許シタル職務
ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フコトヲ得但勾留狀ヲ發
スルコトヲ得ス
司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ管轄裁
判所ノ檢察ニ送致シ且被告人ヲ逮捕シタルトキハ共ニ
之ヲ送致ス可シ

第四百四十八條

地方裁判所檢察ハ區裁判所檢察又ハ司法警察官ヨリ事

件ノ送致ヲ受ケタルトキハ一切ノ書類ニ請求書ヲ添ヘ
豫審判事ニ送致ス可シ
若シ同時ニ被告人ヲ受取リタルトキハ二十四時内ニ之
ヲ訊問シ勾留狀ヲ發シ又ハ發セスシテ前項ノ手續ヲ爲
スコシ

第四百四十九條

地方裁判所檢察ハ何レノ場合ニ於テモ輕罪ノ現行犯ニ
係リ豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタルトキハ勾留狀
ヲ發シタルトキハ拘ハラス直チニ其裁判所ニ訴ヲ爲
スコトヲ得
被告事件罪ト爲ラス又ハ公訴受理ス可カラサルモノト
思料シタルトキハ起訴ノ手續ヲ爲スコカラス

第九節 保 釋

第五百十條

豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因
リ檢察ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ
證書ヲ差出し且保證ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得
被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ム
ルコトヲ得

第五百十一條

保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記

載ス可シ

第五百十二條

保證ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若ク
ハ有價證券ヲ差出スコシ
又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル實力アル者ヨリ
金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第五百十三條

保釋中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其
報告ヲ爲スコシ

第五百十四條

保釋中被告人呼出ヲ受ケ正當ノ事由ナクシテ出頭セサ
ルトキハ保證金ノ全部又ハ一分ヲ沒收スコシ

第五百十五條

保證金ヲ沒收スルニハ檢察ノ意見ヲ聽キ豫審判事其言
渡ヲ爲スコシ

第五百十六條

豫審判事保證金ヲ沒收シタルトキハ保釋ノ言渡ヲ取消
スコシ

第五百十七條

又豫審中保釋ノ言渡ヲ取消スコトヲ必要ナリトスルト
キハ檢察ノ意見ヲ聽キ其言渡ヲ取消スコシ
豫審判事保證金ヲ沒收シタル後免訴ノ言渡、違警罪又

第五百十八條

ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ
タルトキハ檢察ノ意見ヲ聽キ前ニ沒收シタル金額ヲ還
付スコシ

第五百十九條

豫審判事免訴ノ言渡、違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪
ニ付キ公判ニ付スル言渡ヲ爲シ若クハ保釋ノ言渡ヲ取
消シタルトキハ保證金ヲ還付スコシ

第五百二十條

保釋ヲ許ササル言渡ニ對シテハ其裁判所へ異議ノ申立
ヲ爲スコトヲ得
裁判所ハ檢察ノ意見ヲ聽キ其許否ヲ決定スコシ

第五百二十一條

豫審判事ハ保釋ノ請求アルトキハ問ハス檢察ノ意見
ヲ聽キ被告人ヲ其親屬又ハ故舊ニ責付スルコトヲ得
責付ヲ爲スニハ親屬又ハ故舊ヨリ何時ニテモ呼出ニ應
シ被告人ヲ出頭セシム可キ證書ヲ差出サシムヘシ

第五百二十二條

責付中被告人ヲ呼出ストキハ出頭ヨリ二十四時前ニ其
告知ヲ爲スコシ
被告人正當ノ事由ナクシテ出頭セサルトキハ檢察ノ意
見ヲ聽キ責付ノ言渡ヲ取消スコシ

第十節 豫審終結

第六百六十一條

豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非ストシ又ハ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ豫審終結ノ處分ニ付キ檢事ノ意見ヲ求ムル爲メ訴訟記録ヲ送致ス可シ

第六百六十二條

檢事ハ豫審十分ナラスト思料シタルトキハ其條件ニ付キ更ニ取調ヲ請求スルコトヲ得若シ豫審判事其請求ヲ肯セザルトキハ檢事ハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ二十四時内ニ之ヲ還付ス可シ

第六百六十三條

豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルヲ問ハス後數條ニ記載シタル決定ヲ以テ豫審ヲ終結ス可シ

第六百六十四條

豫審判事ハ被告事件其管轄ニ非サルコトヲ認メタルトキハ其旨ヲ言渡ス可シ若シ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前ニ發シタル令狀ヲ存シ又ハ新ニ令狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第六百六十五條

豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人

勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一 犯罪ノ證據十分ナラザルトキ

第二 被告事件罪ト爲ラザルトキ

第三 公訴ノ時効ニ罹リタルトキ

第四 確定判決ヲ經タルトキ

第五 大赦アリタルトキ

第六 法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ

第六百六十六條

被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第六百六十七條

被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬スルモノト思料シタルトキハ公判ニ付スル言渡ヲ爲ス可シ

第六百六十八條

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罪金ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ爲ス可シ

第六百六十九條

豫審終結ノ決定ニハ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ付ス可シ

管轄違ノ言渡ヲ爲スニハ其理由ヲ明示シ若シ被告人ヲ

勾留ス可キトキハ其理由ヲ明示ス可シ
免訴ノ言渡ヲ爲スニハ被告事件罪ト爲ラザルト、公訴受理ス可カラザルト及ヒ其理由又犯罪ノ證據十分ナラザルトキハ其旨ヲ明示ス可シ
區裁判所ニ移ス言渡又ハ公判ニ付スル言渡ヲ爲スニハ犯罪ノ性質、模様、證據ノ十分ナルコト及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ明示ス可シ

第七十條

前條ノ決定ニハ第七十六條ノ規定ニ從ヒ被告人ノ氏名等ヲ明示ス可シ

第七十一條

豫審終結ノ決定ノ正本ハ速ニ檢事及ヒ被告人ニ送達ス可シ

第七十二條

檢事ハ免訴又ハ管轄違ノ決定ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得

第七十三條

(削除)

第七十四條

豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間内又抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ停止ス

第七十五條

豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付キ再ヒ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證據アルトキハ此限ニ在ラス
新ナル證據アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

第四編 公判

第一章 通則

第七十六條

公判ハ判事、檢事、裁判所書記出廷シテ之ヲ爲スモノトス

第七十七條

被告人ハ公庭ニ於テ身體ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

第七十八條

裁判長ハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第七十九條

裁判所ハ被告人ヲ訊問シタル後何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得
辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ但
裁判所ノ允許ヲ得タルトキハ辯護士ニ非サル者ト雖モ
辯護人ト爲スコトヲ得

第七十九條ノ二

左ノ場合ニ於テ被告人自ラ辯護人ヲ選任セザルトキハ
裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ辯護人ヲ付
スルコトヲ得

第一 被告人十五歳未満ナルトキ

第二 被告人婦女ナルトキ

第三 被告人聾者又ハ啞者ナルトキ

第四 被告人精神病ニ罹リ又ハ意識不十分ナルノ疑
アルトキ

第五 被告事件ノ模様ニ因リ裁判所ニ於テ辯護人ヲ
必要ナリトスルトキ

前項ノ辯護人ハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯
護士中ヨリ選任ス可シ但辯護士一名ヲシテ被告人數名
ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得

第八十條

辯護人ハ裁判所ニ於テ訴訟記録ヲ閱讀シ且之ヲ抄寫ス
ルコトヲ得

第八十一條

裁判所ニ於テハ訴ヲ受ケザル事件ニ付キ裁判ヲ爲スコ
カラズ但辯論ニ因リ發見シタル附帶ノ犯罪ニ付テハ此
限ニ在ラス

若シ附帶ノ犯罪ニ付キ豫審ヲ必要ナリトスルトキハ本
案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第八十五條

左ノ場合ニ於テハ附帶ノ犯罪ナリトス

第一 同一場所ニ於テ同時ニ一人又ハ數人ニテ犯罪
ヲ犯シタルトキ

第二 數人通謀シテ日時又ハ場所ヲ異ニシ犯罪ヲ犯
シタルトキ

第三 自己又ハ他人ノ犯罪ヲ容易ニスル爲メ又ハ其
罪ヲ免カレル爲メ他ノ罪ヲ犯シタルトキ

第八十六條

檢事及ヒ被告人ハ第一審第二審ヲ問ハス本案ノ判決ア
ルマテ何時ニテモ管轄違又ハ公訴受理ス可カラサル申
立ヲ爲スコトヲ得

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ管轄違又ハ公訴受理ス可カ
ラサル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十七條

裁判所ニ於テ前條ノ申立ヲ却下シタルトキハ本案ノ判
決ヲ待タズ直チニ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得此場合

被告人ノ法律上代理人ハ其補佐人ト爲リ辯論ニ與カル
コトヲ得

第八十二條

被告人出頭シテ辯論スルコトヲ肯セザルトキハ對席ト
シテ裁判ヲ爲スコシ

被告人審問ヲ妨ケ又ハ不當ノ行狀ヲ爲シ裁判長ヨリ退
延又ハ勾留ヲ命セラレタルトキ亦同シ若シ辯論二日ニ
渉ルトキハ更ニ被告人ヲ出頭セシム可シ

第八十三條

被告人精神病亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサル
トキハ控訴ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ
該ル可キ事件ニ付キ被告人代人ヲ差出シタルトキハ此
限ニ在ラス

辯論ニ取掛リタル後被告人精神病亂シタルトキハ其控
訴ノ後新ニ辯論ヲ爲スコシ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ控
訴ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲スコシ但五
日間辯論ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリ
タルトキハ新ニ辯論ヲ爲スコシ

若シ被告事件及ヒ法律ノ適用ニ付キ既ニ辯論ヲ終リタ
ルトキハ其控訴ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲
スコシ

第八十四條

ニ於テハ本案ノ辯論ヲ停止ス

第八十八條

調書ヲ作りタル司法警察官ハ檢事其他訴訟關係人ノ請
求ニ因リ又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出
スコトヲ得

第八十九條

豫審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定人
ハ更ニ之ヲ呼出スコトヲ得

豫審ニ於ケル證人ノ供述書又ハ鑑定人ノ鑑定書ハ更ニ
其證人、鑑定人ヲ呼出ササルトキ、證人、鑑定人呼出テ
受ケ出頭セザルトキ又ハ豫審及ヒ公判ニ於ケル供述、
鑑定ヲ比較ス可キトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ
因リ又ハ裁判長ノ職權ヲ以テ之ヲ朗讀セシムルコトヲ
得

第九十條

第九十五條以下ノ規定ハ公判ノ證人ニ第三百三十五條以
下ノ規定ハ公判ノ鑑定人ニモ亦之ヲ準用ス

第九十一條

證人疾病其他正當ノ事故ニ因リ出頭スル能ハサルコト
ヲ疏明シタルトキハ裁判所ハ其部員一名ニ命シ又ハ區
裁判所判事ニ囑託シ其所在ニ就テ之ヲ訊問セシムルコ
トヲ得

第九十二條

檢事、被告人及ヒ民事原告人ノ請求ニ因リ呼出ス證人ノ氏名目録ハ開廷ヨリ一日前之ヲ各相手方ニ送達ス可シ

第九十三條

證人ハ互ニ言語ヲ接ス可カラス又供述前辯論ニ立會フ可カラス既ニ供述ヲ爲シタル後ハ公廷ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退去ノ允許ヲ得タルトキハ此限ニ在ラス

第九十四條

證人及ヒ被告人ノ訊問ハ裁判長之ヲ爲スモノトス陪席判事及ヒ檢事ハ裁判長ニ告ケ證人及ヒ被告人ヲ訊問スルコトヲ得

第九十五條

證人又ハ鑑定人ノ供述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト思料シタルトキハ裁判所ニ於テ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ取押ヘ勾引狀ヲ發シ豫審判事ニ送致ス可シ其證人又ハ鑑定人ノ供述ハ裁判所書記之ヲ錄取シ豫審判事ニ送致ス可シ本條ノ場合ニ於テハ裁判所ニテ檢事其他訴訟關係人ノ

請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ本案ノ辯論ヲ停止スルコトヲ得

第九十六條

被告人聾者、啞者又ハ國語ニ通セサル者ナルトキハ第一百條第一條ノ規定ニ從フ

第九十七條

裁判所ニ於テハ證人被告人ノ面前ニ於テ十分ナル供述ヲ爲スコトヲ得サル可シト思料シタルトキハ其證人ノ供述中被告人ヲ退廷セシムルコトヲ得但裁判長ハ證人供述ヲ終リタル後被告人ヲ入廷セシメ其供述シタル事項ヲ告知ス可シ本條ノ規定ハ共同被告人ニモ亦之ヲ適用ス

第九十八條

裁判長ハ各證憑ノ取調終リタル毎ニ被告人ニ意見アリキコトヲ告知ス可シ又證憑物件ハ被告人ニ示シテ辯解ヲ爲サシム可シ

第九十九條

辯論中公判ノ手續ニ付キ異議ノ申立アリタルトキハ裁判所ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽キ直チニ之ヲ裁判ス可シ

第一百條

裁判所ニ於テハ公訴ノ判決ト同時ニ私訴ノ判決ヲ爲ス

可シ

私訴ニ付キ取調未タ十分ナラサルトキハ公訴ノ判決アリタル後其判決ヲ爲スコトヲ得

第一百一條

被告人有罪ト爲リタルトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ公訴ニ關スル訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔ス可キ言渡ヲ爲ス可シ

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テ公訴ニ關スル訴訟費用ハ國庫之ヲ負擔ス

第一百二條

被告人有罪ト爲リタルト否トヲ問ハス沒收ニ係ラサル差押物ハ所有者ノ請求ナシト雖モ之ヲ還付スル言渡ヲ爲ス可シ

第一百三條

刑ノ言渡ヲ爲スニハ罪トナルヘキ事實及ヒ證據ニ依リテ之ヲ認メタル理由ヲ明示シ且法律ヲ適用シ其理由ヲ付ス可シ

第一百四條

無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示スヘシ

判決ノ言渡ハ辯論ヲ終リタル後即日又ハ次ノ開廷日ニ之ヲ爲ス可シ

判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス其判決ノ理由ハ判決ノ言渡ト同時ニ之ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告知ス可シ

第一百五條

判決ノ原本ニハ其裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、其事件ニ干與シタル檢事ノ官氏名ヲ記載シ判事、裁判所書記共ニ署名捺印ス可シ

第一百六條

訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本、謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時内ニ之ヲ下付ス可シ

第一百七條

對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ裁判長ヨリ其言渡ヲ受ケタル者ニ前條ノ請求及ヒ其判決ニ對シ上訴ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ告知シ又對席判決ニ因リ刑ノ言渡アリタルトキハ其判決ニ對シ故障ヲ爲スヲ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ記載ス可シ

第一百八條

若シ其告知又ハ記載ナキトキハ更ニ其通知アルマテ上訴及ヒ故障期間ノ經過ヲ停止ス

裁判所書記ハ公判始末書ヲ作り左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ

第一 公ニ辯論ヲ爲シタルコト又ハ公開ヲ禁シタルコト及ヒ其事由

第二 被告人ノ訊問及ヒ其供述

第三 証人、鑑定人ノ供述及ヒ宣誓ヲ爲シタルコト若シ宣誓ヲ爲ササルトキハ其事由

第四 證據物件

第五 辯論中異議ノ申立アリタルコト、其申立ニ付キ檢事其他訴訟關係人ノ意見及ヒ裁判所ノ裁判

第六 辯論ノ順序及ヒ被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルコト

第二百九條

公判始末書ニハ前條ニ記載シタル事項ノ外裁判ヲ爲シタル裁判所、年月日、裁判長、陪席判事、檢事及ヒ裁判所書記ノ官氏名ヲ記載ス可シ

辯論數日ニ涉ルトキハ其旨及ヒ同一ノ判事出席シタルコトヲ記載ス可シ

第二百十條

公判始末書ハ判決言渡ヨリ三日内ニ之ヲ整理シ裁判長

及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ
裁判長ハ署名捺印セサル以前ニ公判始末書ヲ檢閲シ若シ意見アルトキハ其紙尾ニ記載ス可シ

第二百一一條

判決及ヒ公判始末書ノ原本ハ訴訟記録ニ添付シ其裁判所ニ保存ス可シ若シ上訴アリタルトキハ之ヲ上訴裁判所ニ送付ス可シ

第二章 區裁判所公判

第二百一十二條

區裁判所ハ左ノ場合ニ於テ其管轄ニ屬スル違警罪及ヒ輕罪ノ公訴ヲ受理ス

第一 檢事ノ起訴アリタルトキ

第二 豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判アリタルトキ

第二百一十三條

檢事ハ何レノ場合ニ於テモ被告人ニ對シ呼出狀ヲ發ス可キコトヲ裁判所ニ請求ス可シ

第二百一十四條

呼出狀ニハ呼出ヲ受ク可キ者ノ氏名、職業、住所、出

頭ノ日時、場所及ヒ被告事件ヲ記載シ且被告事件違警罪又ハ罰金ニ該ル可キ輕罪ナルトキハ代人ヲシテ出頭

セシムルコトヲ得ヘキ旨ヲ記載ス可シ

若シ被告事件ノ記載ナキ場合ニ於テ被告人未ダ其事件ニ付キ取調ヲ受ケサリシトキハ辯護準備ノ爲メ二日ノ猶豫ヲ求ムルコトヲ得

第二百十五條

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百十六條

判事ハ豫審ヲ經サル被告事件急遽ヲ要スルトキハ公判ニ取掛ル前檢證處分ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ檢事其他訴訟關係人ノ立會ヲ要セス

第二百十七條

證人ハ呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

又呼出ヲ受ケスシテ出頭シタル者ト雖モ異議ノ申立ナキトキハ裁判所ニ於テ證人トシテ其供述ヲ聽クコトヲ得

第二百十八條

判事ハ先ツ被告人ノ氏名、年齢、身分、職業、住所、出生ノ地ヲ問フ可シ

檢事ハ被告事件ヲ陳述ス可シ

第二百十九條

判事ハ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊問ス可シ
必要ナル調査其他證憑書類ハ書記ヲシテ朗讀セシメ又證人ノ供述ヲ聽キ其他證憑ノ取調ヲ爲ス可シ

第二百二十條

若シ被告人ノ自白アリタル場合ニ於テ檢事、民事原告人ノ異議ナキトキハ他ノ證憑ヲ取調フルニ及ハス

第二百二十一條

證憑調濟ノ後檢事ハ事實及ヒ法律適用ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ

第二百二十二條

被告及ヒ其辯護人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
檢事、被告人及ヒ辯護人ハ迭ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ヲシテ供述セシム可シ

第二百二十三條

公訴ニ付キ辯論終リタル後民事原告人ハ被害ノ事實ヲ證明シ且私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ

第二百二十四條

被告、辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スコトヲ得
被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ判決ヲ以テ管轄邊ノ言渡ヲ爲ス可シ若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

本條ノ場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十三條

被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ證據十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十四條

犯罪ノ證據十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第百六十五條第三號以下ノ場合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十五條

前二條ノ場合ニ於テハ私訴ニ付キ其請求價額ノ多寡ニ拘ハラス判決ヲ爲ス可シ

第二百二十六條

呼出ヲ受ケタル被告人又ハ罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ其代人公判ノ期日ニ出頭セサルトキハ檢事ノ請求スル所ヲ聽キ闕席判決ヲ爲ス可シ
私訴關係人出頭セサルトキハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百二十七條

禁錮ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付キ被告人出頭セスト雖モ豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達シタ

ル證アルニ非サレハ闕席判決ヲ爲ス可カラズ
豫審終結ノ言渡書又ハ公判ノ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコト能ハサル場合ニ於テハ裁判所ニテ猶豫ノ期間ヲ定メ其期間ニ被告人出頭セサルトキハ闕席判決ヲ爲ス可キ告知書ヲ其親屬又ハ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地ノ市町村長ニ送達ス可シ若シ其本籍若クハ最後ノ住所ノ地分明ナラサルトキハ同上ノ告知書ヲ少クトモ一月間裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ公示ス可シ

第二百二十八條

闕席判決ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ闕席者ニ送達ス可シ
闕席判決ヲ受ケタル者ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ルコトヲ得

第二百二十九條

故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及ヒ私訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第二百三十條

故障ヲ申立テントスル者ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可シ

第二百三十一條

裁判所ニ於テハ故障ノ申立アリタルコトヲ相手方ニ通知シ且其事件ヲ公判ニ付ス可キ期日ヲ定メ訴訟關係人ヲ呼出ス可シ

第二百三十二條

裁判所ニ於テハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又故障ノ期間ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ棄却ス可シ

第二百三十三條

故障ノ申立ヲ受理シタル場合ニ於テハ更ニ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ
前項ノ場合ニ於テ故障申立人闕席シタルトキハ更ニ故障ヲ申立ルコトヲ得ス

第二百三十四條

第二百四十七條第二百四十八條ノ規定ハ闕席判決ニ對スル故障ニモ亦之ヲ準用ス

第三章 地方裁判所公判

第二百三十五條

地方裁判所ニ於テハ豫審判事又ハ上級裁判所ヨリ事件ヲ移ス裁判ニ因リ其管轄ニ屬スル輕罪及ヒ重罪ノ公訴ヲ受理ス

又輕罪ニ付テハ檢事ノ起訴ニ因リ其公訴ヲ受理ス

第二百三十六條

前章ノ規定ハ此章ニ別段ノ定メナキモノニ限リ地方裁判所ノ公判ニ準用ス

第二百三十七條

重罪事件ニ付テハ開廷前裁判長又ハ受命判事ハ裁判所書記ノ立會ニ依リ一應被告人ヲ訊問シ且辯護人ヲ選任シタルヤ否ヤヲ問フ可シ
若シ辯護人ヲ選任セサルトキハ裁判長ノ職權ヲ以テ其裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ被告人及ヒ辯護士ニ異議ナキトキハ辯護士一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルコトヲ得
書記ハ本條ノ訊問ニ付キ特ニ調書ヲ作ル可シ

第二百三十八條

裁判所ニ於テ事實發見ノ爲メ必要ナリトスルトキハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ受命判事ヲシテ臨檢ノ處分ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得

第二百三十九條

裁判所ニ於テハ被告人其罪ヲ自白シタルトキト雖モ仍ホ證據ヲ取調ヘサル可カラズ

第二百四十條

裁判所ニ於テハ被告事件區裁判所ノ管轄ニ屬スルモノ

ト認メタルトキト雖モ第一審ノ判決ヲ爲スコシ
私訴ニ付キ其請求ノ價額通常民事上區裁判所ノ管轄ニ
屬スルトキ亦同シ

第二百四十一條

裁判所ニ於テ輕罪トシテ受理シタル事件ヲ重罪ナリト
スルトキハ其事件豫審判事ニ送付スル決定ヲ爲スコシ
檢事ノ請求アルトキ亦同シ

被告事件豫審ヲ經タルトキハ公判ヲ止メ受命判事ナシ
テ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムヘシ
受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第五編 上 訴

第一章 通 則

第四百四十二條

檢事其他訴訟關係人ハ法律ニ許シタル上訴ヲ爲スコト
ヲ得

第四百四十三條

檢事ハ被告人ノ利益ノ爲メニモ亦上訴ヲ爲スコトヲ得
辯護人ハ被告人ニ代リ上訴ヲ爲スコトヲ得但被告人ノ
明言シタル意思ニ反スルコトヲ得ス

第四百四十四條

被告人ノ法律上代理人ハ獨立シテ上訴ヲ爲スコトヲ得

第二百四十五條

勾留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ監獄
署長ニ差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致スコシ

第二百四十六條

檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決アルマテ何時
ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得

第二百四十七條

訴訟關係人天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メ上訴期
間ヲ經過シタル場合ニ於テ其旨ヲ疏明シタルトキハ期
間ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ
得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間内ニ其疏明方法
ヲ申立書ニ記載シ上訴ヲ爲スコシ

第二百四十八條

前條ノ申立アリタルトキハ裁判所書記連ニ其申立書ヲ
相手方ニ送達スコシ相手方ハ三日内ニ答辯書ヲ差出ス
コトヲ得

第二百四十九條

上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ先
ツ其申立ヲ許スコキヤ否ヤヲ決定スコシ

第二章 控 訴

第二百五十條

控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタ
ル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ
判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百五十一條

控訴ハ判決ノ一分ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得若シ之ヲ限
ラサルトキハ判決ノ全部ニ對シ控訴ヲ爲シタルモノト
看做スコシ

第二百五十二條

控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日トス
開席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間内故障ヲ爲サスシ
テ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條

本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間内及ヒ控訴アリタルト
キハ判決ノ執行ヲ停止ス

第二百五十四條

控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出スコシ
裁判所ハ控訴ノ申立アリタルコトヲ速ニ相手方ニ通知
スコシ

第二百五十五條

第二百五十六條

訴訟記録ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事
ハ之ヲ裁判所ニ差出スコシ

第二百五十七條

控訴裁判所ニ於テハ訴訟關係人ニ對シ呼出狀ヲ發シタ
ル後其裁判ニ取掛ル可シ

第二百五十八條

呼出狀ノ送達ト出頭トノ間少クモ二日ノ猶豫アル可シ

第二百五十九條

控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定
ヲ適用ス

第二百六十條

第一審ニ於テ訊問シタル證人又ハ鑑定ヲ爲シタル鑑定
人ハ控訴裁判所ニ於テ其再度ノ訊問鑑定ヲ必要ナリト
セサルトキハ之ヲ呼出ササルコトヲ得

控訴裁判所ノ檢事モ亦附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百六十條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ期間ノ經過後ニ係ルモノト認ムルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

第二百六十一條 控訴裁判所ニ於テハ控訴ノ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ棄却ス可シ

第二百六十二條 控訴裁判所ニ於テハ原裁判所ノ管轄違ナルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ取消ス可シ此場合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百六十三條 前條第一項ノ場合ニ於テ控訴ヲ受ケタル地方裁判所自ラ其事件ニ付キ第一審トシテ裁判權ヲ有スルトキハ更ニ其事件ニ付キ判決ヲ爲スコトヲ得但事件重罪ナルトキハ第二百四十一條ノ規定ニ從ヒ處分ス可シ

第二百六十四條

控訴院ニ於テ地方裁判所カ輕罪ナリト判決シタル事件ヲ重罪ナリトスルトキ又ハ其事件ヲ重罪ナリトシテ主タル控訴又ハ附帶控訴アリタルトキハ其公判ヲ止メ受命判事ヲシテ其事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得本條ノ場合ニ於テ被告人辯護人ヲ選任セザルトキハ第二百三十七條第二項ノ規定ニ從ヒ裁判長ノ職權ヲ以テ辯護人ヲ選任ス可シ

第二百六十五條

被告人、辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ許サス

第二百六十六條

控訴申立人出頭セザルトキハ開席判決ヲ以テ控訴ヲ棄却シ相手方出頭セザルトキハ申立人ノ意見ヲ聽キ開席判決ヲ爲スコトヲ得

第三章 上告

第二百六十七條

上告ハ地方裁判所又ハ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ第八十七條ニ規定シタル本案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十八條

上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第二百六十九條

裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

- 第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セザリシトキ
- 第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其效ナカリシトキ
- 第三 判事忌避セラレ其忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ
- 第四 裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ
- 第五 法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セザルトキ
- 第六 法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カ

舊刑事訴訟法

サルトキ

第七 裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタルトキ

第八

判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセザルトキ

第九

裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ

第十

擬律ノ錯誤アルトキ

第二百七十條

免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖モ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第二百七十一條

上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

第二百七十二條

本案ノ判決ニ對スル上告ノ期間内及ヒ上告ノ申立アリタルトキハ勾留及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク外判決ノ執行ヲ停止ス

第二百七十三條

上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得

原裁判所上告申立書ヲ受取リタルトキハ速ニ其體本ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百七十四條

法律上ノ方式ニ違ヒ又ハ期間ヲ經過シタル上告ノ申立ハ原裁判所決定ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百七十五條

上告ノ申立適法ナルトキハ原裁判所ハ訴訟記録ヲ其裁判所ノ檢事ニ送致シ檢事ハ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ送致ス可シ

第二百七十六條

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢事ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キモノトシテ上告ヲ爲シタル場合ニ於テ被告人自ラ辯護士ヲ選任セザルトキハ上告裁判所長ハ其裁判所所在地ノ辯護士中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第二百七十七條

上告裁判所ハ遅クとも最初ニ定メタル公判期日ノ三十日前ニ其期日ヲ上告申立人及ヒ相手方ニ通知ス可シ但辯護士ヲ選任シタル者ニ付テハ此限ニ在ラス
最初ニ公判期日ヲ定ムル前選任シタル辯護士ニ對スル呼出狀ノ送達ト最初ニ定メタル公判期日トノ間ニハ少

クとも三十五日ノ猶豫ヲ存ス可シ

第二百七十八條

上告申立人ハ遅クとも最初ニ定メタル公判期日ノ十五日以前ニ趣意書ヲ上告裁判所ニ差出ス可シ

第二百七十九條

上告ノ相手方ハ前條ノ期間内ニ上告ヲ爲スコトヲ得前項ノ上告ハ趣意書ヲ上告裁判所ニ差出スニ依リテ之ヲ爲ス

第二百八十條

上告裁判所趣意書ヲ受取リタルトキハ速ニ其體本ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百八十一條

上告ノ相手方ハ趣意書ノ體本ノ送達ヲ受ケタル日ヨリ五日内ニ答辯書ヲ上告裁判所ニ差出スコトヲ得

第二百八十二條

上告裁判所答辯書ヲ受取リタルトキハ速ニ其體本ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第二百八十三條

裁判長ハ受命判事ヲ定ムルコトヲ得
受命判事ハ趣意書及ヒ答辯書ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可シ

受命判事ハ辯論前其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事及ヒ辯護士ハ趣意書ニ掲ケタル事項ノ範圍内ニ於テ辯論ヲ爲ス可シ

私訴ノ上告ニ付テハ檢事最終ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第二百八十四條

上告申立人又ハ相手方ヨリ辯護士ヲ差出サザルトキハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十五條

左ノ場合ニ於テハ上告裁判所判決ヲ以テ上告ヲ棄却ス可シ

第一 上告ノ申立法律上ノ方式ニ違ヒ又ハ期間ヲ經過シタルトキ

第二 期間内ニ趣意書ヲ差出サザルトキ

第三 上告理由ナキトキ

第二百八十六條

上告ノ理由アリトスルトキハ其上告ニ係ル判決ノ部分ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可シ但後二條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二百八十七條

擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ判決ヲ破毀シタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトヲ得上告裁判所ニ於テ直チニ判決ヲ爲ス可シ

第二百八十八條

公判ノ手續規定ニ背キタルコトアリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ボサザルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトヲ止メ其手續ヲ破毀ス可シ

第二百八十九條

判決ノ一分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アルトキハ其部分ヲ破毀ス可シ

第二百九十條

擬律ノ錯誤又ハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シタルニ因リ被告人ノ利益ノ爲メニ判決ヲ破毀シタルトキハ其利益ハ上告ヲ爲ササル共同被告人ニモ及ボス可シ

第二百九十一條

上告裁判所ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移ス言渡ヲ爲ス可キトキハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ指定ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ其裁判所ノ民事部ニ移ス可シ

第二百九十二條

第二百六十五條ノ規定ハ上告ニモ亦之ヲ準用ス

第二百九十三條

第一審裁判所ト第二審裁判所トト間ハ法律ニ於テ罰セザル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ期間内ニ上訴スル者ナクシテ其判決確定シタルトキハ其事件ニ付キ上告ヲ受クル權

アル裁判所ノ檢事ハ司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ其裁判所ニ非常上告ヲ爲スコトヲ得非常上告ノ理由アリトスルトキハ原判決ヲ破毀シ直チニ其事件ニ付キ判決ヲ爲スコシ

第四章 抗 告

第二百九十三條

抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタル場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十四條

抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲スコシ
抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ抗告申立人ヨリ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十五條

抗告ノ期間ハ裁判ノ送達アリタル日ヨリ三日トス

第二百九十六條

抗告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ爲シタル裁判所又ハ豫審判事ニ差出スコシ其裁判所又ハ豫審判事ニ於テ抗告ノ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルトキハ意見ヲ付シテ三日内ニ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付テハ訴訟記録ヲモ送致スコシ

第二百九十七條

抗告裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ書類ニ依リ抗告ノ裁判ヲ爲スコシ

第二百九十八條

豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付キ抗告裁判所ニ於テ必要ナリトスルトキハ受命判事ヲシテ事件ノ取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシムルコトヲ得
受命判事ハ豫審判事ニ屬スル處分ヲ爲スコトヲ得

第二百九十九條

抗告裁判所ニ於テハ抗告ヲ許スコキヤ否ヤ又抗告ノ期間内ニ於テ申立ヲ爲シタルヤ否ヤヲ調査シ此要件ノ一ヲ闕クトキハ其抗告ヲ棄却スコシ

第三百條

抗告裁判所ニ於テ抗告ノ理由アリトスルトキハ原裁判ヲ取消シ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又抗告ノ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却スコシ

第六編 再 審

第三百一條

再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪、輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲スコトヲ得但判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一 人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタルモ其殺サレタリト認メラレシ者犯罪後生存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタル確證アリタルトキ

第二 同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三 犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ

第四 被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五 公正證書ヲ以テ訴訟記録ニ偽造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六 判決ノ憑據ト爲リタル民事上ノ判決他ノ確定ト爲リタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキ

第三百二條

再審ノ訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

第一 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事

第二 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事

第三 刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事

但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス

舊刑事訴訟法

可シ

第四 刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五 刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

第三百三條

再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラズ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四條

再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原判決ノ謄本及ヒ證書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出スコシ
原裁判所ノ檢事ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ差出スコシ

第三百五條

上告裁判所ニ於テハ檢事ノ請求ニ因リ速ニ受命判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告ヲ爲サシム可シ

第三百六條

上告裁判所ニ於テハ受命判事ノ報告及ヒ檢事ノ意見ヲ聽キ判決ヲ爲スコシ

第三百七條

上告裁判所ニ於テ再審ノ理由アルコトヲ認メタルトキハ原判決ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ付キ再審ヲ爲スコキコトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所ト同等ナル他ノ裁判所ニ移スコシ
其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲スコシ

第三百八條

死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタル場合ニ於テ上告裁判所ニテ再審ノ理由アルコトヲ認メタルトキハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スコトナク原判決ヲ破毀スコシ

第三百九條

再審ノ判決ニ因リ無罪ノ言渡アリタルトキ又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタルトキハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其判決ヲ揭示スコシ

第七編 大審院ノ特別權限ニ屬スル訴訟手續

第三百十條

裁判所構成法第五十條第二號ニ記載シタル大審院ノ特別權限ニ屬スル犯罪ニ付テハ檢事總長其捜査ヲ爲スコシ
地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官モ亦其犯罪ニ付キ捜査ヲ爲シ檢事總長ニ報告スコシ

第三百十一條
前條ニ記載シタル犯罪ノ現行犯アル場合ニ於テ急速ヲ要スルトキハ地方裁判所、區裁判所ノ檢事及ヒ司法警察官ハ第四百四十四條及ヒ第四百四十七條第一項ノ規定ニ從ヒ豫審處分ヲ爲スコトヲ得但豫審判事ニ通知スルコトヲ要セス

第三百十二條

前條ノ場合ニ於テハ地方裁判所檢事ヨリ證據書類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事總長ニ送致スコシ

第三百十三條

檢事總長ハ何レノ場合ニ於テモ其事件大審院ノ特別權限ニ屬シ且起訴スコキモノト認メタルトキハ豫審判事ヲ命スコキコトヲ大審院長ニ請求スコシ

第三百十四條

大審院長ヨリ命ヲ受ケタル豫審判事ハ豫審ヲ爲シタル上ニテ他ニ取調ヲ要スルコトナシト思料シタルトキハ訴訟記録ニ意見ヲ付シ大審院ニ差出スコシ

第三百十五條

大審院ニ於テハ檢事總長ノ意見ヲ聽キ先ツ其事件ヲ公判ニ付スコキヤ否ヲ決定スコシ
其事件地方裁判所又ハ區裁判所ノ權限ニ屬スルモノト決定シタルトキハ管轄裁判所ヲ指定シ其事件ヲ送致ス

可シ若シ特別裁判所ノ權限ニ屬スルモノト認メタルトキハ決定ヲ以テ管轄處ノ言渡ヲ爲スコシ
又第四百六十五條ニ記載シタル場合ニ於テハ決定ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲スコシ

第三百十六條

前數條ニ於テ特ニ規定シタルモノヲ除ク外豫審、公判ノ手續ハ第三編第四編ノ規定ヲ準用ス

第八編 裁判執行

第一章 裁判執行

第三百十七條

刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス
監獄ニ於テ執行スコキ二個以上ノ主刑ノ執行ハ其重キモノヲ先ニス但特別ノ事由アルトキハ檢事ハ重キ刑ノ執行ヲ停止シ他ノ刑ノ執行ヲ爲サシムルコトヲ得

第三百十八條

死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記録ヲ司法大臣ニ差出スコシ
司法大臣ヨリ死刑ヲ執行スコキ命令アリタルトキハ三日内ニ其執行ヲ爲スコシ

第三百十八條ノ二

死刑ノ執行ハ檢事及ヒ裁判所書記ノ立會ニテ之ヲ爲スコシ

第三百十八條ノ三

死刑ノ言渡ヲ受ケタル者心神喪失シタルトキハ司法大臣ノ命令ニ因リ其瘞癒ニ至ルマテ執行ヲ停止ス
死刑ノ言渡ヲ受ケタル婦女懐胎ナルトキハ分娩後司法大臣ノ命令アルニ非サレハ執行ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十九條

死刑ヲ除ク外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行スコシ
懲役、禁錮又ハ拘留ノ言渡ヲ受ケタル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其事故ノ止ムマテ刑ノ執行ヲ停止スルコトヲ得
一 心神喪失ノ状態ニ在ルトキ
二 刑ノ執行ニ因リ生命ヲ保ツコト能ハサル虞アルトキ
三 受胎後七月以上ナルトキ
四 分娩後一月ヲ經過セザルトキ

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ通レタル者ニ對シ檢事ノ發

舊刑事訴訟法

シタル逮捕状ハ勾留状ト同一ノ效力有ス其間席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタルモノ亦同シ

第三百二十條

刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢察又ハ上告裁判所ヨリ命テ受ケタル裁判所ノ檢察ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ刑ノ執行ノ停止ニ付キ亦同シ
罰金、科料、訴訟費用及ヒ沒收物品、追徴金ハ檢察ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ
前項ノ徵收ニ付テハ非訟事件手續法第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第三百二十一條

破産又ハ廢業ス可キ沒收物品ハ檢察之ヲ處分ス可シ
死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百二十二條

刑ノ言渡テ受ケタル者其言渡ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百二十三條

賠償及ヒ訴訟關係人ニ辨濟ス可キ訴訟費用ニ付キ其判決ノ執行ハ民事訴訟法ノ規定ニ從フ

三一九條—三二三條

四二

第二章 (削除)

第三章 (削除)

附則

第一條

此法律施行前ニ受理シタル豫審ノ故障及ヒ其故障ノ判決ニ對スル上告ハ之ヲ受理シタル地方裁判所又ハ大審院ニ於テ抗告トシテ之ヲ裁判ス可シ

第二條

大審院ニ於テ既ニ受理シタル哀訴、裁判管轄ヲ定ムルノ訴及ヒ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ治罪法ノ手續ニ依リ大審院之ヲ裁判ス可シ

第三條

既ニ發シタル勾留狀收監狀ハ此法律ニ定メタル勾留狀ノ效力有ス

第四條

此法律ノ規定ニ依リ市町村長ノ爲ス可キ職務ハ市町村長ヲ置カサル地ニ在テハ其職務ヲ行フ吏員ニ屬ス

第五條

此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行シ其日ヨリ治罪法ヲ廢ス

昭和五年七月十五日 印刷
昭和五年七月十八日 發行
昭和八年三月二十五日 六版



判決總攬・續刑事訴訟法

正價 金六圓五十錢

編輯者 半田 鍵次郎

發行者 名古屋市東區關銀治町二丁目五番地

印刷者 名古屋市東區關銀治町二丁目五番地

判例調査所印刷部

半田 賢一

發賣元

東京市本郷區 駒込淺嘉町五〇

電話小石川六三六八番 振替東京二四八九九番

酒井書店

取次店

東京神田一橋通町 有斐閣

東京神田朝野京城 巖松堂

大阪北區曾根崎 大同書院

發行所

名古屋市東區 關銀治町二丁目

電話東區二二三二番 振替名古屋五九二番

判決例調査所

判例調查查所發行書目

判決總攬 民事訴訟法	判決總攬 第二續刑法	判決總攬 續刑法	判決總攬 刑 法	判決總攬 第二續商法	判決總攬 續商法	判決總攬 商 法	判決總攬 第二續民法	判決總攬 續民法	判決總攬 民 法
版三 金四圓八十錢	版三 金八 圓	版六 金六圓五十錢	版三 金二圓五十錢	版三 金六圓五十錢	版六 金六圓八十錢	版三 金三圓五十錢	版三 金十一 圓	版六 金六圓五十錢	版三 金四圓五十錢
送料 △○三十三錢 △六十二錢	送料 △○四十五錢 △七十五錢	送料 △○三十三錢 △六十二錢	送料 △○四十一錢 △四十九錢	送料 △○三十三錢 △六十二錢	送料 △○三十三錢 △六十二錢	送料 △○三十三錢 △六十二錢	送料 △○四十五錢 △七十五錢	送料 △○三十三錢 △六十二錢	送料 △○三十三錢 △六十二錢

◎判決總攬

送料
△印八內地
△印八臺鮮滿樺

目書行發所查調例決判

大審院 民事 棄却判例集 明治年間 版六 金十一圓 送料 △四十五錢	大審院 民事 破毀判例集 大正年間 版八 金八圓五十錢 送料 △四十五錢	大審院 民事 破毀判例集 明治年間 版六 金十一圓 送料 △四十五錢	◎大審院民事破毀棄却判例集					判例研究 本合 第五卷上 金三圓八十錢 送料 △六十三錢	判例研究 本合 第五卷下 金三圓八十錢 送料 △六十二錢	判例研究 本合 第六卷上 金三圓八十錢 送料 △六十二錢	判例研究 本合 第六卷下 金三圓八十錢 送料 △六十二錢	判例研究 本合 第七卷上 金三圓八十錢 送料 △六十二錢	判例研究 本合 第七卷下 金三圓八十錢 送料 △六十二錢	判例研究 本合 第八卷上 金三圓六十錢 送料 △四十九錢
---	---	---	----------------------	--	--	--	--	---	---	---	---	---	---	---

目書行發所查調例決判

判例研究 本合 第四卷下 金三圓八十錢 送料 △六十三錢	判例研究 本合 第四卷上 金三圓八十錢 送料 △六十三錢	判例研究 本合 自第一卷 至第三卷 金五圓五十錢 送料 △六十二錢	◎判例研究					判決總攬 總索引 上卷 中卷 下卷 刊新 金上中下三冊 二十五圓 送料 △四十三錢	判決總攬 諸法令下卷 版十 金八圓 送料 △六十二錢	判決總攬 諸法令中卷 版七 金四圓 送料 △四十九錢	判決總攬 諸法令上卷 版七 金六圓五十錢 送料 △六十二錢	判決總攬 續刑訴訟法 版五 金六圓五十錢 送料 △六十二錢	判決總攬 刑事訴訟法 版七 金三圓五十錢 送料 △四十九錢	判決總攬 續民事訴訟法 版五 金八圓五十錢 送料 △七十五錢
---	---	---	--------------	--	--	--	--	--	---	---	--	--	--	---



